



「やらせ」なんか怖くない

Making Do

カレン・エリザベス・L 作

前橋梨乃 訳

自分の人生を振り返ってみて、いったいどの時点で道はずれたのだろうと思うことがよくある。

まあ、すぐに思いつくのは、やはり妻の死だ。私……いや、僕にとって、それまでの人生で最も大切な人、愛妻のメアリーが亡くなったのが、大きなきっかけだったことはまちがいない。

僕とメアリーは高校時代からのつきあいで、大学在学中に学生結婚した。

卒業後、メアリーは秘書として働き、僕はある保険会社に就職した。4年のうちに長男のマークと次男のトミーが生まれ、そのころには僕も出世の階段をそれなりに順調に昇っていた。

暮らしはけっして楽ではなかったけれど、僕らふたりも子どもたちも、こんな幸せがいつまでもつづくものと信

じていた。

それなのに、僕が一生の愛を誓った人は、ある日の仕事帰り、赤い回転灯にとりかこまれて、この世から永遠にいなくなってしまったのだ。

それからの僕は、2人の子供を抱え、必死で働いた。

以前は2人分の収入があったから、毎月の払いをしても少しくらいは遊ぶ金も残った。しかし、それが1人分になった結果、生活費に汲々とし、いっさいの余裕がなくなってしまった。その範囲内でやりくりしなければならないわけだ。

子供が大きくなってくると、友だちと同じようになにかのスポーツチームに入りたがったが、僕には、クラブの入会金さえ出してやれなかった。

アイスホッケーのスケート靴を買う金があれば、2週間分の食費がまかな

える。傷害保険として払い込む金で、3週間分のガソリンが買えるのである。

息子たちは、それにがっかりしたものの、こちらの事情もよくわかっていて、我慢してくれていた。僕は後ろめたさを感じながらも、彼らの協力に感謝した。

そんなある日のことだった。姉のスージーが、ちょっといい話があるとか言って、ぶらりとやってきた。数千ドルが楽に手に入る、僕にうってつけのチャンスなのだという。

誰かが20ドルめぐんでくれたって、僕はそれを天の恵みのように感じるだろう。数千ドルなんて、奇跡以外の何ものでもない。それだけあれば、クレジットカードの残債を精算し、つるつるになったタイヤを新品と替え、その

上、子どもたちをマクドナルドへ連れて行ってやることだってできる。

「姉さん、恩にきるよ」

僕は、肩の荷が下りるような気持ちで言った。

「で、それって、ほんとに僕にできることなのか？」

「ええ、あんたならまちがいないわ」

彼女も、にっこりとうなずいた。でも、なぜか、僕を見るその目つきが思わせぶりだ。

僕は、彼女が差し出した新聞の切り抜きを受け取った。それは、なにかの告知のようだった。

「『レディライク・スペシャル』 出演者募集」

見出しにはそうあった。

僕は、その記事にざっと目を通し、すぐに突き返した。

「冗談じゃないよ！」

思わず大声になった。

出演者を募集しているというそのテレビ番組は、素人の男が女装し、数ヵ月間、女として疑われることなく過ごせるかどうかをテーマとしたセミドキュメンタリーだったのだ。

記事によれば、応募資格は、体格は問わないが正真正銘の男であること。ただし、約2ヵ月間、体があけられる人。その間、番組プロデューサーの指示に従って女装生活を送るのだという。女として、スーパーマーケットに出かけたり、エアロビクス教室に通ったり、服を買ったり、バチエレットパーティーやブライダルシャワー(※)に出席する。それをカメラで追うのだ。

(※訳注 どちらも、アメリカの若い女性たちが結婚直前にやる「独身最後のパーティ」。通常、同性の友人だけを呼ぶ)

「どうして、だめなの？」

スージーはまるで、黒い靴より茶色の靴の方が好きなのはなぜなのかときくような口調で言った。

「決まってるじゃないか。こんなことやる気はないし、だいいち僕には向かないよ」

「あら、誰がそんなこと言ってるの？」

あんたは確実にこの賞金を手に入れられるわ。それは、あんた自身がいちばんわかってるんじゃない？」

僕の言葉に、姉さんはそう言い返してきた。

僕はあわてて、息子たちがそばにいないか見まわした。

「……も、もうガキじゃないんだ。そんな、むかしの話、持ち出すなよ」

それだけで姉さんには伝わったはずだ。もちろん、僕だって、そんなことをこと細かに話すつもりはない。

ところが、その自分自身の言葉のせ

いで、僕の想念は、自然に9歳の時のハロウィーンシーズンに戻っていた。

その年、僕には、ハロウィーンの仮装のために着る衣装がなかった。前年までに、消防士を3度、海賊を2度、警官を1度やっていたが、それらの衣装はもう小さくなっていたのだ。

でも、当時の実家もけっして裕福とは言えなず、新しい服を買うべきかどうか、ママは迷っていた。

と、それを耳にしたお節介やきの姉さんが、口を挟んできた。

「ねえ、去年、教会の聖杯祭の時、私が着たドレスなら、今の دونالد にぴったりなんじゃない？ 髪の毛とかちゃんとしたら、すっごくかわいくなると思うわ」

その時、ママの頭の中をどんな考えが駆け巡ったか、見ている僕にも、だ

いたいの察しはついた。

（そうね。お金はかからないし、わざわざ作る必要もない。それこそ、私が探していたものだわ！）

ママは、ちょっとした間、僕とスージーの姿を見比べていた。

「……や、やだよ、ママ。女の格好なんて、したくないよ」

僕はそう主張し、許しを請い、泣きさえしたのだが、それはまったく効果がなかった。

スージーが提案した10分後には、僕は、古着がしまっている屋根裏部屋に連れ込まれていた。

「どう？　かわいいでしょ、これ。とっておいてよかったわあ」

ママは、感に耐えないという口調で言った。

「もう無駄だと思ったんだけど、あんまりかわいいから、人にもあげられな

かったのよ」

ママがそこにしまっていたのは、ドレスだけではなかった。そのドレスに合わせるベールやペチコート、靴、ソックス、手袋まで一式がそろっていた。

「まあ、かわいらしいこと」

ペチコートを履いた僕にドレスを着せながら、ママはさらに熱に浮かされたようにつぶけた。

「ボタンをかけてあげるから、そっちを向いて」

僕はいやだったのだけれど、逆らえば、いつものようにお尻をたたかれそんな気がして、電気椅子に縛りつけられた囚人のような気分で振り向いた。

と、そこにいたスージーも、こらえきれないように口にした。

「ほんとにかわいいっ。男の子にしとくのはもったいないわ」

僕はいつものように、姉さんに飛びかかり文句を言ってやろうと思ったのだが、なぜかそれができなかった。その姉さんの口調が、いつもとちよつとちがったからだ。

いつも姉さんは、僕を子供扱いし、胸くそが悪くなるほど甘ったるい声でからかってくる。でも、この時は、それとはあきらかにちがっていた。からかうのではなく、僕のことを本心からかわいいと感じているのが伝わってきたのだ。そして、僕の中のなにかが、それに反応していた。

もちろん、9歳の少年である僕は、もう「かわいい」なんて言われたくはなかった。それなのに、その時、僕は、どこかでそれをうれしいと感じていた。

だから、ママに白いソックスをはかされ、レースの縫い込みが見えるよう

に上の部分を折り曲げてられている間も、僕はまるで、ちっちゃな女の子のようにおとなしく腰掛けていた。そのあとママは、ぴかぴかの白い靴を履かせ、甲の上でストラップをとめてくれた。

と、スージーがブラシを持ち出し、僕の髪の毛をいじりはじめた。

「ふだんから、長めの髪にしといてよかったわね」

僕の髪を真ん中から分けた後、前髪を垂らすようにしながら、姉さんはほんとうにうれしそうに言った。

「ほら、どんどん女の子っぽくなってくわ」

スージーがその作業を終えると、ママは僕の手を引いて、スージーのクローゼットのドアについた鏡の前に立たせた。鏡の中では、かわいい少女が呆然とたたずんでいた。

「私ずっと、こんな妹が欲しかったのよ」

スージーはそう言いながら、僕のほおにキスしてきた。僕は、そんなスージーとママの勢いに押されるように、つい笑い返し、うなずいていた。

それが、大きなまちがいだった。

「ねえ、これだけ長ければ、カールだってできるんじゃない」

スージーは、さらに有頂天になって言った。

「お姉ちゃんがやってあげるからね。ここんとこ、クルンってすれば、もっとかわいくなるわよ」

スージーは、今度はハンドカーラーを持ち出してきた。プラグを壁のコンセントに差し込み、1・2分待った後、それで僕の髪を巻きはじめた。そのブラシは熱かったけれど、姉さんは、それが僕の肌に直接触れないように気を

つけてくれていた。

僕の頭のまわりに順番にその作業が繰り返され、2分後には終わっていた。

そこで姉さんが椅子をまわし、僕はまた、鏡に向かわされた。鏡の中の女の子は、さっきより、さらにかわいくなっていた。

毛先が外巻きにカールしたその顔の横に、かがみ込んだスージーの顔が並ぶと、二人はそっくりで、たしかに姉と妹に見えた。

「ママ、今年のおハロウィーンは、私が妹をおめかししてあげるのよ」

姉さんは、得意げに言った。

「私、かわいい妹をみんなに自慢するの。待ち遠しいわ」

僕はまだ混乱し、呆然としていた。姉さんの部屋で、フリフリのいっぱいついたドレスを着て座っている自分が恥ずかしかった。でも、僕は、そんな

自分をじっと見つめていた。そして僕は、わくわくしていた。そんな自分ももっとかわいく見えるようにと、鏡に向かって、にっこりと笑いかけさえした。

と、スージーがすぐそれに気がついた。

「わっ、あんたも、いやじゃないんだ」

「……う、うん」

僕は、思わずうなずいていた。

「だけど、やっぱりおかしいよ」

「ちっとも、おかしくなんかないわ」

ママが、鏡越しにやさしい笑顔を投げかけてきた。

「ほんとにかわいいもの。そのまま、女の子になった方がいいくらい」

「えっ？ ママ、僕に女の子でいてほしいの？ スージーみたいに」

僕はあわててきいた。

「そうは言ってないわよ」

スージーが代わりに答えた。

「だけど、あんたがいいなら、これからも時々、妹になって欲しいな。ねっ、ママ、いいでしょ？」

「えっ？ ハロウィーンが終わったあともってこと？」

ママはまた、僕らの顔を交互に見ながら言った。

「でも、ドナルドだって、ずっと妹でいたいわけじゃないでしょ」

「そんなことないわよねえ、ドナルド？」

スージーがきいてきた。

「時々、私の妹……そう、女の子ならドナね。時々、ドナになってよ。そしたら、私がかわいがってたお人形だっ
てあげるわ。私の部屋で、いっしょにレコード聴いたり、いろんなドレスを着て遊んだり。ねっ、楽しいわよ。私が着られなくなった服は、まだ屋根裏

部屋にたくさんあるんでしょ、ママ？」

ママがそれに答える前に、僕は聞き返していた。

「お姉ちゃんのレコードを聴いてもいいの？ お姉ちゃんの部屋で遊んでもいいの？」

それまでスージーは、僕を自分の部屋で遊ばせてはくれなかった。ステレオだって、自分だけで独占して、僕にさわらせてはくれなかった。でも、妹なら、ずっといっしょに遊んでくれるのだという。

「ねえ、ママ。僕、ドナになるよ」

僕は、大きな声で言っていた。

「だって、スージーは、ずっと妹が欲しかったんでしょ。僕、お利口な妹になるから」

ママは、ちょっと困ったように、僕らの顔を見ていた。

「ねえ、ママ、あたしも、新しい妹を

ちゃんとかわいがるから。いいでしょ」
スージーがそう言うと、ママは苦笑しながら肩をすくめた。

「じゃあ、ドナも今日から家族の一員ね。でも、パパはなんて言うかな？新しい娘ができたことを喜んでくれるかしら？」

「ママが言ってくれば、パパは賛成するわ。いつだってそうでしょ」

スージーは笑いながらそう言うと、僕の手をとり、椅子から立たせた。

「ねえ、屋根裏部屋で、もっと服を探しましょ」

「せっかくのドレスなんだから、汚しちゃだめよ、……ドナ」

ママは、そんな僕らをとめず、そう声をかけてきた。

「じゃあ、スージー、ドレスが台無しになる前に、ふだん着を探して着替えさせてあげて」

そのママの言葉が終わるか終わらないかのうちに、僕らは屋根裏部屋に昇っていた。そして、スージーの古い服の箱をのぞき込んだ。

「ねっ、ママったら、捨てられずに、みんなとってあるのよ」

スージーはまた、笑いながら言った。「私のかわいい妹は、いきなり、衣装持ちってわけね」

その宝物の箱を僕の部屋に運び込み、そこで僕は、いろんな服に着替えさせられた。最初はスージーに言われるままにやっていたのだが、いつの間にか、僕もそれに夢中になっていた。だから、部屋のドアが開いたのにさえ気づかなかった。

「ふむ、聞くところによると、パパに新しい娘ができたって」

パパの声に、僕らはあわててそちら

を見た。

「ということは、パパにはもう、息子はいないってことかな？」

「ううん、そんなことはないよ、パパ。僕、男の子だよ」

僕はあわてて言った。

「だけど、時々、スージーの妹になってあげることにしたんだ」

パパは、ピンクのスカートに水色のサスペンダーをした僕を、苦笑しながら見ていた。

「それ、スージーに着せられたのかい？」

「ううん、ちがうよ、パパ。これは僕が自分で選んだんだ」

僕は自慢げに言っていた。スカートの裾をつまんで、ちょっと持ち上げてみせた気もする。

「ねっ、かわいいでしょ」

ペチコートにスカート、ニーソック

スにかわいい革靴……たぶん僕は、パパの目の前で、そんな姿でいることを、いけないことだとは思っていなかったのだ。

もちろん、かっこよくて頭のいいパパは、僕にとってのヒーローだった。でも、だからこそパパは、僕の気持ちをわかってくれると感じていたにちがいない。

「たしかにすごくかわいいよ、……ドナ」

やはりパパは、そう笑いかけてくれた。

「だけど、お前は、バスケットボールのチームに入りたかったんじゃないのかい？」

「うん、パパ、約束してくれたでしょ。もう少し大きくなったら入れるって」

「うむ。でも、そのドレスじゃ、バスケットはできないよな」

「そんなの、決まってるじゃない。なんでそんな変なこと、言うの？」

僕が笑いながらきくと、パパも笑い返した。

「いや、ちょっと気になっただけさ。でも、ほんとに、チアリーダーになりたいわけじゃないんだな」

「うん、僕はバスケの選手になりたいんだよ」

パパがどうしてそんな馬鹿なことを言うのかがわからず、僕は首を振りながら言っていた。

僕は知らなかったのだが、この時パパは、僕のことを本当に心配していたらしい。僕が女の子になりたいと思っているんじゃないかと感じ、そんなことをきいたわけだ。僕の目指すのがチアリーダーでなく、まだバスケットプレイヤーだと知って胸をなで下ろしたという。

これも、数年後にパパから聞いたのだが、両親はその夜、話し合っ、僕がスージーの服を着ることを無理に禁止しない方がいいという結論に達したらしい。むりやり抑えつければ、その反発から僕がもっとそういう傾向に入り込み、かえって事をややこしくすると思ったようだ。子供のことだ。好きにさせておけば、いずれは飽きるにちがいないと考えたわけだ。そのおかげで、その後も僕は、この件に関して両親からあれこれ言われることはなかった。

一方で僕は、依然としてバスケットのクラブに入ることを楽しみにしていたし、休みの日は必ず、パパと並んでアメフトのテレビ中継に歓声を上げていた。でも、その時僕は、平然とスカートを履いていたりもした。

ともかく、その年のハロウィーンは、

すばらしいものとなった。

僕は、ペチコートとソックスと靴とともにそのドレスを着て出かけた。ママは、そのために、フリルのいっぱいついた新しいパンティまで買ってくれた。

スージーはうれしそうに僕を連れまわし、近所の人たちは、そのかわいい女の子がじつは男の子だと知って、キャンディをたくさんおまけしてくれた。

もちろん僕は、友だちにからかわれ、笑われたのだが、僕がせしめたキャンディの量を見て、彼らは黙り込んだ。彼らのうちの何人かは、来年は自分も女の子になろうと思ったにちがいがなかった。

そのあと、けっきょく僕は、14歳の時、スージーが大学に入るために家を出るまで、ドナでありつづけた。その

頃には、パンストだって履いていたし、パッド入りのブラさえつけていた。服もティーン向けのものを着ていた。メイクだって、ママやスージーと同じくらいうまくなっていた。

でも、スージーがいなくなってしまうと、女装にかける僕の熱は急速に冷めていった。その頃から僕の関心は、次第に現実の女の子たちに向くようになり、やがてドナは、子供時代の思い出として消えていった。

「どうかしたの？ ドナ」

久しぶりにその名で呼ばれ、僕は夢想から呼び覚まされた。と、どうやらそれがわかったらしく、スージーがつづけた。

「私たちが、姉妹だった時のこと、思い出してたんでしょ。楽しかったわね」

「……あ、ああ。それは認めるよ」

うそをついても仕方ないと思い、僕は苦笑した。

「でも、ずっと昔のことじゃないか」

「ふふ、もちろん私は、また、妹がほしいなんて思ってるわけじゃないわ」

スージーはそうことわってからつぶけた。

「だけど、あんたにとっては、暮らしていくのに必要なお金を稼ぐまたとないチャンスだと思ったのよ。だいじょうぶ。ドナになりきってれば、誰も気づかないわよ。そんな心配より、差し迫った心配の方が大きいんでしょ」

僕の中で、そのオーディションに出てみようかという気持ちが、まったくなかったと言えばうそになる。

たしかに僕はお金を必要としていた。その記事によれば、最終的に番組に出演する4人に選ばれなくても、その前の8人に入れば、500ドルの賞金

が出るのだそうだ。それだって、今の僕には大きな額だ。

「まあ、考えてはみるよ」

僕は、口の中でぶつぶつ言った。

「ええ、オーディションは3週間後よ」

姉さんは、そう確認した。

「その気になったら電話して。協力するから」

姉さんは、まるで僕がそのオーディションに出ると決め込んだように帰って行った。でも、どう考えたって、それは簡単なことじゃない。

そこには問題がありすぎた。オーディションだけならともかく、もし受かりでもしたら、収録のためにそのまま2ヵ月間、拘束されるのだそうだ。その間、僕は仕事を休まなければならない。上司がそれをまともな理由だと認めるとはとうてい思えないから、その

ためには、うそだってつかなければならないだろう。さらに、その後僕は、女として、全国ネットで顔をさらすのだ。姉さんはああ言ったが、ばれないなどとはとても思えない。だいいち、2ヵ月間も、子どもたちの面倒は誰が見るのだ。

僕はそう思い、おかしな考えを頭から払いのけた。

ところが、そのオーディションの1週間前になり、事態は急変した。

なんと僕は、リストラされてしまったのだ。

金曜日、突然、人事課に呼び出された僕は、そこで、僕の課が縮小されることを知らされ、解雇を通告された。

3ヵ月間は失業手当が出るということだったが、それは、通常の給料の2分の1に満たない額だ。

俄然、例の番組への挑戦が現実味を帯びてきた。

その夜、家に帰った僕は、子どもたちに首切りの事実を伝えた。でも、子どもたちには、僕の言っていることがぴんと来なかったようだ。彼らにとっては、パパが仕事に行くのは当たり前。友だちのパパもみんなそうだし、そもそもパパというのはそういうものなのだ。

僕はとりあえず、これからは、もっとお金が使えなくなるということだけをわからせた。とはいえ、そもそも、ない袖は振れないわけだ。

なぜかその夜、僕は、幸せな夢を見た。

夢の中で、僕は、ドナだった。そこでは、ドナの記憶が繰り返されていた。最初にストッキングを履いた時(それ

までのタイツなどとはちがうその感触に、なんだかお姉さんになった気がした)、初めてブラをつけた時(11歳になったのだからとスージーがつけてくれた。ちょっと大人になった気がした)、そして、13歳の誕生日には、パパが買ってくれた新しいドレスを着て、家族でディナーにまで行ったのだ。

そこで夢は一転するが、まだつづいていた。僕はメアリーと出会い、デートを重ね、結婚した。そして、2人のかわいい息子が生まれた。

すべてが幸せに満ちた夢だった。翌朝、目覚める時までは。

そこで、ベッドの上にはいたのは、たった1人で2人の息子を抱え、破産寸前になっているみじめな男だった。

早急に、なんとかしなければならぬと僕は思った。

答えは、ひとつしかないように思え

た。

相談すると、スージーは、もしオーディションに受かり出演が決まったなら、その2ヵ月間、子どもたちを預かってくれると約束してくれた。

それですべての障害がなくなり、僕は、勇んでそのオーディションに出かけたというわけだ。

指定された会場に入っていくと、そこにはおおよそ100人ほどの男が集まっていた。たいていはふつうの男物を着ていたが、中には、すでに女装で来ている人たちもいた。

そんな女装者たちを見ながら、僕はその装いに辛い点をつけていた。たいていはスカートが短すぎるし、寸法がぴちぴちすぎる。それに、メイクも濃すぎた。けっきょくそれが、かえって

男を強調することになり、少しも女には見えないのだ。

子どもの頃から女性ファッションやメイクに慣れている僕なら、けっしてこんなまちがいは犯さないだろう。

中には、ほんの少しだが、上手に女装している人たちもいた。その着こなしや身のこなしは、彼らがふだんから女性としての生活になじんでいることを匂わせていた。

ところが驚いたことに、そんな人たちは、下手な女装者たちとともに、早い段階でハネられてしまった。

どうやらこの番組のプロデューサーは、けばけばしさを求めているのではないし、一方で、経験豊富な人間をそろえたがっているのでもないようだった。

参加者の人数が次第に減っていき、昼前には、僕は、ベスト8の1人とし

て残っていた。そして、夕方には、最終的な4人に選ばれていた。もうすでに500ドルは手に入れていたし、あとは、プロデューサーが企画した番組中の仕掛けに脱落さえしなければ、僕は確実に5000ドルを手にするのだ。

ここまでくれば、それは、そんなに難しいものには思えなかった。エアロビクスはたしかにたいへんだろうが、まあ、肉体的なつらさに耐えればいいだけのことだ。女性として、髪をセットしたり、メイクしたり、服を選んで着こなすことでは、プロデューサーを感心させるだけの自信がある。

ただ、その自信を、あまり早くから表に出さない方がいいのかもしれないと思った。このオーディションの成り行きから見て、女装経験が長いことを知られたら、途中で番組から降ろされないともかぎらない。

そこで僕らは、番組が用意したあるホテルへと連れて行かれた。

「しばらくの間、ここがお嬢さん方の生活の場となります」

ADの一人が笑いながら言った。

「1時間半後に最初のグループミーティングを始めますから、それまでに、用意してある服に着替えてください。あっ、それから、脱いだ男物の服は部屋にある袋に入れて持ってきてください。しばらく、こちらで預かせてもらいます」

僕ら出演者が指定された自分の部屋に向かおうとすると、1人につき2チームのカメラクルーがついてきた。すでに番組の収録が始まっているらしい。この段階から撮られることを予測していなかった僕らが驚いた顔を見ると、クルーの1人がこう説明した。

「視聴者は、あなた方が男から女に変わっていく全過程と、そこでのリアクションや表情の変化すべてを見たがってるんですよ」

それでもさすがに、シャワーを浴びる20分間だけは撮影を許してもらえた。シャワーが終わってタオルを体に巻いた時点で、クルーを部屋に呼び入れることになった。そこで初めて女物の服を身につけるところを撮られるわけだ。

その初めての服というのは、襟とそでのところにレースの飾りのついた、薄いピンクのネグリジェだった。他にはピンクのナイロン製パンティ、そして、上から羽織るやはりピンクのローブ。ふわふわの毛がついた室内履きもピンクだった。

それを手渡されておたおたする僕のリアクションを撮ったところで、カメ

ラクルーはまたいったん部屋を出た。その間に、パンティとネグリジェを身につけるように言われた。

戻ってくると、彼らは、ネグリジェ姿の僕を姿見の前に立たせ、鏡を見ながら体を左右にねじらせたり、あげく、後ろを向かせ、僕が肩越しに見入るシーンを撮影したりした。

なるほど、これが、テレビ的リアリズムというわけだ。

とはいえ、ぴったりとフィットしたパンティの肌触りは、僕にとっては心地よいもので、僕は思わず「すてき」などと口走りそうになった。

そして、それは自然に、ドナだった頃の幸せな記憶を呼び覚ました。

スージーの部屋でお互いに着せ替えごっこをし、夕方には二人でネグリジェを着てベッドに寝転がり、レコードを聴いた日々……。

10歳の誕生日に着たのは、パステルイエローのパーティドレスだった。おそろいのフリフリパンティとペチコートやソックスもみんな黄色だ。

ドナとしては初めての誕生日だったから、ママが特別に許してくれて、スージーは僕に口紅を塗ってくれた。おまけにママ自身も、ちょっと香水を振りかけてくれた。

スージーは僕に目隠しをし、パパとママが待つリビングルームへと連れて行った。そこで目隠しをとると、目の前に、大きなバービー・ドリーム・ハウスが置かれていた。女の子なら誰もがあこがれるバービーちゃんのおうちだ。それが、あの日、僕のものになったのだ……。

そんな記憶に、思わず顔がほころびかけるのを、僕は歯を食いしばってこらえた。

いくらそんな思い出があるといっても、この時点で幸せそうな顔をするのはまずいだらう。僕は今、2ヵ月間の女性としての暮らしを前に、戸惑うふつうの男なのだ。

カメラクルーの要求に応じてポーズをとったあと、僕はローブを羽織り、室内履きを履いて、彼らの後に従いカンファレンス・ルームへと向かった。

部屋の前の廊下で、他の三人の男たち、ルシール、ミッシェル、パティ（僕らは本名は伏せたまま、決められた女性名で呼び合うように言われていた）とちょうどいっしょになった。

そこで、お互いに譲り合うように顔を見合わせた。

「レディ・ファースト」

ルシールが、僕に向かって先に行けと手で合図した。

「なにやってるんですか」

僕は笑いながら言った。

「ジェントルマンはふつう、ネグリジェとナイトローブなんか着てないでしょ」

「どっちにしても、僕らはもう、ジェントルマンなんてやってらんないみたいだよ」

パティがつけ加えた。

「ほら、部屋の中を見てよ」

けっきょく4人でいっしょに入りながら、部屋の中に見えてきたものに、僕も驚いた。

そこには、美容院のようにセットされた4つのブースが並んでいた。ヘアもネイルもメイクも、すべてがここでできるようになっている。

「皆さん、こちらに来てください」

さっきとは別のADが手招きした。ひとつの番組に、いったい何人のAD

がいるのだろうか？

「皆さんが今身につけているネグリジェの色と、ブースの色が合わせてあります。そこが、各人専用の化粧台ということになります。それぞれの席についてください。いよいよ、皆さんを女性に変えるプログラムをスタートさせたいと思います」

僕はすぐに、ネグリジェと同じピンクのブースを見つけ、そこに腰掛けた。

どうやらこのブースの担当らしい「キャシー」というネームプレートをつけた女性が、ビニールのケープを広げ、ローブの上からそれをかけた。そして、椅子の高さと傾きを調整し、シンクの上に僕の頭が出るようにした。シャンプーをはじめなのだ。

「ダルラ」

忙しく手を動かしながら、キャシーが呼びかけてきた。それが、ここでの

僕の名前だった。

「4人のメンバーがそれぞれ、髪の色を変えることになってるの。あなたは、情熱的な赤をベースにすることになったわ。これから、あなたの髪をきれいなストロベリーブロンドに染めるわね。そのあと、同じ色のエクステンションをつけて髪を長くするの。それにちょっとウェーブをかけることになると思うわ。リラックスして楽しんで。自分がいじられて、変えられていくっていうのは、女の子にとってとてもすてきなことよ。私が髪をやってる間に、他の美容師が、マニキュアやペディキュアや、ワックス脱毛もしてくれるわ。あっ、ビキニ・ワックスもね」

マニキュア、ペディキュア、ワックス脱毛はわかるとして、ビキニ・ワックスってなんだ？

僕がそう思ったのが表情に出たのだ

ろう。キャシーはそれに気づいたようだ。いや、キャシーだけでなく、カメラクルーもすぐに気づき、すかさず僕のリアクションを撮影しはじめた。

「だって、ボトムから毛がはみ出したりしたら、恥ずかしいでしょ」

彼女は、まるで女の子どうしの会話のように、くだけた口調で言った。

「ボトム？ 何の？」

なんとなくわかっていながら、僕は聞き返した。

「だから、ビキニのよ」

彼女は予想したとおりの答えを返し、さらにこんなことを言った。

「聞いてないの？ 番組の中で、クルージングの計画があるのよ。豪華客船のデッキにかわいいビキニで寝そべって、日光浴するんですって。すてきでしょ」

その言葉に驚きながらも、僕の思い

はまた、20年前の記憶に飛んでいた。

僕は、スージーといっしょに海岸に寝そべって、日光浴を楽しんだ経験がある。着ていたのは、ビキニではなく、白とピンクのワンピース水着だったが。

僕たちがシートを広げ、羽織っていたタオルをとったとたん、どこからともなく男の子たちが湧いて出てきた。そんな男の子たちが、お互いにけん制し合いながら、声をかけてきたり、冷たい飲み物を持ってきてくれたりするのには、スリルいっぱい経験だった。

でもそれは、悲しい思い出でもある。それが、スージーと過ごした最後の夏休みになったからだ。その秋には、スージーは大学入学のため、家を離れたのだ。

そして、ドナは消えていった。

でも今、ダルラは、カメラクルーの

見守る中、あの時よりずっと露出した水着で、太陽の光の中へ出ていこうとしているらしい。

「だ、だけど、いくらなんでもそれは無理でしょ。船の乗客が全員目が見えないならべつだけど、ビキニなんか着たら、すぐばれちゃうよ」

僕が言うと、キャシーはくすっと笑った。

「心配ないわ。そんな時にも、あなたたちが女の子に見えるように、ちゃんとプランができてるから」

僕は、この時になってやっと、とんでもないところに来てしまったのだと感じた。

たしかに14歳の時なら、水着が似合う女の子を演るのも、ちょっかいを出してくる男の子たちを姉さんと二人でからかって遊ぶのも、そんなに難しいことじゃなかった。

でも、まさかその20年後に、同じようなシチュエーションで、大人の男たちが言い寄ってくるのを待つ大人の女を演じなければならぬなんて思ってもいなかった。

ブライダルシャワーやショッピングは、まあ、なんとかなるだろう。でも豪華客船の上でのビキニ姿なんて、無理に決まっている。

そんな戸惑いから僕を呼び覚ましたのは、激しい痛みだった。

先刻から僕の脚にホットワックスを塗っていた女性が、両脚を塗り終わったところで、上に貼り付けたガーゼもろとも、それを引っぺがしたのだ。

脚の肌から大量に毛が抜ける痛さに、僕は歯を食いしばってこらえた。ホットワックスでの脱毛なんて、僕にとっても初めての経験だった。たしかに14歳ともなれば脱毛が必要なことも

あったが、かつての僕は、そんな時、「ナイアー」(訳注 ‘Nair’ ムース式脱毛剤のブランド)かカミソリしか使っていなかった。

「ふふ、女の子たちはいつも、これを我慢してるのよ」

その女性は、さらに僕の体毛をはぎ取りながら言った。

「今ここにいる生まれたての女の子たちは、いきなり、美人になるための集中特訓を受けてるってわけね」

もうひとつ、僕にとって予想外だったのは、バストのことだった。

僕は、かつてドナだったときと同じように、パッドを入れたブラをつけるのだと思っていたのだが、プロデューサーの考えはちがったようだ。髪を乾かしている間に、僕らの胸には、見かけも感触もほんものそっくりなブレストフォームが貼り付けられた。

はだけたネグリジェの間に揺れる36インチBカップの胸を見たとき、僕はわざわざショックを演じる必要すらなかった。カメラクルーたちは、おっぱいのある自分の姿に動揺する4人の男たちを、思う存分撮影していた。

そのあとも、僕らの苦しみはつづいた。

脚の脱毛がすむと、次に腕、そして問題のビキニエリアにワックスが塗られていった。同時進行して、眉が抜かれ、ピアスもあけられた。

僕は、他のメンバーをそっと見やりながら、この苦しみに耐えきれず、誰かが席を立つことを密かに期待していた。

先刻サインした契約書によれば、この撮影の最後までやりきれば、僕らには無条件で5000ドルが支払われる。もし途中でやめれば、受け取る額は500

ドルだ。しかし、それだけでなく、脱落した人間ができれば、その分の5000ドルは残りのメンバーで山分けするシステムになっていた。つまり、もし他のメンバーすべてが途中で脱落し、僕だけが残ったとすれば、僕の手元には2万ドルが転がり込んでくる計算になる。

その額を考えると、僕には、プロデューサーが仕掛けてくるどんな難題にも耐えられそうな気がした。

数時間後、僕の髪は肩に掛かるくらいの長さになり、美しいストロベリーブロンドの輝きとともに揺れていた。髪に合わせたアースカラーで彩られたアイメイクを、細いアーチ型の眉がさらに引き立たせていた。脚や腕、そして腹も、絹のようにすべすべになり、ビキニラインからもいっさいの毛はは

み出していない。もっこりとしたふくらみだけは問題だとしても、陰毛については完全に処理されていた。

そこで僕らは、部屋に戻ってディナー用の服に着替えるよう言われた。

もちろん忠実なカメラクルーたちも、ぴったりと寄り添いついてきた。ディナー用衣装の前に、僕らが初めてブラをつけるところを撮るためだ。

そこで用意されていた衣装が、けっしてケバいものでなかったことを神に感謝しよう。すてきなデザインの服とそれに合わせたランジェリー、そしてジュエリーは、まさに、おしゃれなレストランに出かける女性にふさわしい感じだった。

この番組の衣装コーディネーターはセンスのよい人らしく、女性なら誰でも好みそうな服を、細心の注意を払って選んでいるようだ。

僕の服は、ペールイエローのシルクのワンピースだった。袖は腕が透けて見えるほど薄く、ひらひらのスカートは、僕が一步踏み出すごとに魅惑的に揺れるだろう。襟ぐりはVカットで、深く入ったその切れ込みからは、さっきできたばかりの僕の乳房がちらりとのぞくはずだ。

ブラとスリッパ、そしてパンティは、すべてバージンホワイト。パンティの両サイドはレースになっていて、ブラのカップもおそろいのレース。もちろん、ハーフスリッパの裾もレースが取り巻いている。

ワンピースを際立たせるゴールドのチェーンベルトもあり、さらに、パンティストッキングが何足か用意されていた。おそらく、僕が履くのを失敗して、でんせんさせてしまう場合を考えてのことだろう。

パンティを履き替えるとすぐに、カメラが前にまわり込んできた。

そこでカメラマンは、僕が必死になってブラと格闘している様子や、パンストに手こずるところを撮影した。さらに、照れながらスリップを引き上げる姿をカメラに納めた。

ドレスを着るのに長い髪がじゃまになり、困ったあげく衣装担当の助けを借りてジッパーを上げてもらうという演技をしながら、僕は、さっき、もし僕が、ブラのホックを前でとめてから後ろにまわし、そのあとでストラップに腕を通してカップの中に胸を納めるといような手際よいつけ方をしていたら、スタッフたちはどんな反応をしたかどうかと想像した。

パンストを器用に履いて腰まわりにフィットさせる姿や、ワンピースのジッパーを頭が通る程度のところまで上

げておいて、着てから残りを上げる技や、そのあとでスカートの裾からスリッパがのぞいていないか確かめる仕草を披露していたとしたら、彼らはきっと驚いたにちがいない。

それに感銘を受けた彼らは、僕をほめてくれただろう。そしてすぐに、僕をこの部屋から追い出したはずだ。僕は、このコンテストから脱落するだけでなく、すでに手にしている残念賞の資格さえ取り上げられたにちがいがなかった。

もちろん僕は、そんなドジは踏まない。

ここではまだ、女物の服など謎だらけだというふりをして、他のメンバーの脱落を待つのがベターな戦術だ。それでこそ、全賞金を独り占めする目も出てくる。

僕は、わざわざ衣装担当者の手をわ

ずらわせてワンピースを身につけ、そのあと、ハイヒールに足をすべらせた。

ただ、このハイヒールだけは、わざとらしくふらつくようなまねをしなくてよかった。かつての僕の女装はローティーンまでだったから、じつはハイヒールを履いたことがなかった。だから、そもそも簡単に履きこなすというわけにはいかないのだ。

視聴者はおそらく、僕がよたよた歩く姿をおもしろがるのだろう。たしかにその囃は、ヒールに慣れない男そのものだった。番組中、見せ場のひとつになるにちがいない。

ちょっとスタッフの助けも借りながら、危うい足取りで、僕は、番組が予約したダイニングルームまでたどり着いた。と、そこに他のメンバーたちも現れた。

ちょっとおどおどした様子のパティは、ひざのかなり上までしかないタイトな赤いワンピースを着ていた。席に着くと、そのスカート丈をなんとかもう少し伸ばせないかと、裾を引っ張って無駄な努力を繰り返した。さっきまで濃い茶色だった髪は、輝くブロンドに変えられ、ゆったりと波打っている。そのメイクは、男を誘惑する目と、キスを待っている唇をつくり出していた。この番組の中でいちばん若い彼女の役柄は、カルいブロンド娘というところだろうか？

ミッシェルは、ぴっちりした黒のワンピースと濃いめのストッキング、パールネックレスとイヤリングで、きちんとした印象にまとめられていた。ヒールの高さも、パティや僕よりずっと歩きやすそうだ。でも、そのぶん、彼女が女っぽさを醸し出すのは難しい

かもしれない。茶色の髪も短めで、耳を覆うくらい。その姿は、キャリアウーマンというのがいちばんふさわしい感じだ。

ルシールは、いずれモデルにでもなれそうな雰囲気漂わせていた。もともと彼女の顔には、豊かな唇や突き出たほお骨、大きくて印象的な目といった、男にはもったいない要素がそろっていた。メイクによって、それが際だっているのだ。彼女の衣装担当が選んだのは、太腿の半分くらいまでしかないグレーのワンピースだ。そこから突き出た脚は、まだ大きくひざを開き、その不用心さに、一部の男はよだれを垂らし、大多数の男はうんざりするだろうが、ついついそこに目が引きつけられてしまうことは事実だった。自分でやったのではない現時点のメイクや服の選択だけでは、今後、彼女がどれく

らの競争相手になるか判断できないが、少なくとも、その長くてセクシーな脚は大きなアドバンテージだ。

いや、もちろん、彼女が男であることはわかっている。でも、こんな脚と容貌を見せられては、それすら些細な欠点でしかないという気がしてくる。

女を演じることのプレッシャーに彼女自身が負けないかぎり、僕が賞金を独占するのは無理だと思えてきた。それどころか僕は、彼女が脱落しないように、手を貸したい気分にならなっていた。男であることを忘れさせるほどの彼女の美しさに心惹かれ、僕の気持ちは複雑に揺れていた。

待たされている間の僕らの会話は、どうしても愚痴っぽくなった。先刻のワックス脱毛の痛さ、絞めつけるブラのなじめない感触、ハイヒールでの歩きにくさ……そんな不満が、それぞれ

の口をついて出た。

でも、最も不満を言いたいのは……
というか、僕が最も心配しているのは、
番組の企画に組み込まれているという
例のクルージングのことだった。

「ADたちが話しているのを耳に挟んだんだけど、そのクルージングとやらで、僕らは男とダンスさせられるらしいぜ」

ルシールが言った。

「ダンスだけなら、まだいいよ。クルージングの最中、僕らはビキニを着て、デッキで日光浴するんだとさ」

僕がつけ加えた。

「うっそーっ。ビキニなんて、無理に決まってるよ」

パティも、それに同意した。

「おえーっ、かんべんしてくれよ。さっきのビキニワックスとやらは、そのためだったのかよ」

ミッシェルはうなるように言った。

「そうみたいだよ」

僕はうなずいて、つぶけた。

「要するに、僕らがみっともない思いをするかどうかなんて、プロデューサーにとってはどうでもいいんだ。いや、むしろ、みっともなく見える方が、視聴率を稼げるってことだろうね」

僕らがさらに不平を言いつづけていると、男の声がそれを遮った。

「こんばんわ。お嬢さん方」

番組のエグゼクティブ・プロデューサー、ワッツ氏だった。

「今夜の皆さんは、本当にかわいくてすてきですよ。『レディライク』のスタッフは、そんな皆さんを、今後も、心から応援したいと思っています」

僕らはそれに口をとがらせたのだが、ワッツ氏は、平然と笑いながらつぶけた。

「もうご存じだとは思いますが、皆さんが出演することになったこの番組、『レディライク』は、ふつうの男性たちが美人女性に変身して、2ヵ月間、女としての生活を送れるかというリアリズム番組です」

ワッツ氏は、まず念を押すように言った。

「その間、皆さん方が女性としての生活に順応していく過程を見せていただくお礼として、最後に番組からのプレゼントも用意されています。すでに皆さんは、私たちの期待通りの美人に変身していますが、その美しさをさらに磨くため、今後も、エステや美容院などに通っていただくこととなります」

そう言って全員を見まわしたあと、彼は話をつづけた。

「契約書の内容を見落としているといけないので、もう一度確認しておきま

すが、この撮影期間中、あなた方にはずっと女性の服を着て、化粧をし、女性として振る舞ってもらいます。やっていただくことの内容としては、新聞などで発表したとおり、日常の買い物や女性だけのパーティへの出席、エアロビクススタジオでのエクササイズ体験、そして、グランドフィナーレが含まれます。このグランドフィナーレというのは、1週間の豪華客船でのクルージングに女性として参加してもらおうという計画です。そこであなた方は、2ヵ月間の総仕上げとして、カジュアルウェアからフォーマルドレスまで、さまざまな女性の衣装を身につけることになるでしょう。クルージングですから、当然、水着も着ます」

「へえ、水着もですか？」

ルシールがとぼけてきいた。

「まさか、ビキニなんてこと、ないで

すよね」

ワッツ氏は、それに笑い返した。それは、まぎれもない悪魔の微笑だった。

「いえ、計画としてはその予定です。でも、まあ、心配はいりません。クルージングに行くまでに、女性らしい身のこなしや話し方などじゅうぶんに学んでいただくつもりです。その頃にはきっと、ビキニを着る自信もついていますよ」

そこで彼は、ちょっと語調を変えた。「もしかすると、あなた方は、そんなことのために、どうして2ヵ月間もかけるのかと思っているかもしれませんね」

その顔に、ちょっと厳めしい表情がかいま見えた。彼はたぶん、僕らに釘を刺しておくつもりなのだとは僕は感じた。

「番組で企画したいいくつかのこと……

たとえば、ブライダルシャワーだとか、街でのショッピング、もちろんクルージングにしても……それらには、皆さんが思っている以上の予算がかかっています。それを台無しにしないためには、事前の準備と努力に万全をつくす必要があります。そして、皆さん方にも、毎日、そんな努力をしていただきたいのです。日常の女性らしさを身につけること、女性としてのファッションセンスを磨くこと、爪を伸ばしてケアすること、その他、学んでいただかなければならないことは山ほどあります」

そこでまた、ちょっと語調を変え、話はつづいた。

「そうした地道な努力には、べつにサプライズなんていりません。こちらが事前に計画したとおり、あなた方は女に変身する。必要なのはそれだけです。

もちろん、契約書に記載されているとおり、あなた方には、いついかなる時も、それを拒否し契約を破棄する権利が担保されています。その権利を行使した場合は、全期間を通して契約を履行した場合に支払われるはずの報酬を受領する権利が失効する。それだけのことです」

「ん？ どういうこと？」

パティが、僕の耳もとでささやいた。

「今のって、外国語？」

と、ワッツ氏は、それに気づいたようだ。

「どうかしましたか？ ミス・ヘースティング」

その呼びかけが自分にされたことに、一瞬の間、パティは気づかず、ぼーっとした顔をしていた。

「……あ、は、はい。僕は……いや、あたしは、ミス・パティ・ヘースティ

ングでした」

「つまりですね」

ワッツ氏は、そんなパティの方を向いて、今の言葉を言い換えた。

「カメラがまわっていない時も、あなたは気を抜かず、さまざまな努力する義務があるということです。たとえばTPOに応じた服を選ぶとか、女性の日常生活に必要な知識をしっかりと身につけていただきたい。そうした細々したことについては、契約書の中の『その他付帯事項』という項目を見てください。もし、そこにあるようなことがつづけられないというなら、あなたは500ドルだけ受け取って帰ってもいい。つまり、そういうことを言ったのです。わかりますね？」

「あ、はい。なるほど」

パティはうなずいた。

僕は黙ってそのやりとりを見ていた

のだが、ワッツ氏のパーティに対する接し方は、なんだか意識的に、彼女を、頭が空っぽな女の子というキャラに誘導しているように思えた。

「ちょっと、いいですか？」

今度はルシールが手を挙げた。

「収録の間、どの程度、世間の人と関わるのでしょうか？　ことに、男との関わり方には、いろいろと抵抗も感じるのですが……」

と、ワッツ氏の顔に、笑みが広がった。

「もちろん、私たちは、どんな人間関係をも強要するつもりはありません。でも、こんなに魅力的な4人の女性を前にして、なにも起こらないと考える方が、ちょっと無理がある気もしますよね」

その口調やそぶりは、パーティに対するのとはずいぶんちがっていた。そん

なことは思いたくないが、なんだか、ルシールのパンツの中に入りたような気配すら感じさせるのだ。

そんな成り行きを見ていて、へたなことを言えば、どんどん番組のプランどおりのキャラに追い込まれていく気がして、僕は口を閉ざしてつぶきを待った。

「いずれにしても、これからあなた方には、女性としてのファッションや話し方、それにももちろん立ち居振る舞いの特訓を受けてもらいます。言っておきますが、この番組は、あなた方の愚かな失敗を見て笑うことを目的にしているわけではありません。むしろ、完璧な変身の結果、起こることを検証したいと考えているのです。他の人々と接触するような場合も、正体がばれないことはもちろん、逆に女性として好感を抱かせるだけの技能を身につけて

いただきいたい」

そこで、ワッツ氏は周囲にいるスタッフたちに目をやった。

「外出するような場合は、カメラクルーがつねにあなた方と行動をとものにします。時には隠し撮りで、時には公然と、あなた方の一挙手一投足を撮影することになります。あなた方が魅力的な女性として振る舞うところだけでなく、あなた方が出会って話す人たちのリアクションをもカメラに納めるつもりです。そんな時、あなた方が嫌がらせを受けたり、肉体的な危害を加えられたりしないよう、警備についても、あらゆる事態を想定した万全の体制で臨みます。あなた方の周囲にはつねに、非番の警官を雇ったボディガードたちが配備されています。もちろん、まわりからは気づかれないように。いったんなにかが起これば、すぐに彼らが駆

けつけるでしょう。どうか、この番組への出演が、あなた方にとって楽しい経験となるように、そして、この番組が高視聴率を獲得できるように、スタッフ一同、心より願っています」

彼はそう結んで席を立ち、そのディナーの席を、僕たちだけにしてくれた。「みんなは、実社会ではどんな仕事をしてるんだい？」

4人になると、ミッシェルが口を開いた。

「僕はITコンサルタントなんだ。企業のコンピュータとネット構築のアドバイスをしてる」

「こっちは、外回りの営業」

ルシールは、自分のドレスをちよつとつまんで照れたような顔でつぶけた。

「まあ、仕事柄、身だしなみには気をつかう方だけど、まさか、こんな身だ

しなみをするとはね」

と、ミッシェルも笑いながら、その言葉をなぞった。

「僕はボランティアでノン・プロフィット・ファンデーション(訳注 非営利基金)の仕事も手伝ってるけど、まさか、こんなファンデーションをつけるとはね」

「僕は学生。大学の2年なんだ」

パティが、ちょっと首を振りながら言った。

「専攻は経営学。5000ドルあれば、授業料のためのバイトが減らせると思って来たんだけど……」

「僕は2週間前まである会社の仕入部で働いてたんだ。でも、リストラにあっちゃってね」

僕は正直に白状した。

「で、姉貴にすすめられて、賞金目当てでオーディションを受けることにし

たってわけ。失業手当だけじゃ、とてもやってけないからさ。家には息子が2人いるし、いろいろたいへんなんだ」「ふーん、うまくいくといいね」

パティは、素直そうな笑顔でそう言ったあと、ちょっと浮かない顔になった。

「僕は、全然、自信ないけど……」

それに対し、ルシールが聞き返した。「どうしてそんな弱気なこと言うんだ？ まだ1日もたってないのに」

「だって、みんなの服を見比べてみてよ。たぶん僕が、いちばんおかしなかつこさせられてるんだから」

「ふむ、まあ僕だって、ふだんはこんなパールなんてつけないけどな」

ミッシェルが、からかうように言い返した。

「なんせ、僕の給料じゃ、こんなの、高すぎて買えない」

「よしてよ、ミッシェル、冗談じゃないんだから」

パティはさらに口をとがらせるように言った。

「じゃ、聞くけど、今この中に、コットンの下着を履いてる人はいる？ ……いないよね。ズボンを履いてる人がいないのは見ればわかるけど、じゃあ、パンストを履いてる人は？」

ミッシェルと僕が手を挙げた。それでパティは、ルシールの方を見た。

「ふつうのストッキング」

ルシールは笑いながら答えた。

「太腿のところが弾力ある生地できてて、そこでとまるタイプのやつ。履く時にパンティのタグも見たけど、そっちはサテン100%って書いてあった」

「僕はタグは見なかったけど、肌着はどれも、綿じゃないのはたしかだな」

ミッシェルも、それに同意した。

「こっちも同じ」

僕もつづけた。

「パンストのブランドは、たしか『レッグス』（訳注 “L’eggs” アメリカではポピュラーなパンスト）だったと思うけど

「ほら、みんな、そんなもんだろ。誰か、僕と交代してよ」

パティは肩をすくめながら言った。

「だって、僕が今、履かされてるのは、薄いストッキングとガーターベルト。パンティは、Tバックのひもパンなんだよ」

「ガーターベルトにTバック！」

ミッシェルは、フォークを取り落としそうになった。

「もし、ガールフレンドがそんなの着けてくれたら、僕はどんなことだってするね」

「じゃあ、これ、彼女にあげてよ」

パティは、ふてくされたような口調

で言った。

「黒のレース製でもよければだけど」

「ワオ！ 彼女を説得しなきゃ」

ミッシェルは、笑いながら答えた。

そこでパティは、ちょっと口調を変えた。

「みんなを見た、僕の予想を話していいかな？」

全員がうなずくと、パティは、ひとりひとりの顔を見ながらつづけた。

「こうして見ると、ルシールは、スタイルのいいモデルって感じだよ。ミッシェルは、キャリアウーマン。やり手だけど、女らしさは失ってないってタイプかな。ダルラは、子供第一のリトルリーグ・ママってところ。で、僕は、どっか危なっかしい妹タイプ。たぶん、スタッフは、僕らの役のイメージをそんなふうに割り当ててるんだと思うよ。目指す方向としては、ルシールは

きれいでスタイルがよくて、官能的な女性。ミッシェルは、賢くて、でも、フェミニンで魅惑的な女性。ま、役員室でもベッドルームでもね。ダルラは、美人なだけじゃなくて、やさしくて頼れるタイプ。だけど、なにより家族が大事で息子たちを愛してるリトルリーグ・ママってわけ」

そこで、ため息をついたあと、パティはつぶけた。

「で、僕は、ってことだけど……どうやら、パティって女の子は、チアリーダーらしい。考えもなしに、次から次へと男を手玉にとっていく小悪魔。セクシーなランジェリーが大好き。なぜなら、それを着けてれば、自分もセクシーな気分になれるし、いけないことだって平気でできちゃう。きっと僕は、撮影中に、チアリーダーになって、クォーターバックをデートに誘ったりす

るんだ。男たちからじろじろ見られて、よだれを垂らされるような、そんな女の子を目指すってわけさ」

パティがなぜそんなことを言い出したのか、他の三人にはもうひとつ納得できず、見やると、彼女は、それぞれの顔を見まわしながらこうつぶけた。

「もうひとつ聞きたいんだけど、この中に、赤いプッシュアップブラをつけてる人はいる？ それと、あそこの毛まで染められて、ハート型にカットされた人は？」

どうやら、彼女には、その答えがわかっているようだった。

「まさか、ここまでされるなんて、思ってもみなかったよ」

彼女は、頭を振りながら言った。

「もし、賞金のことさえなかったら、僕はスタッフに、Tバッグのねらいについて問いつめてるね」

そこで一拍おいたあと、パティは笑い出した。

「ふふ、要するに彼らは確信犯的に、僕を墮落させようとしてるわけだ。そういうもので、取り巻いてね。お尻の割れ目に食い込むようなものに、女の人たちはどうやって慣れていくのか、ほくには理解不能だよ。そんなこと、とてもできそうにない」

このディナーで、僕らは、お互いのことをよく知り合うことができた。ただ、僕の密やかな期待に反し、誰一人としてこの場を立ち去ろうという人間はいなかった。

自分が、色っぽくてお馬鹿さんな女の子にされそうだと不満たらたらパティにしても、けっして、それを自ら放棄しようとはしていなかった。

「もう、ギャラのためなら、なんだっ

てやるさ。ああ、慣れてやるとも。ほんのちょっと食い込みが痛いだけじゃないか」

最後は、やけくそ気味にそう言った。

部屋に戻り、寝る準備をした時点で、僕は、パティの推測は正しいのだろうと思った。僕のために用意されていた寝間着は、ひとつは、白いコットン製の裾の長いネグリジェで、ウエストの部分に青いリボンが飾られたもの。もう一着のひざ丈のピンクも、やはりコットン製だった。

パティやルシールに支給されているのは、おそらく、こんなものではないだろう。

翌朝、僕は、6時半きっかりに電話で起こされ、シャワーを浴びておくように言われた。今日から女性化のため

のトレーニングが始まる。その準備のために、僕の衣装担当がこちらに向かっているということだった。

ベッドから転がるように起き出した僕は、眠気をこらえ、なんとかシャワールームまでたどり着いた。

シャワールームに置かれていたライラックの香りの石けんには、その包み紙に、肌をシルクのようになめらかに保つという効能が書かれていた。やはり新品のシャンプーには、髪の毛の汚れを取ると同時に、輝きを保つことがうたわれていた。

じつは、これらを使うのは、初めてのことじゃない。

石けんを泡立てながら、僕は思わずほほえんでいた。また、子供の頃の記憶が呼び覚まされたからだ。あのころ、スージーに言われて使っていたのは、これと同じブランドの石けんとシャン

プーだった。

あの頃、お風呂に入ったのあと、髪や体から立ちのぼった女の子っぽい香りは、スージーやママといっしょで、僕はそれが大好きだった。

体のまわりにタオルを巻きつけ、僕は、今日着る服を見るため、寝室へと戻った。

僕の衣装担当であるジェニーが用意していたのは、白い紗織りのロングスカート、白とピンクのストライプが入った七分袖のコットンブラウスだった。靴は、低いヒールのサンダル。下着は、白いブラと、おそろいのナイロンパンティ（僕には、ナイロンとサテンを見分けるだけの経験はあるのだ）。パンティの上下にはレースが入っていて、ブラのカップもレース製だ。その上から、やはり裾にレースが入ったハーフスリッパをかぶった。

「今日は、メイクはなしよ」

着終わったところで、ジェニーが言った。

「だって、今日あなたたちは、自分でそれを学ぶんだから」

ミッシェルは、デニムのロングスカートとブルーのノースリーブ、それにミュールで、楽そうな服装だった。ルシールは、もちろんそれよりエレガントで、青緑色のひざ下スカートと、パフ・スリーブのついた水色のブラウスに、ヒールの高いサンダルを履いていた。

カンファレンスルームに入ると、もうすでにパティは来ていた。その姿に、僕らは息をのんだ。

長いブロンドの髪は、高い位置でポニーテールに結われ、デニムのスカートは、前夜のワンピースよりさらに短

かった。ピンクのホルターネックのトップスは、肩から背中が大きく開き、ローマ法王さえよろめかせてしまいそうだ。

スカートの裾から蛍光ピンクのサンダルまでの間にすらりと伸びた長い脚も、否応なく視線を引きつける。

その姿を見て、僕はまた、14歳の夏休みに家族で行ったバケーションのことを思い出していた。あの時、僕は毎日、今のパティと同じくらい短いスカートをはいていた。

でも、パティは、あの時の僕のように、ミニスカートを楽しんでいるだろうか？

「おはよう。みんな、よく眠れた？」

僕らが近づいていくと、パティの方から声をかけてきた。

「あら、ルシール、あいかわらずかわいい……わよ。で、リトルリーグ・マ

マは……いかが？」

「ありがとう。元気……よ」

僕も、微笑みながら調子を合わせた。
「人気者のチアリーダーは、どう……
かしら？ まあ、きかなくても、色っ
ぽいのだけはわかるけど」

「ありがと。うれしい……わ。ぼ……
あたしって、こんな色っぽい服がすっ
ごく似合うでしょ」

そこまで言ったところで、パティは
大きく首を振った。

「ちっ、くそっ！ 鏡を見たとたん、
死にたくなかったよ」

「かわいい女の子が大人になる瞬間、
自分がセクシーなことに気づいて抱く
怯え……ってことかしら？」

僕は、パティの姿に自分のものが勃
起してきたのをごまかすために、さら
につづけた。

「それとも、とてつもなく強力なエン

ジンを搭載したマシンを前に、武者震いするテストドライバーってとこ？」

と、そこでミッシェルがきいた。

「みんな、今日は、どんな下着を着せられた？ 僕はヒップ全体を包むような黄色のパンティ。たぶん、ナイロンだと思う。前のところに小さいリボンがついてた。ブラは、レースだらけ。ガールフレンドがチェックしてたウエディングドレスよりレースが多いくらいだった」

「僕はブルーのサテンのパンティにそろいのブラとキャミソール。信じられない」

ルシールがうんざりした顔で言った。

「まだいいよ。僕なんか、ピンクのTバックと小さなブラだ。完全にイケイケ」

パティはあきれたように笑った。

「まんまじゃない」

ミッシェルがからかった。

「あと、いないのは、彼氏だけ？」

「色目でも使えって？」

パティは、さらに笑いながら、ミッシェルに流し目を送った。

「ワオ！ このまま2週間もいっしょにいたら、僕はぜったい、このイケイケ姉ちゃんを自分の部屋に連れ込むな」

そこで僕らは、そんな微妙な冗談をやめなければならなかった。女の子になるためのレッスンが始まったからだ。

最初の2時間ほどはネイルケアを学び、そのあと、メイクのレッスンだった。

僕は、かつてもメイクしていたわけだが、その時は、せいぜいアイシャド

一とチーク程度だった。子供だったから、ママとパパがそれ以上許してくれないからでもあった。

それに、メアリーにしても、そんなに手の込んだ化粧をするタイプではなかった。

だから僕は、これまで僕が知らなかったいろいろなノウハウや、アイテムや、組み合わせがあることに驚いた。服に関する知識はあるにしても、そのメイクレッスンには、新たに覚えなければならぬことが山ほどあったのだ。

要するに、姉さんがその後何年もかけて身につけたことを、僕は数時間でつめこまなければならなかったわけだ。

マニキュアとメイクが終わったところで、軽い昼食をとり、午後からは、ヘアケアと立ち居振る舞いのレッスン

になった。

僕はもう、女の子としての振るまい方は身についているつもりでいた。でも、そこにも、僕の知らないことがたくさんあった。腰掛けるときにスカートの後ろをなでつけることは当然わかっていたが、レディは、立ち上がったときにもスカートの乱れを直すものらしい。それ以外に、20年に及ぶ男の生活の中で、忘れてしまっていることも少なくなかった。

どう立ち上がるのか、その時、手はどこに置いたらいいのか、女らしくものを食べるにはどうしたらいいのか…。

僕はここでも、ティーンエイジャーと大人の女の子の世界では大きなちがいがあることを思い知った。

インストラクターは、人に笑われたくないのなら、細心の注意を払わなけ

ればならないと、何度も強調した。

一方で、そんなグルーミングや行儀作法のレッスンは、僕の心にまた、幸せな記憶をよみがえらせた。ママとスージーと行った服のショッピング、パーティードレスで出かけたディナー、初めて履いたストッキングのすてきな感触、そしてもちろん、海で過ごした最後の夏のバケーション。

僕は、その2週間、ミニスカートやホットパンツ、それにオープントップが大好きな14歳のドナになりきっていた。いや、その旅行の前から……。

スージーは旅先でも僕が妹でいられるようにと思ったのだろう。女の子としての外出に慣れるため、旅行の前から、チャンスを見つけては僕を街に連れ出した。

スージーは僕にヘアセットやメイク

の方法を教えてくれ、いつも、そのできをほめてくれた。時にはホットパンツで、時には僕のスカートで、時にはスージーのを借りて、僕は、彼女といっしょに街に繰り出した。

ママとパパは、そんなふうにおめかしして出かける僕に、「初恋は失恋に終わるものよ」とか言ってからかった。もし、すでに僕が、スージーから男の子のあしらい方まで教えてもらっていたことを知ったら、両親はなんと思っただろう？

街で男の子たちと遊ぶのを、僕はいやだとは感じていなかった。同じ学校だったりしたのは、スージーは僕のことを、いとこのドナと紹介していた。そんなドナがちょっと笑いかけるだけで、男の子たちは、熱い視線を送ってきた。

ショッピングに出かけるとき、僕ら

はもちろん、ランチのお金も持って行った。でも、そこで男の子に出会えば、僕らはそのお金を服代にまわすことができた。男の子たちが、幸せそうな顔でおごってくれるからだ。

そこで僕らがしなければいけないことは、ただ、彼らといっしょに座って「会えてうれしいわ」とか言うだけでいい。女の子の買い物にまでつきあう男の子はいなかったから、それ以上やっかいなことにもならずすんだ。

この間、そんな幸せな記憶に何度も浸ったせいだろう。僕は、この収録が終わったあとのことを、ふと考えた。これが終わったあとも、女装をつづけられたらどんなにいいだろう、などと思ったのだ。

でも、その思いからは、悲しい結論しか出てこなかった。外に着て行くよ

うな女物の服を買う余裕は今の我が家にはなかったし、家の中でも、息子たちに「ドナお婆さん」を認めさせる自信はない。

それから1週間ほど、僕らは毎日、服の着こなしから表情の作り方、声の出し方、しゃべり方などさまざまなことをつめこまれ、役柄を設定してのロールプレイングなども、何度もやらされた。

その過程で、パティの推測が正しかったことが、いよいよはっきりしてきた。というより、そもそも僕らは、最初から、番組が設定した役に合わせて選ばれているのかもしれない。

全員まだ一度も外の人とはふれていなかったし、役柄を受け入れた覚えもないのだが、それぞれに提供される衣装などは、あきらかに意図的に選ばれ

ているようだった。

たとえば僕の服は、郊外に住む平均的な子持ち主婦という感じのものばかりだった。着やすそうなトップスやワンピース、そしてジーンズのスカート。

「J・C・ペニー」(※)あたりでよく見かける服だ。ネグリジェやランジェリーの類も、きれいだけれど、けっしてセクシーとは言えないものだった。

(※訳注 ‘J.C. Penney’ アメリカの最大のデパートチェーン。女性衣料の廉価販売が特徴)

ミッシェルは、最終的には、カジュアルな服よりビジネススーツの方が多くなった。ランジェリーは、僕のものよりちょっと上等で、スーツ姿の彼女をより女らしく見せるためのセクシーさに重点が置かれたたっていた。カジュアルなものは、それなり的高级ブティックに並んでいるような服が多く、成功したキャリアウーマンの休日という感

じだった。

ルシールが毎日着ているのは、彼女自身、信じられないような服だった。ニューヨーク、ロスアンゼルス、それにたぶんビバリーヒルズあたりにある超高級ブティックから取り寄せた品ばかりだったのだ。彼女のカジュアルウェア1着で、僕の服の半分は買えるだろう。彼女のランジェリーにはもちろん綿製などはなく、すべてサテンで、高級レースがふんだんに使われていた。

「あの人たち、あたしになにをさせたいのかしら？」

ある日のディナーで、ルシールは、もう使い慣れた女言葉でそう言った。「あたしのパンティは、あたしの日給と同じ額よ。あたしのドレスを女の子に送ったとしたら、それだけで1ヵ月分の給料が飛ぶわ。本気であたしに、

モデルとかやらせるつもりかしら。ついこの間までは、アベレージ・ジョーだったのに(訳注 ‘average Joe’ 「平均的アメリカ男」の意)」

「まあ、あの人たちはあの人たちに、なにか考えがあるんでしょ」

われらがイケイケ女子大生、パティがつづけた。

「あたしのパンティやブラは、これ以上考えられないっていうくらいセクシーなのばかり。腿の真ん中より長いスカートなんて1枚もないのよ。あたし、そんなに努力しなくても、今すぐ『ダラス・カウボーイ』のチアリーダーに合格できそう」

僕は思わず、隣に座るその若い美人に見入り、プロデューサーの思惑を想像していた。もしかすると、彼らは本当に、パティをどこかのチアリーダーチームに入れるつもりかもしれない。

そんないいアイデアを見逃すとしたら、スタッフの目は節穴だ。彼女なら、みごとに、ボーイフレンドのクォーターバックとそのチームのために、跳んだりねたりしてみせるだろう。

と、パティは、僕のそんな視線に気づいたようだ。笑いながらこう言った。「すべては、お金のためよ。チアリーダーになれって言うんなら、なってみせるし、言われたことはなんだってするわ。クォーターバックと寝る以外はね」

「そうよね」

ルシールも、それにうなずいた。

「あの人たちは、なんだって要求できる。で、あたしは、それをやるっきゃない」

「あなたたち、まだそんなこと言うてるの？ あたしなんか、その段階は、とうに過ぎちゃってるわよ」

ミッシェルは、髪を耳にかけるようにしながら言った。そして、ゆっくりと脚を組むと、少しまくれあがったスカートを優雅な手つきで直した。

「逃げ出すんなら、とっくの昔に逃げてるわ。お金のためにここまで我慢してきたんだから、あとはもう、やるとかやらないとかって問題じゃないでしょ」

「そうね。あの人たちはこの1週間で、あたしたちをすっかり変えちゃったもんね」

僕は、みんなの顔を見渡しながら、思わず笑ってしまった。

「お金で買われて、仕込まれて、4人のまともな男たちも、今じゃすっかり身売り女……ってわけね」

それから数日うちには、僕らの具体的な「身売り先」も決まった。

ディナーのあとで集められた僕らは、明日の朝が、実社会へのデビューだと告げられた。

とりあえず最初の週だけは女性スタッフが付き添うが、それ以降は1人で、女性としての社会生活を送るのだという。

パティは、地域コミュニティの大学に編入することになった。ミッシェルはとりあえず、ある企業の幹部にコンサルタントとして会う。ルシールは、さまざまな分野のモデルとして活動する。そして僕は、あるデパートでパートタイムのレジ係として働く。

「これらの場所は、なにより、あなた方の安全を考えて選択されています」

ワッツ氏は、そう保証した。

「大学は協力を約束してくれていますし、その企業は私たち制作プロダクションの子会社です。また、カメラマン

はギャラ以上のことは詮索しないものです。デパートも、上には話が通っています。明日の朝、9時にこのホテルを出発して、それぞれの現場に向かいます。明日着ていく服を選んだ上で、美容のためにも、今夜はゆっくり寝てください」

そこで話が終わるのかと思っていると、ワッツ氏はちょっと口調を変えてつづけた。

「ところで、ここで皆さんにご相談があります。スタッフで検討した結果、若干の計画変更をすることにしました。契約に追加して、皆さんにはそれぞれ、さらなる課題に挑戦をしていただきたいのです。非常に重要なことですから、よくきいてください」

他のメンバーたちを見やると、みんな、僕同様、緊張した面持ちで聞き入っていた。

彼らは、僕らを失脚させるために、
なにかたいへんなことを仕掛けてくる
つもりだろうか？　たとえば、「プレイ
ボーイ」のグラビアに出ろとか、そ
んな類のことを言うてくるんじゃない
だろうか？

「リラックスしてください、お嬢さん
方」

僕らの緊張がわかったのだろう。ワ
ッツ氏は、ちょっと冗談めかして言っ
た。

「それらの挑戦は、皆さんにとっても
楽しみとなるはずです」

ワッツ氏はそこで、僕らそれぞれに
ついての基本計画の詳細を説明し、そ
のあと追加する課題について語ってい
った。他のメンバーの説明を聞してい
る間も、僕の鼓動は次第に速度を速め
ていた。

「ミス・ヘースティング」

ワッツ氏は、パティに笑いかけた。
「明日はまず、スタッフの一人があなたの母親になりすまして、いっしょに大学のキャンパスを見学することになっています。じつは、男性が女子学生として入学申請するという事実を知っているのは学長周辺だけです。教職員も学生も、あなたの正体を知りません。当然、入学申請窓口の職員もです。そこで、あなたに追加する挑戦は、入学申請の段階から、あなた自身でしていただくことです。しかも、18歳の少女として。あなたは、秘書を夢見る18歳の女の子、パティ・ヘースティングスとして大学に通うことになります」

そこでワッツ氏は、ルシールに目を移した。

「ミズ・カールトン。あなたは、この短い期間の間に長足の進歩を遂げました。モデルという設定は当初から考え

ていましたが、一流ファッションモデルといえるほどになるとは、正直、思っていないませんでした。いまや、スタッフたちは、あなたの写真が雑誌を飾るのを楽しみにしています。そこで、われわれは、ある雑誌に売り込んで、特集の一部に取り上げてもらうことに成功しました」

ルシールを見ると、気絶でもしそうな顔をしていた。

「ほ、本物の……雑誌に？」

「もちろん、正真正銘の全国誌です」

ワッツ氏はうなずいた。

「その特集は、美人の変遷をテーマとしたもので、40年代・50年代のグラマラスな女性と比べ、現代の美人が、いろいろな面でいかにスマートかを語るというものです。その中であなたは、現代美人の一人として紹介されます。ショートインタビューとともに、さま

ざまな服を着たあなたのショットが掲載されるはずです」

「あー、どうしよう」

ルシールは、驚きに呆然と首を振った。

「いきなりそんな挑戦に成功したとしたら、あとは、どんな挑戦があるっていうの？」

「うむ、いい質問です。あなたに追加したい挑戦の課題というのは、じつはそのあとにあるのです。その雑誌掲載をきっかけにして、あなたには、独り立ちのモデルとして自分で仕事をとっていただきたいのです。履歴と、そのきっかけだけはこちらで用意します。そのあとは、モデルとして食べていけるところまで、自分で売り込んでみてください。あなたほどの美人なら、そんなに難しくはないと思うのですが」

次にミッシェルの名前が呼ばれた瞬

間、彼女の体がぴくりとけいれんした。
「ミズ・トレンマン。先ほども言ったように、あなたは明日からの1週間、われわれの傘下のプロダクションのひとつに、コンサルタントとして出向いてもらいます。ただ、その次の週からは、なんの関連もない一般の企業に送り込まれることになります。IT分野の優秀な女性コンサルタントであるという以外、いっさいの説明はつけずに派遣されます。そこから先のことは、あなたの力で切り開いていってください」

次はいよいよ、僕の番だった。

僕は、ひとりの主婦としてデパートで働いている。それ以上に、どんな設定があるというのだろうか？

「なにを考えているんですか、ミセス・ハルトマン。単純明快なあなたの役柄に、つけ加える挑戦課題なんてある

のかと思っているわけですね」

言い当てられて、僕がかすかにうなずくと、ワッツ氏は笑いながらつぶけた。

「こういうのはどうでしょう？ デパートで得られるパート収入だけでは、あなたは家計を支えられない。それで、夜も働くことにした」

「もうひとつアルバイトをするということですか？ それなら、そんなに難しいとも思えないんですけど」

その時、ワッツ氏の顔に、例の悪魔の微笑が浮かんだ。

「それが、カクテルバーのウエイトレスだとしたら？ あなたは、短いスカートとハイヒールで、酔っぱらいとスケベ親父の攻撃をかわしながら働く。それが、あなたの挑戦です。いかがですか？」

「は、はい。せっかく、ここまでやっ

て来たんですから……」

「ええ、これからだって、やれますよね」

ワッツ氏は、確認するようにうなずいた。

「スタッフたちは、この間のあなた方の女性としての成長ぶりを見て、可能だと思える範囲の挑戦を設定したのです。ミス・ヘースティング、あなたは、18歳のレディとして、窓口の職員を納得させることができますね？」

「そんなの、超カンタン」

パティは、いたずらっぽくうなずいてみせた。

「……っていうかあ、考えただけで、ワクワクするわ」

「けっこう。では、ミズ・カールトン。あなたに、多くのモデルの仕事を期待してもいいですか？」

「自分でも不思議だけど、あたしなら

できるはずだって、気がするのよね」

ルシールは、自信たっぷりに言った。言う前に、長い髪をふわりと揺すって見せたのは、意識的にやったことだろうか？

「わざわざ、きかなくてもけっこうよ」

ミッシェルは、自分の方から口を開いた。

「これまでも実績を上げてきた仕事ですもの。ちがうのは、スカートとハイヒールってだけでしょ」

「なんとか、やってみます」

僕はわざと不安げに、でも、にっこりとほほ笑みながら言った。

「カクテルバーのウエイトレスなんて、主婦のあたしにできるかしら。でもちょっと、面白そうね」

「よろしい。では、明日にでも、皆さんの変身を完璧にするための補正技術を提供するように手配しましょう。そ

れさえ使えば、よほど近くで身体検査でもされないかぎり、皆さんの本当の性がばれるようなことはないでしょう」

ワッツ氏が言ったことの意味がわからず、質問しようとしていると、僕らの目の前に書類フォルダーが置かれた。

「今決めた新たな挑戦について、契約書の付帯事項に条文を追加しました。確認してください。この挑戦は当初の契約にはないものですから、出演料を新たに1000ドル上乘せします。今後も、収録途中で皆さん一人一人にちょっとした挑戦をしていただくことを検討しています。その挑戦を受けていただくごとに、500ドルずつ追加していきたいと思っています。最終的に皆さんが受け取る額は7000ドルくらいにはなるはずです」

僕は、7000ドルあればなにができるか、頭の中でさっと計算していた。失業手当と合わせれば、いくつかの借金を完済し、子どもたちをファストフードに連れていき、その上、アウトレットショップでバーゲン品を買いだめできる。けっしてリッチになるわけではないが、少なくともこれで、路上で物乞いするようなはめには陥らずにすむ。

翌朝、僕は、さほど大きくはないデパートの人事課で、IDカート用の写真を撮り、パートタイム契約に必要ないくつかの書類にサインしていた。

この間の訓練のおかげだろう。キャッシャーとしての配属先が、ランジェリー売り場と婦人服売り場だと知った時にも、さほどの動揺はなかった。

僕の連絡係をも務める番組の女性ス

スタッフは、ハンドバッグの中に小型カメラを隠し、僕の女性としての初めての仕事ぶりを撮影していた。それ以外にも、客に扮したスタッフが入れ替わり立ち替わり現れ、僕が接客する姿や、同僚の女性たちとおしゃべりする姿、はては、女子トイレに駆け込むところまで隠しカメラに納めていた。

何時間か後には、僕は、そんなカメラはもちろん、自分が女性に扮しているのだということさえ気にしなくなっていた。スカートとハイヒールが、僕本来の姿であるように感じはじめていたのだ。

やがて昼休みになり、僕はランチを食べながら、いっしょに働く女性たちとあれこれ話した。それは、お互いの生活についての話題が中心だった。他の女性たちとそんなふうに結びつくことは、僕にとって新鮮で楽しい経験だ

った。これに比べれば、男はずっと心を開かない。僕はこれまで何年間か、多くの男たちと働いてきたが、彼らの家族のことについてはほとんどなにも知らなかった。

もし給料がもっといいなら、ずっとここで働きたいとさえ思った。

勤務時間が終わるまでに、僕には何人も新しい友人ができた。デパートの客からも同僚からも、完全に女として見られ、正体を疑われるようなこともなかった。

ハイヒールでの立ち仕事で足は痛かったけれど、幸運なことに、ホテルへの帰り道は、スタッフの車で運んでもらえた。

僕にとって、こんな暮らしは、ドナとして過ごしたあの夏休みと同じくらいすてきなものだった。唯一欠点があるとすれば、それは、これがやがて終

わってしまおうということだ。

この経験が、ずっと昔に捨て去ったつもりでいた感覚を呼び覚ましてしまったことは、けっしていいことではないのかもしれない。素肌を包むパンティのなめらかさと冷ややかさ、歩くごとに脚をなでるスカートの心地よいくすぐったさ、胸まわりを絞めつけるブラのかすかな拘束感、そんな感触のひとつひとつが、僕の人生の中で最も幸せだった時間と結びつき、ふたたび息づいていた。

でも、何週間後には、僕はふたたび、この喜びを捨てなければならないのだ。その時、僕は、どうするのだろうか？

かつて、女物に対する関心が薄れたとき、そこには、現実の女の子たちがいた。やがて、その中の最高の一人、メアリーが僕に寄り添ってくれた。

でも今、そのメアリーもいない。職

さえ失った僕は、メアリーが残してくれたふたつの宝物を抱え、ただ途方に暮れるばかりなのだ。

ホテルに戻り、化粧を直そうとカンファレンスルームに入ったところで、僕は、そこにいたパティを見て、あ然とした。

もちろん、パティの姿は、ここ半月近く、毎日見ているのだが、今日は、あきらかにこれまでとちがっていたのだ。

いつものようなミニスカートが似合う子供っぽいかわいらしさが消え、本当に色っぽい若い娘になっていた。肩のみでなくおへそのあたりも大きく露出した短いチューブトップ。その下に履いたホットパンツもローライズで極端に短く、しかも、まるで第二の肌とでもいうほど体の線にぴっちり張り

っている。ポニーテールがとかれた
ブロンドの髪が、肩を取り囲むように
広がっていた。

僕は、パンティの中に、慣れ親しん
だ例のうずきさえ感じていた。

「いったい、どうしたっていうの、そ
こ？」

駆け寄った僕は、彼女の股のあたり
をじっと見つめながら言った。

「あなたのも、それに、あとの2人の
レディ用のも、できあがってますよ」

そばにいた女性ADが、言った。

「ミス・ヘースティングは、彼女用に
作られた補正具を装着したんです。若
い女性らしいカーブと解剖学的見地か
らも正しく見える外性器を形づくるた
めのね。あなたも、これを着ければ、
服の選択の幅がもっと広がりますよ」

僕が首をかしげていると、パティが、
笑いながら補足した。

「つまりね、スカートだけじゃなく、ホットパンツだって、ジーンズだって、平気で履けるようになるってこと」

まだポカンとしている僕を見て、ADは微笑みながら、そこに掛かったカーテンの向こうに行けとジェスチャーで示した。

「服を全部脱いで、これを履いてみてください」

試着室のようになったカーテンの中に入ると、彼女はそう言って、リアルな肌色のアイテムを差し出した。一見、水着のようだが、内側も上下もちょっと複雑な構造をしていた。

「手助けが必要なら呼んでください」

ADが出て行ったところで、僕は服を脱ぎ、スカートとブラウスをハンガーに掛け、そして、スリッパ、ブラ、パンティ、パンストは椅子の背もたれに掛けた。

僕はその用具を履こうと思い、縦にしたり横にしたり裏返したりしたが、どうしたらいいのか、けっきょくよくわからなかった。

「どうやら、ひとりじゃあ無理みたいですね。ミセス・ハルトマン」

何分か後、ADが声をかけてきた。「ええ、お願いします。何が何だかよくわからなくて」

ちょっと恥ずかしかったが、横について教えてもらいながら、僕はその用具に足を通し、ヒップの近くまで上げたところで、僕のを折り曲げ、用具の内側についたチューブの中に押し込んだ。おそらくこれで、トイレを使うとき、座ってしか用が足せないだろう。さらに引き上げ、股の下が密着すると、そこでADが、サイドから後ろにかけて上下に出ていたひらひらの部分を、僕の肌に注意深く接着していっ

た。

継ぎ目もわからないその外見のリアルさに、僕はあ然とした。場所によって張度を変えてあるらしい素材に引っ張られて、前の部分に丘ができているにもかかわらず、陰毛は隠れずにのぞいている。ヒップは丸みを帯び、一方でウエストのくびれさえできていた。

喜びが心の底から湧いてきた。僕は、女性の体型と生殖器を持っているのだ。

そのADを抱きしめ、キスしたくなる気持ちを、やっとのことで抑えた。

「これが、あたし？」

鏡の中の全裸の女性を見つめながら、僕は思わずつぶやいていた。

彼女は豊満な乳房を持っているが、未だ垂れてきてはいない。ウエストからヒップへとつづくカーブは、若い女性向けのジーンズでもフィットするだ

ろう。下腹部もなんの出っ張りもなく、でも、ジーンズにほどよい丸みを持たせるはずだ。きっと、この女性は、子供を産んだ後もエキササイズを欠かさず、体型を維持しているにちがいない……。

「へえ、おぼさんのわりには、いい体してるじゃない」

いつの間に入ってきたのか、パティが鏡をのぞき込みながら、からかってきた。

「誰がおぼさんよっ！、このハナタレ娘が！」

僕もそれに言い返していた。

「前はもっとかわいかったのに、いつの間に、そんな生意気な娘になったのかしらね」

「そういうお年頃なのよ。あなたとはちがって。それに、あたしみたいなかわいい子は、ちょっと生意気なくらい

がちょうどいいでしょ」

パティも、笑いながらつづけた。

「そんな短いパンツをはいて、いったいなにするつもり？」

僕は、彼女のホットパンツをにらみつけながら言った。

「あなた、まさか、そんな格好で外へ出るつもりじゃないでしょうね。パパが見たら、きっと心臓麻痺を起こすわ」

「えーっ、ひど〜い、ママ。パパに言いつけるつもり？」

パティは、完全に芝居モードに入っている。

「ママもパパも、大っ嫌い！」

「わかったわよ。遊びに行くんなら、あたしが着替えてるうちに行きなさい。パパが帰ってきたら、ママがうまいこと、言っといてあげるから」

「わーっ、やっぱりママったら話せるう。愛してるわ、ママ」

パティは、そう言って、僕のほおにキスした。

ふたたびパンティとブラを着けたところで、僕は、視線を落とし、自分の体を見た。パンティの前には、やさしくゆるやかなふくらみができていた。二つの乳房は、ブラによって抱かれ守られていた。

僕はまちがいなく、こんな感覚を愛している。

果たして僕は、本当に男に戻れるのだろうか？ 戻ったとしても、気持ちの安定は保てるのだろうか？

僕とパティは、ダイエットコーラを飲みながら、女として世の中に出た最初の日の話を交わし合った。

パティは、「母親」といっしょにキャンパスを見て回った経緯を興奮気味

に話した。施設や学生たちの雰囲気をチェックし、入学申請をし、さらに彼女は、どんなコースをとったらいいのか、カウンセラーと相談までして来たという。

「キャンパスを歩いてて、女の子たちとは、すぐ友だちになれたわ。みんな笑いかけてくれて、道に迷ったら親切に案内してくれて。あたしがこの学校に入るって言ったら、いろいろ教えてくれたのよ。どの単位が取りやすいか、どの先生を避けた方がいいか、それからもちろん、カッコいい男の子たちは、どこへ行ったらつかまえられるか」

そこでちょっと、パティは浮かない顔になった。

「女の子たちが男の子をつかまえるのは簡単だとしても、男が女の子たちのおしゃべりのコツをつかまえるのってたいへんね。だって、ものすごく細か

いことまで踏み込んでくるんだもん」
さらに彼女は、首を振りながら言った。

「これまで、そんな経験、なかったから」

「それは、よくわかるわ」

僕はそこで、今日友だちになった女性たちとどんなおしゃべりをしたかを話した。彼女たちは話し始めるやいなや、自分のパス入れから子どもたちの写真を引っ張り出して、僕に見せてくれたのだ。だから僕も、あわてて同じことをした。

「彼女たち、あたしの子どもたちのこと、かわいって言ってくれたのよ」

僕は、その時のことを思い出し、にっこりと笑った。

「当たってただけろって言うでしょ。こっちが心を開けば、みんな、きっと賢くていい人たちだから」

僕らが話していると、ミッシェルとルシールがぶらぶらと近づいてきた。どうやら彼女たちも、例の用具を着け終えたようだ。

「もう、なにこれ？」

ルシールは、独り言をつぶやいていた。

「あたしは、歩くセックス・ターゲット？」

「そのとおりね。でも、それならこっちのが完璧よ」

僕はそう言って、パティの腕をとって立たせた。

「男の子たちがよだれを垂らす、この等身大フィギュアに、神のご加護を」

「ワーオ！」

ミッシェルは、パティの全身に視線を走らせながら言った。

「あたし……俺、じつは女子大生フェチなんだ。お嬢ちゃん、勉強を教えて

あげるから、俺の部屋にこないか？」

「ごめんなさ〜い。あなたとは歳がちがいすぎるわ。それに、あたし、もっと男らしい人がいいの」

パティはすねるような表情をつくって言った。

「18か19の息子がいるならいいけど、それほどの歳でもなさそうだし」

「もっとお行儀よくなさい。女の子でしょ」

ルシールがそれに乗って、叱った。

「いったい、なにがあなたをそんなふうにしちゃったの？」

「だって、キャンパスには、かっこいい男の子たちがいっぱいいたんだもん」

パティは、くすっと笑いながらそう言った。

すっかり、キャラにのめり込んでいる。それとも、これが地なのか？

僕らは、それから数週間、決められた役割での社会生活を送った。

ルシールは、毎日美しい衣装を着てモデルの仕事にいそしみ、夜は夜で、カクテルパーティに出てコネをつくった。すぐに彼女は、ファッション雑誌のレイアウトの中で大きな面を獲得しはじめた。そのギャラは、2日間の撮影で数百ドルに及び、それ以外に、ファッションショー出演のボーナスが加わった。

ミッシェルもうまくやっていた。もともと気に入っていた仕事だ。すぐに、自分だけの力で、ある企業のコンサルタント契約を取りつけてきた。どうやら、そのルックスのおかげで前より仕事がやりやすいことを、彼女は面白がっていた。

僕は毎日、親しくなったすてきな女

性たちといっしょに働いた。彼女たちは、僕を、自分たちの仲間として受け入れてくれた。僕らは、家族のことを話し、新しく仕入れたレシピとゴシップを交換し合った。そして、誰かの身に悲しいことが起こると、思い切り泣かせてあげるために、お互いの肩を貸し合った。こんな人間的な接触は、僕にとって初めての経験だったが、一度浸ってしまうと、もう捨てることはできない気がした。

パティは、ますます女子大生らしくなっていた。学生生活にもすぐなじみ、日中授業に出席するだけでなく、夜は何度も、友だちになった女の子たちと遊びに出かけた。

2ヵ月間の終わりが近づき、僕らは、当初から計画されていた挑戦のほとんどを終え、途中で追加されたいくつか

の挑戦も、大過なくこなしていた。

ちょうど女性スタッフのひとりの結婚式があったので、それに便乗し、僕らは彼女の友人として、ブライダルシャワーも楽しんだ。

パティ自身は、どこかのチアリーダーチームの入団テストを受けるつもりでいたらしいが、それには時間が足りないということで、見送りとなった。

そしていよいよ、番組最大の見せ場となるクルージングの時がやってきた。僕ら4人は、女として、いわば海の上で監禁されることになった。

もちろん、他の乗船客たちは、僕らの正体も撮影のことも知らない。客にまぎれて乗り込んだスタッフたちは、すべての撮影を、隠し撮りで行うことになっていた。

出口のない海の上で、僕らは否応も

なく、決められた役柄を演じ続けなければならぬわけだ。

年齢の差を考え、パティは、僕の娘として乗船名簿に記載された。そして、僕らは、2人でひとつの船室に入ることになった。

その時までには、僕はパティのことが大好きになっていたので、船室で2人きりになったときでさえ、彼女が僕を「ママ」と呼ぶことに抵抗を感じなかった。

それにだいいち、彼女は、すべての母親が夢見るような理想的な娘なのだ。明るくて、愛らしくて、思いやりがあって、それになにより、美人。僕は喜んでママになった。

他の2人と僕は、いっしょにクルージングを楽しみに来た女友達を装うことにした。それならいっしょにいても

おかしくないし、それぞれの経験を共有することもできる。

パティは不満そうだったが、彼女には、ミッシェルとルシールのことを「ミズ・トレンマン」「ミズ・カールトン」と呼ぶように言った。

彼女たちは、パティより年長なのだ。自分の大切な友人たちに敬意を払うよう娘に言うのは、母親として当然のしつけだろう。

出航してからの最初の数時間、僕らはびくびくしていた。乗客は何百人もいる。その全員に、僕らが本物の女性だと信じ込ませるのは簡単なことではないと思えたからだ。

荷物を解いて、船室のクローゼットにしまった後、僕らは、とりあえず、ラウンジに集合した。

ちょうど4人がけのテーブルが開い

ていたので、そこに腰掛けてくつろいでいると、船長が挨拶にまわってきて、自己紹介した後、なにか要望はないかときいた。

船長が立ち去ると、入れ替わるように、このクルージングの企画担当者がやって来た。ちょっときざっぽいブロンドのその男が、やたらパティの方に視線を走らせるので、僕は、大切な娘が連れ去られないよう注意を払わなければならなかった。

番組の企画上、しなければならないことはいろいろあった。僕らは、1週間のうちに、そのすべてに挑戦しなければならないのだ。

僕らはそこで軽い食事をとり、周囲の人と少し会話し、そのあと、僕らにとって最大の挑戦となる日光浴の準備をするため、船室へと戻った。

鏡の前で、パティは、セクシーな黄色いビキニのホックをとめていた。このビキニは、彼女をまるで磁石のように変え、船内の若い男の目を引きつけるにちがいない。

鏡に向かって、ちょっとポーズをとった後、彼女は薄手の黄色いサンドレスを頭からかぶり、サンダルを履いた。

僕の水着は、パティののに比べたらずっとおとなしめのセパレートで、色はちょっとくすんだ黄色。でも、彼女と同系色でデザインテーストも似ている。

数日前、クルージングで母と娘になると聞いた僕らは、それならおそろいのものを着るのも面白いと、いっしょに買い物に出かけた。この水着は、そこで最初に選んだものだ。

この時のショッピングは、パティにとっても僕にとっても、思い出深いも

のとなった。

パティは何着かのデニムスカートを
買いたいと言い、僕は黒のワンピース
の方がいいと主張した。と、彼女は何
枚ものTバックのパンティで応酬して
きた。で、けっきょく最後には、背中
が大きく開いた赤のイブニングドレス
と、そろいの4インチのサンダルを買
って帰った。

これで、僕のかわいい娘は、クルー
ジングのダンスクイーンになるにちが
いない。

パティと僕が上着を脱ぎ、太陽に向
かって伸びをした時、周囲の男たちが
どんな反応をしたか、スタッフたちが
ちゃんとカメラに納めてくれたこと
を、僕は心から願った。

多くの男たちが一瞬動きを止め、こ
ちらに視線を向けた。そして、パティ

から目が離せなくなかった。

僕がちらりと見ると、どうやらパーティもそれに気づいているようで、寄せられる視線をおなかいっぱい楽しんでいた。

男たちはまるで心臓が止まったように見え、さらに、ミッシェルとルシールが合流した時には、ついに昇天した。

連れの男がいない3人のゴージャスで成熟した女たち、そして、1人の若くてホットな美人娘。男たちも、そして、男の子たちも、呆然とこちらを見つめていた。

すぐに、僕たちの目の前には、頼んだ覚えのない冷たい飲み物が運ばれてきた。それが誰の仕業かは、近くの男たちの称賛を込めた顔を見るだけでわかった。

ルシールとミッシェルと僕は、丁重にカクテルを受け取り、その男たちを

おしゃべりに誘った。

僕たちは、終始ほほえみを絶やさず、男たちとの如才ない会話をこなした。ちょうど、かつてスージーと僕が、街で出会った男の子たちをあしらったように。

僕たちは、会話の主導権を男たちに渡さないように努めていた。でも、男は男だ。その押しは強く、やがてルシールが陥落した。

「ありがとう。楽しみだなあ」

ルシールの隣に座った男が言うのが聞こえた。

「じゃあ、6時半でいいかい？ 僕のルームナンバーは、4 Aエリアの17だからね」

男は、満面の笑みとともに、飲み物についてきたナプキンにその部屋番号を書きつけた。

ほほえみ返しながら受け取ったルシ

ールは、平然とそれを楽しんでいるように見えた。やがて、自分の携帯ナンバーまで教え、男の目を見つめて「かけてくれるの、待ってるわ」と伝えた。

僕はそれを、あっけにとられて見ていた。

いったい、なにが起ころうとしているんだろう？

ルシールは、どういうつもりで男からのデートの申し込みを受けたのか？

どういうつもりで、電話番号の交換までしているのか？

僕はそれを問いただしたかったのだが、彼女はまた、その新しい恋人との会話に夢中になっていた。

ルシールの行動に気をとられていたせいで、パティがなにか言ったのに気づかなかったようだ。彼女が腕をとんとんとたたいた。

「ねえ、ママ、あたし、バレーボール

してくるね」

パティはそう笑いかけながら、そばにいた若い男に手をとられ、デッキチェアから立ち上がった。

「先に、部屋に戻ってて」

その言葉とともに彼女はサンドレスを腕にかけ、水着からのぞくふくらみを揺らしながら、男の後を追った。

そんなルシールやパティの行動を見ていたせいだろうか、そこでミッシェルは、頭痛がすると言って部屋に戻ってしまった。

けっきょく、僕ひとりが取り残されるような形になった。先刻から僕の隣にいるハンサムな男を除いては。

……えっ？ ハンサム？　なんで僕は、この男のことを「ハンサム」なんて思ってるんだ？

そんな疑問が頭に浮かび、僕は思わず、その男のブルーの目を見つめてい

た。

広い肩幅、胸毛の胸、がっしりした脚、そして、トランクスの真ん中のすてきななもりあがり。

……えっ？ 僕はなにを考えてる？
すてきな……もりあがり？

僕はゲイか？ それとも、この男が？

……そうとでも考えなければ、この衝動の説明がつかない。彼の胸毛の中に指をすべり込ませたいというこの衝動……、その下にある筋肉に触れてみたいというこの衝動……。

「僕らは、君の娘さんにも友だちにも、嫌われちゃったみたいだ」

その男は、笑いかけながら言った。
「おかしいな、僕は今朝、ちゃんとシャワーを浴びたんだけどなあ。それとも、君かな？」

僕が返事する前に、彼は鼻をくんく

んさせはじめた。

彼はふざけてやっているだけだというのに、その、鼻をこちらに近づけ鳴らす様子が、僕にはまるで、獲物のおいをかぐ猟犬のように感じられた。

「いや、ぜったいに、君じゃないな」

彼は、笑いながらも、まっすぐにこちらの目を見つめてきた。

「君はいい匂いだ。特に、そのすてきな香水には、心が弾むよ」

僕は、自分自身、信じられない思いだった。

豪華客船のデッキで、夢に浮かされたようにぼんやりと見つめている僕。その視線の先には、やはりこちらを射すくめるように見つめる……男。

僕はどうかしてしまったのだろうか？　これは、家族の食費のために、数千ドルを稼ぐということに過ぎなかったはずなのに。

僕は、返事もできないほど、激しく混乱していた。

いや、身の危険を感じているのとはちがう。この男は、そんな、力づくで襲いかかってくるような人じゃない。むしろ、やさしくて、魅力的な……。ああ……。この人の胸に触れるにはどうしたらいいのか……。

……まただ！　僕は、そんな愚かなことを考えるゲイだったのか？

そう、こんなふうに、男の人を見るべきじゃない。

こんな男の人に抱きしめられたら、自分はどうなってしまうんだろなんて、想像すべきじゃない。

……男のことを、「男の人」なんて、思うべきじゃない。

「どうか、したの？」

彼がきいた。

「なんだか君は、心ここにあらずって

感じた。僕のお気に入りのジョークも、まるでウケなかったし」

僕は、その言葉にもすぐには反応できず、しばらくしてから言った。

「……あ、ごめんなさい。……そう、娘のことが、心配で。彼女にとっては、初めてのクルージングだし」

なんとか笑顔をつくったのだが、そのことに気をとられたせいで、僕は思わず、彼の腕に手をかけていた。

と、彼は、もう一方の手をその上に重ね、僕の手を包み込むように握ってきた。僕の鼓動が急速に高まった。

「彼女ならだいじょうぶだよ。君のようなママの娘なんだもの、賢いに決まってる」

「え、ええ、そうね」

僕は、彼の手のぬくもりにどぎまぎしながらも、それをごまかすために、笑顔でつづけた。

「あの子、成績もいいのよ。今学期もとってもいい成績だったの。だから、そのごほうびにって、この旅行をプレゼントしたの」

と、そこで彼が立ち上がった。僕の手を包んでいたぬくもりは離れていったが、その代わりに、彼は、僕に向かって手を差し出した。

「ちょっと、船の中を見てまわらないか。僕の体臭のせいでまわりの人間が逃げ出したなんて、他の人に思われたくないからさ」

今度こそ僕は、ちゃんと笑わなければいけなかった。

「ふふ、あたしたちに、いやな体臭なんてないのは、最初からわかってるでしょ。だけどあたしは、正体のわからない男の誘いにはのっちゃいけないって、教えられてきたの」

……いや、「すべての男の」だろう。

と、僕の新しい友人は、即座に体を折り曲げ、お辞儀した。

「失礼。僕はダン・コルベツト。僕といっしょに散歩してくれませんか？」

そんなふうになれば、誰だって断ることはできないだろう。僕だって、そうだ。

「あたしはダルラ・ハルトマン」

僕は、彼の手を取りながら言った。

「さっき逃げていったのは、娘のパティよ」

「賢くて、美人の？」

彼は、僕の手を引っ張って起きあがせながら、そうつけ加えた。

「ええ、自分の娘ながら、ほんとにきれいだと思うわ」

「いや、僕の言ったのは、ママの方さ」

ダンには笑いながらそう言い、僕の目を見下ろしてきた。

照れて、ちょっとうつむくと、目の

前に、胸毛が渦巻くダンの胸がそびえていた。

あー、この胸に抱き寄せられたら、どうしよう？

「あなたって、いつもこんなに手が早いの？」

僕は、ダンの手を離しながら、言った。

「ああ、美人の場合は、ね」

彼は、僕の手を追うようにして、ふたたび握ってきた。今度は、僕は手を引っこめなかった。

僕らは、手をつないだまま、船の中をあちこち見てまわり、やがて、若者たちがバレーボールで遊んでいるエリアまで来ていた。

ゲームの途中で、僕らに気づいたパティは、僕に向かって、ほほえみとともにオーケーサインを送ってきた。

不思議なことに僕は、ダンと手をつ

ないでいることを、少しも恥ずかしいと感じていなかった。

僕はパーティに笑い返し、軽く手を振った。

散歩をつづけるために、ダンと僕が立ち去ろうとした時だった。振り向きざま、僕は、パーティが、みごとにサーブを決めた友人に抱きつくのを見てしまった。彼女は、つま先立ちするようにして、その男にキスしていた。

しばらくそんなふう歩いた後、ダンと僕は別れたのだが、別れる前に、明日の午後も、ここで会おうと約束していた。

僕は、ダンを驚かすために、パーティに勧められて買ったコーラルピンクのサンドレスを着て行こうかと思った。

僕の新しい体型の上に着ると、そのホルターネックは胸を強調するし、い

つも履いているのよりずっと短いそのスカートは、脚そものに注目を集めことになる。

そのせいで、最初、僕は気が進まなかったのだが、パティはしつこく勧めた。

「お婆さんのわりにいい体してるんだから、見せなきゃ損よ」

あれこれ口論した末、とにかく一度着てみて、それでも気に入らないなら着なくていいという彼女の言葉に、けっきょく買うことにしたのだ。

胸を強調するホルターネック、ヒップを柔らかくに包み脚に注目を集めさせるスカート……気に入らないわけがないじゃないか！

パティが船室に戻ってきたのは、そのサンドレスを着てみていた時だった。

「デートの準備、ママ？」

パティは、笑いながら、そう声をかけてきた。

「聞かせてよ。どんなストーリー？
ママに近づいきて、手に手をとって歩いてたあのオヤジと、駆け落ちでもしようってわけ？」

「たぶんね」

僕も、笑いながら言い返した。

「あなたの方は、あのキスしてたガキと、駆け落ちでもしようってわけ？」

彼女の顔から笑いが消え、ちょっと驚いた表情に変わった。

「見られてないと思ったのに」

「服を着替えて、ディナーの席でじっくり話しましょ」

僕はそう提案した。

「母親には、大事な娘が何をしようとしてるのか、知っとく義務があるでしょ」

「よく言うわね」

スカートに履き替えながら、パティは言った。

「娘は、母親に似るのよ」

船酔いでもしたのか、ミッシェルは食欲がないと言い、ルシールはデートに出かけてしまっていたので、都合のいいことに、ディナーの席はパティと2人きりになった。

「どうしてあんなことしてたのか、自分でもよくわからないのよ、ママ」

まじめな話をしようとしているのに、僕への呼び名が「ママ」になってしまったことに驚いたのだろう。パティは一瞬、戸惑った顔をした。

「と、とにかく、この2ヶ月、毎日、スカートとパンティをはいて、女の子として行動してきたわけでしょ。だから、役にのめり込んじゃってるのね」
「よくわかるわ。あたしも同じだもの」

僕は、ダンに対して抱いた気持ちを、すべて白状した。

ダンのトランクスのふくらみに心を動かされたこと。もし、もう少しでも冷静さを失っていたら、彼の胸毛の間に、指をすべり込ませていたにちがいないということ……。

「あたしたち、自分がほんとは男であることを忘れてしまうほど、長い時間、女になろうとしてきたのね。だけど、それも、もうじき終わるわ。あたしたちは、もとの生活に戻れるのよ」

「うん」

パティはため息つくようにうなずいた。

「もとの生活にね」

そこで僕たちは、しばらくの間、お互いの顔を見つめ合っていた。今の口調から、2人とも、もとの生活に戻ることにはけっして喜びを見いだしていな

いことがわかったからだ。

青と白のフレアスカートを身につけたパティは、これまで以上に美人に見えた。薄桃色の紗織りのノースリーブは、彼女を、いつも以上に無垢な存在に見せていた。

バレーボールの最中、若い男たちは、この娘のまわりをずっと取り巻いていたのだろう。こんな美しさと無垢さを合わせ持った存在に、抵抗できる男などどこにもいないにちがいない。

でも、すぐに……そう、もうすぐそこに、こんな生活との別れの日が近づいている。そして、僕ら2人は男に戻る。僕は、僕にとって世界のすべてとも言うべき2人の息子のもとに帰る。パティは、もとの男子学生としての生活が始まる。

やがて、この番組が放送される時がくる。僕らは、おそらくそれを見るだ

ろう。そして僕らが、信じられないような時間を過ごしたことを思い出すのだ。

ディナーが終わった後も、ラウンジに残った僕らは、そこで、幾人かの新たな人々と知り合い、彼らとダンスさえした。

今日の昼間、パーティがキスした若者も、家族とともにディナーをとりに来ていた。こちらに気づいた瞬間、彼は、一目散に近づいてきた。そして、パーティがうれしそうな顔をしたのを見て、よかったら明日もバレーボールをやろうと誘った。

パーティはにっこりと笑って、明日は予定があるからと断ったあと、でも、予定が変わるかもしれないから一度電話してねと、携帯電話の番号を教えた。

「……ずるい手ね」

パティが渡したメモをまるで宝物のように持って、親たちのもとへ帰る男の子の後ろ姿を見ながら、僕は笑いかけた。

「むかしつきあった女の子たちが、よく使ってた手よ」

パティはくすっと笑ってみせた。

「忙しいから会えないって言われて、がっかりしてると、寸前になって時間ができたって、こっちを喜ばすの」

「もしかして、あたしも、ダンに対してその手を使った方がよかったかしら？　すぐOKしちゃって、安い女だと思われたかもしれぬ」

「おばさんには、その手は向かないわ。だって、もう一度狩りをして、さかりのついたオヤジを見つけてる時間もないんだし」

「おばさん？　あたしはまだ30代よ」

「じゃ、早くペッティングまで持ち込

まなきや」

パティはさらにからかってきた。

「時間を無駄にしちゃだめよ。美人っ
言ってもらえるのも、あと少しの間だ
けなんだから」

ちょうどその時、誰かが肩をとんと
んとたたいた。驚いて見上げると、ま
たハンサムな男(けっこういるもん
だ!)が、ほほえんでいた。

「踊っていただけますか？」

僕は、パティを見て、笑いかけた。

「時間を無駄にしちゃ、いけないもん
ね」

ジョーは、ダンスがうまいだけでな
く、話し上手だった。その腕に抱かれ
ている間、僕はリラックスし、安心し
ていられた。一方で僕は、なんとかし
て、ダンともダンスする機会を持ちた
いと考えていた。そうすれば、抱かれ

た時、どちらの男の方が心地よいか、比べられるだろう。

音楽が速い曲に変わり、僕は許しを請い、席に戻った。スローな曲ならなんとかかなるが、ハイヒールで速いテンポは無理だと思ったのだ。

ジョーはとてもやさしかった。僕がダンスをやめるといっしょに席に戻ってくれ、僕のことをもっと知りたいと言ってくれた。僕は、すでに夫を亡くし、きれいで知的な大学生の娘と暮らしていて、ふだんはデパートで働いているのだというようなことを話した。ジョーは子供のないまま離婚していて、営業の管理職という仕事のプレッシャーから逃れてリラックスするためにこのクルージングに参加したのだと言った。

パティが新たなボーイフレンドとともにダンスフロアを出て行った後も、

僕は、彼女が言っていたとおり、お婆さんのように席に座りつづけ、ジョーと話をしていた。

その間、僕は、少しもそれをいやだとは思わなかった。ジョーは、あらゆる点で、ダンと同じくらいハンサムで、その会話は、ダンと同じくらい楽しいものだった。

唯一残念なのは、このクルージングが終わった後、僕は二度とダンやジョーに会えないことだ。彼らが興味を持っているのは、魅力的なひとりの女性であって、けっして取るに足らない男ではないのだから。

ジョーは、僕を船室まで送ってくれ、僕らはそこで、おやすみのキスをした。それは、けっして情熱的なものではなかったし、ましてや、僕の舌で彼の扁桃腺をマッサージするようなものでは

なかった。一夜の楽しい時間への感謝として、女性が男性に贈るキスに過ぎなかった。

部屋に入ると、パティはシャワーを浴びているところだった。

バスルームから出てきた彼女が身につけたものを見て、僕は仰天した。

ピンクのベビードールだったのだ。「あたしたち、いったいなにしてるのかしらね」

僕は思わず言っていた。

「あたしは今そこで、男とキスしてたし、あなたはまるで、男に押し倒されがってるみたいなの格好をしてるし…」

「それは、ちがうわ」

パティが強い口調で反論してきた。「あたしがこれを買ったのは、ただ、きれいだったからよ。それに、これを着れば、すごく女の子っぽい気分にな

れそうだったから。うまく説明できないけど、今夜のあたしは、女の子っぽい気分でいたい。それが、すごく大事なことだって思えるの」

僕は、ハンドバッグを置き、ワンピースを脱いでクローゼットに吊し、ストッキングを脱ぎ、ガーターベルトをはずしたところで、やっと言った。

「なにか、あったの？」

と、パティの方から聞き返してきた。「ママは、さっきのキスを楽しんだ？」

「ただのキスよ」

僕は、素っ気ない口調で答えた。

「あたしは、男と結婚する気なんかないんだから」

「じつはね、あたしも今夜、リチャードとキスしたの」

そう言ってパティは、くすっと笑った。それは、思わず出てしまったという笑いだった。

「彼は、あたしのことをぎゅっと抱きしめて、キスしてきた。すてきだったわ。だからあたしも、彼の体にしがみついて、キスを返してた」

「で、あなたはそれを楽しんだの？」

彼女は、そこで視線を落とし、目をしばたかせた。

「ああっ、すごくロマンチックで、すごく幸せで、だからあたしは、何回もねだっちゃった」

僕は彼女をからかうつもりはなかった。いや、からかうことなどできなかった。

そして、そのあと、なんだか不自然な沈黙がつづいた。僕が、自分もそんな経験がしたいのかどうか、自問自答していたからだ。

「最初はね、彼が、プロムナードデッキに星を見に行かないかってきてきたの」

そのパティの声で、僕はやっと我に返った。

「……あつ、ごめん、聞いてなかった」
「だからね、彼が、プロムナードデッキで星を見ようって」

パティは、僕の注意を呼び覚ますとでもいうように大きな声で言った。

「で、あたしは、『そうか、星を見るんだ』って、素直に思ったの。馬鹿みたいだけど」

そこでちょっと沈黙した後、彼女はまた、くすっと笑った。

「ふふ、あたしはこれまで、まともに星を見たことなんてなかったのにね」

そこでまた、その時のことに思いを巡らすような時間があつて、パティはつづけた。

「プロムナードデッキに出て、ちょっと歩いて、そこにあつたベンチに腰掛けたの。それから2時間、あたしたち

は抱きしめ合って、何度もキスしたの」
ベッドの上で、幸せそうにひざを抱くパティを見ながら、僕は言った。

「楽しそうね。ダン知ってるかしら？
そのデッキのこと」

「知らなかったら、ママが教えてあげたら」

その声は、すでに、心ここにあらずという感じだった。

「きっと、なにかが起こるから」

次の日の午後、クリーム地に花柄のツーピースを着た僕は、ラウンジの椅子に腰掛け、ダンが本当に現れるかどうか、ちょっと心配しながら待っていた。約束の時間を過ぎていたからだ。

一方で、自分のしていることを馬鹿馬鹿しいと思いつながら、でも、立ち去ることなど、とてもできそうになかった。僕の中のなにかが、ダンがやって

くることを望んでいた。そして、僕をプロムナードデッキに連れ出し、パティが感じたのと同じような、女の子っぽい気分にしてくれることを。

と、僕があきらめかかったところで、彼の声がした。

「ごめん、遅れちゃって。走ってきたんだけど、君がいなかったらどうしようかと思ったよ」

彼はそう言って、僕の手をとると、甲にキスした。

「待っていてくれて、ありがとう」

「気にしないで」

僕は、ほほえみ、そして手を引っ込めながら言った。

「正真正銘のジェントルマンに出会うのは、簡単じゃないわ」

「正真正銘の美人に出会うのもね」

激しくなる僕の動悸にはおかまいなしに、彼はふたたび、僕の手をとり、

キスしてきた。

「じゃあ、ちょっと歩こうか？ 知ってる？ この船には、プロムナードデッキっていう、すてきな場所があるんだ」

「え、ええ、プロムナードデッキね。世の中は、進んでるのね」

……ザ・プロムナード・デッキ！
長足の大進歩だ。

「パティも、ゆうべ、そこで過ごしたらしいわ。すてきなことが起きる場所だって言った」

ダンは、それに笑い返し、僕を椅子から立たせた。今回は手を持つのではなく、背中に腕をまわし、引き寄せるようにした。

「君にもきっと、すてきなことが起きるよ。約束するよ」

その言葉とともに、ダンは、僕のあごの先に指をあて、持ち上げるように

した。そして……いきなり、キスしてきた。

昼日中だというのに、目の前に星がきらめいた。それに僕は驚き、心弾んだ。

手をつないでプロムナードデッキに出た僕らは、そこのベンチに腰掛け、話をして、キスをして、キスして、キスした。

「唇の皮がむけちゃいそう」

僕は、口紅を塗り直す時間を稼ぐために、ちょっと文句を言った。

「このリップスティックは、唇の荒れを防ぐっていうのがセールスポイントだけど、メーカーが、あなたを使ってテストしなかったことだけはたしかね」

「僕は、耐久性テストに協力しようと思ってるんだ」

ダンは、笑いながら答えた。

「発売する前に、メーカーは、じゅうぶんにテストを繰り返してると思うわ。基準以上のテストを要求してるのは、あなたでしょ」

僕は、そうからかって、さらに言った。

「あたし今、あなたのテストに協力するために、女の子たちが、列をつくって並んでるところを想像しちゃったわ」

と、そこで、ダンが急にまじめな顔になった。

「僕は今、本気で君に唯一のテスト対象になってほしいと思ってるんだ。君には、僕を引きつけるなにかがある。これまで、何人もの女性とつき合ってきたけど、君には、彼女たちとはちがうなにかがあるんだ。なんていうか…君と僕は、同じものを持ってるって

感じが、ずっとしてゐるんだ」

おお、主よ。あなたがどれほど正しいか、あなた自身にさえ想像できないでしょう。

僕は、ダンをこれ以上間抜けな存在にはしたくないと、強く思った。

「ダン、それ以上言わないで」

その声が、涙声になっていた。たしかに、僕の目には涙がたまりはじめていた。

「あたしには、どうしても本気になっちゃいけない理由があるの。わかって」

「子どもたちのこと？」

「え、ええ、そんなような……」

「彼らに、パパがいたっていいだろ。僕は、最高のパパになれるつもりだけだ」

最高のパパは、もういるのだ。それが、問題のすべてだった。

僕が小さく首を振ると、ダンには悲し

そうに目を落としたが、それでも、こう言った。

「これからも、会ってくれるだろ？
クルージングが終わるまでには、まだ何日かあるんだから」

「ええ、うれしいわ。それを断る理由は、なにもないから」

僕は、泣き笑いで、彼のほおにキスした。

「待ってるよ……ずっと」

ダンは、そう言いながら、もう一度、僕を抱きしめキスした。

「君は、僕にとって、特別な人なんだから」

なにを、どう考えればいいんだろう？

僕がダンに対して抱いている感情は、かつてメアリーに対して持っていた感情とほとんど同じものだ。でも、

その感情を充足させる方法は、ない。

もし彼にあれ以上言わせていたら、彼は、僕に対して永遠の愛を誓っただろう。さらに、これからの人生をともにすごそうと言ったはずだ。

そして、もし彼にあれ以上言わせていたら、僕は、それにうなずいてしまっていただろう。

それからしばらくあと、僕は、ディナーのための服を選びながら、パーティに、ことの経緯を話していた。

「……どうしたらいいか、わからないの」

僕は、すすり上げるような声で言った。また、思わず涙が出てきた。

「女として、誰かを愛してしまった人間が、男としての生活や、父親としての生活に本当に戻れるのか、それが、こわいの」

「でも、まだ、知り合って2日しかたっていないのよ。どうして、彼のことを愛してるって言えるの？」

「うそじゃないわ。目の前に運命の男が現れれば、女なら誰だってわかるわ」

と、パティは、僕の方を見て、肩をすくめるように笑ってみせた。僕が今、なにを言ったのか、気づかせたのだ。

「……もう！ ものごとがまともに考えられないほど、あの人にはあたしを狂わせてしまってるの」

「ママ、あんまり悩まないで」

パティはそう言って、僕のことを抱きしめてくれた。

「少なくともあたしだけは、ママの気持ち、わかってるから」

クローゼットの中をひっかきまわした末、僕はやっと今夜の衣装をそろえた。

白のトランペットスカート、黒ラメのキャミソール、袖が透けた黒いシフオンのジャケット。

下着は、セクシーな黒レースのTバック、薄いストッキングとガーターベルト、やはり黒のレースブラ。

それらをひとつずつ身につけていくごとに、僕は、セクシーで官能的な気分になっていった。

僕が、どうして、こんなにセクシーで官能的な気分を求めているのか、それは僕自身にもよくわからない。唯一、答えがあるとしたら、そんな気分になれることが、今の僕にとって、なにより大事だと思えるからだ。

自分を本物の女だと感じたい。ダンと過ごす初めてのディナーで、彼にふさわしい女でいたい。僕は、心の底からそう思っていた。

「すごくセクシーよ、ママ」

僕が服を着終わったところで、パティはそう言いながら、彼女のリップスティックを差し出した。

「これ、使ってみて。つやもボリューム感もあって、キスしたときの感触もすごくいいの」

受け取った僕は、その口紅を慎重に塗っていった。パティの言ったことを試すのが、待ちきれない気持ちで。

そのあと、ヒールの高い白のサンダルを履き、髪をセットし、僕はまるで、初めてのボーイフレンドを待つティーンエイジャーのようにドキドキしながら、部屋のドアがノックされるのを待った。

ノックの音が響いたとき、パティは僕を止め、自分が出るといった。

「そんな不安そうな顔、彼に見せちゃだめでしょ」

彼女の目に、僕がどうしてそんなに

不安そうに映っているのか、僕にはよくわからなかった。コンパクトをバッグに入れる間もなく、何度もメイクをチェックしていたからだろうか？ さかんに脚の上に手をすべらせ、ストッキングのよじれがないか気にしていたからだろうか？ それとも、ノックが聞こえたとたん、船室の奥の低い天井に頭をぶつけたからなのか。

「ハイ！ ダンね」

ドアを開けたパティが言った。

「あたし、パティよ。どうぞ、入って」

入ってきたダンは、僕が座しているところまでゆっくりと近づいてきて、やさしいまなざしで見下ろした。

「君が世界一の美人だってこと、僕はちゃんと伝えたっけ？」

ほほえみ返しながら、僕は立ち上がろうとしたのだが、今の言葉に夢中になったせいで、彼がどれほど近づいて

いたのか、よくわかっていなかったようだ。立った瞬間、彼の体にぶつかりそうになり、よろめき、そして結局は、彼の腕の中に受けとめられていた。

「こんな美人が、自分の方から飛び込んでくるなんて幸せな経験、初めてだ」

ダンは笑いながら、僕の体をぎゅっと抱きしめた。

僕は、彼のほおに、軽く平手打ちしてみせた。でも、けっして彼の腕から抜け出そうとはしなかった。

「こんなふうに、美人にひっぱたかれた経験は、何度もあるんでしょ？」

「いや、それも、君が最初さ」

彼はにっこりと笑うと、顔を近づけ、キスしてきた。

「できるなら、最後の人にもなって欲しいけど」

「それは……言わない約束でしょ」

僕は、やさしく諭した。

「本気には、ならないで」

「すまない。でも、こんなふうに君を抱いてると、それを忘れそうなんだ」

それは、言われなくてもわかった。そのことに、僕の気持ちは動揺していた。そのことに、僕の心は浮き立った。

僕が、彼の腕から自由になるためには、6回のキスが必要だった。3回目からあと、僕の唇と舌は、彼の激しい要求をなだめる側にまわった。ともかく、そんなふうにして僕は、その抱擁がベッドに直行するのをなんとか回避し、彼を部屋の外へと連れ出したのだ。

クルージングの残りの日々を、僕ら2人は、まるで10代のカップルのように過ごした。いっしょに食事したり、ダンスしたり、そして……、ペッティングしたり。

僕がシクスティーズやセブンティーズのファンだと知ると、ダンは毎日、僕を称える歌を歌ってくれた。それはけっして上手とは言えなかったけれど、その頃の歌手の特徴を捉えるのだけはうまく、時に、本当に彼らの歌を聴いているような気持ちにさせてくれた。

クルージングの最終日、ルシール、ミッシェル、パティ、それに僕は、久しぶりに4人でランチを食べた。パティと僕は親子という設定だったから、いっしょにいる時間も長かったが、他の2人とは、ゆっくり顔を合わせる事がほとんどなかった。

その理由を、ルシールは、恥ずかしそうに明かした。

「あたしね、完全に役になりきってたの。なにしろ、この1週間で、15人と

デートしたんだから」

「15人の男と？」

ミッシェルがあきれたように言った。

「あたしもそうとうひどいと思ったけど、あなたには負けたわ。あたしは、たった10人だもん」

「2人とも、なんてふしだらな女なの」
パティが言った。

「それに比べれば、ママとあたしなんて、清らかなもんね。あたしは、この1週間の間、ずっと2人の男の子とだけつきあってたんだから」

「あたしたちみんな、完全に自分を見失っちゃってるわね」

僕は、みんなの顔をうかがいながら言った。

「いったい、あたしたちは、いつから男をやめたんだらう？」

「それは、わかりきったことでしょ。

2カ月前、あの契約書にサインした時からよ」

ミッシェルは、そう言った。

「いつかも言ってたけど、あの契約書にサインした瞬間、あたしたちは男の誇りを捨てて、身売り女になった。そういうことでしょ？」

「でも、あたし、後悔してないわよ」

ルシールが反論した。

「この2カ月間、新しい発見がいっぱいあったもの。女の中で世の中を見られるなんて、そうそうあるチャンスじゃないでしょ。あたしは、スタッフに感謝してるわ」

「まあ、あたしも文句は言えないわね」

ミッシェルもそれを認めた。

「女が、ものごとをどんなふうに考えるのか、よくわかったから。男に戻ったあと、女の子を口説く時に使えそう」

「あたしは、文句なんて、ぜんぜんな

いわよ」

パティは髪を揺すりながら、くすつと笑った。

「だって、世の中って、ブロンドの女の子に甘いんだもん」

「で、あなたはどうなの？」

するとそこで、ルシールが、僕にきいた。

「時々、見かけると、いつも同じ男といっしょだったけど、もしかして、本気？」

「本気……なのかな？」

僕は、自分が、どうして男と恋に落ちるようなことになったのかを思い出しながら、深いため息とともに言った。

「もしできるなら、あの人と再婚したい、なんて思ったり……」

「ワオ、それって、完全に本気ってことじゃない」

ミッシェルが、笑いながら言った。

「こんなあたしでも、キスを許したのは2人だけだっていうのに」

「ねえ、そっとしといてあげて」

パティが、これ以上冗談になるのをとめた。

「彼女は、ほんとに悩んでるんだから。あんまり、問題をややこしくしないであげて」

その言葉に、他の2人は僕に近寄り、ハグしてくれた。

「うまくいけばいいわね、ダルラ」

ルシールは、僕のほおにキスした。

「あなたならきっと、いい奥さんになれると思うわ」

「これが終わったらすぐ、僕は君を連れて帰りたいよ」

ミッシェルは、男の声に戻り、やはり冗談めかして言った。

「でも、ごめん。僕は、君の娘の方に興味があるんだ」

その時、パティの顔に一瞬浮かんだほほえみの意味を、たぶん母親の僕だけが理解していた。

パティとミッシェルの間には、言うほどの年の差はない。ミッシェルが男に戻ったあと、彼の等身大フィギアとして生きることを、わが愛しい娘は、けっしていやだと思っていないようなのだ。

昼食を終えた僕らは、それぞれの部屋に戻り、クルージング最後の夜のディナーパーティに向け、準備にかかった。

僕らはみんな、この間知り合ったボーイフレンドに連れられ、そのパーティに参加することになっていた。

この夜のために僕らが選んだ服は、ボーイフレンドたちが迎えに来たとたん、彼らのズボンの前を固くさせてし

まったようだ。女としての最後のわがままと気まぐれが、彼らを困らせたとしても、それはまあ、許してもらえない。

完璧なヘアとメイクで、真っ赤なパーティドレスに身を包んだ僕たち母娘は、それぞれの男の腕の中で、歓迎のキスをした。

僕は、このすばらしい夜のことを、一生忘れないだろう。

ダンスの間はもちろん、それ以外の時も、ずっとダンの腕に抱かれ、僕はまるで天国にいるような気がしていた。

やがて、パーティ会場を抜け出した僕たちは、プロムナードデッキに出て、ベンチに腰掛けた。

そこで、もう我慢できなくなったのだろう。ダンには、ずっと封印してきた言葉を、僕に向かって、ポンと投げか

けた。

僕は、その言葉になんだかぼーっとしてしまって、数分間、口を開くことさえできなかった。

そして、僕は、泣き出していた。

「あたしだって、愛してるわ、ダン。うそじゃないの」

僕は彼の肩に顔を埋めて泣いた。

「だけど、どうしても、だめなの。この地球の上にも、それに、あたしの人生の中にも、愛した男は、あなたひとりだけ。でも、あたしには、それはできないの。どうしても、無理なの」

「君は、僕の心を奪ったんだ」

ダンは、僕をきつく抱きしめ、そうささやいた。

「もう、僕には君しか見えないんだ。これまでも、心を通わせた人は何人かいるけど、今は、そのすべてが遠くにかすんでしまった」

僕らは、激しい感情の渦の中でキスしていた。それは、メアリーが死んで以来、ずっと忘れていた情熱的なキスだった。

「せめて、これを持って行って」

彼は、そう言って、一枚のメモを手渡した。

「僕の住所と電話番号だ。もし、君の心が変わったら、いつでも電話してほしい。僕は、どんなことがあっても、すぐ、君のところに飛んでいくよ」

次の日、ホテルに戻った僕らは、そこで最後の別れをかわし、それぞれが現実の社会へと戻っていった。

他の人はどうか知らないが、僕は、ダルラをホテルに残していくことが、本当につらかった。

2ヵ月ぶりの再会を、子供たちは喜

んだ。

スージーは、僕が持ち帰った写真とともに話したストーリーを気に入ってくれたようだ。ただし、息子たちには、詳しい内容は、番組が放送されるまで内緒だと伝えた。それまでに、なぜパパが他の男と熱いキスを交わしていたのかを、説明しておく時間が欲しかったのだ。

僕らの生活はまた、以前と同じように動き出した。僕はまだ失業したままだったが、番組のギャラは、我が家の暮らしを少しだけ改善した。

僕らは何度かマクドナルドに出かけ、子どもたちは数着の新しい服を手に入れた。たまっていた請求書も何件かは完済できた。たとえそれが狂気の沙汰だったとしても、あの2ヵ月間、僕らの生活の支えとなったことはまちがいない。

ほどなく、ワッツ氏の秘書から、収録したうち、クルージングの部分は、実際の放送では使わないことになったという連絡が入った。

船の上での男たちとの関係が複雑になりすぎ、編集上、收拾がつかなくなってしまうこと。そしてまた、僕らや相手の男たちの人権やプライバシーに関わる微妙なシーンが多すぎ、放送したときの責任を負いかねるということ。それが企画変更の理由らしかった。

じつは、試験的に作っただけのフルバージョンもあり、そのテープは、後日、出演者のもとに送られてきた。結局、僕らとボーイフレンドたちの情熱的なキスシーンは、そのテープの中のみ残されることになった。

番組が放送された時、息子たちといっしょに見た僕は、なにより彼らの反応を心配した。でも、意外にも彼らは、

それを面白がった。

「パパ、すごくかわいかったよ。みんな完全にだまされてたもん」

トミーは言った。

「パパたちが女じゃないってこと、ほんとに誰も気づかなかったの？」

マークは、興味津々という顔できいてきた。

「ああ」

僕はちょっと自慢げに言っていた。

「男だって見破った人は、ひとりもいなかったよ」

「妹の晴れ姿に、感動しちゃったわ」

スージーがからかった。

「でも、私のボーイフレンドを紹介するのは、ぜったいにやめとこ」

「だいじょぶ、盗ったりしないから。」

僕は、夫なんていないよ」

そう、ダンを除いては……もちろん、それは言わなかった。

数ヶ月が過ぎ、我が家の家計は、また苦しくなった。

僕は、警備員の仕事に就いていたが、その収入は、一家3人がやっと命をつなぐという程度のものであった。

ある日、かかってきた電話に何気なく出て、その声に驚いた。また、ワッツ氏の秘書だったからだ。今日と明日、ワッツ氏がこの街に来ていて、その間に、僕と会いたいということだった。

あの番組のオンエアからはもうずいぶん日がたっていたし、今さらなんだろうと思いつながら、翌日の昼、ランチをいっしょに食べる約束をした。

「また会えてうれしいよ、ダルラ」

テーブルに着くなり、ワッツ氏はそう言った。

「まずなにより、『レディライク』で

の君のがんばりに、お礼を言いたい」
「まずなにより、僕はドナルドです」
僕は、丁寧な口調で、まちがいを訂正した。

「ダルラは、あの番組の中だけの名前ですから」

「そう、今日話したかったのは、そのことなんだ。あの番組がヒットしたおかげで、うちのプロダクションの評価は確実に上がった。なにしろ、あの4人の美女が、本当は男だなんて、視聴者には信じられなかっただろうからね」

その言葉に、僕は顔を赤くしながら言った。

「ありがとうございます。ほめ言葉として受け取っておきます」

「もちろん。他意はないよ」

たしかにワッツ氏は、率直な物言い
で知られていた。

「で、じつは今、次の企画が進んでいて、それにも力を貸してもらえないかと思ったんだ」

「あの出演料は、ありがたかったです」

僕も、正直に言った。

「『レディライク』は、我が家にとって救いの神でした」

「ああ、それは承知してる。こちらも『レディライク』の成功は、君の力が大きかったと思ってるんだ。その意味も込めて、今回の仕事を受けてくれたなら、君には5万ドル出すつもりだ」

そのまま座っていられてよかった。思わずフォークが手から落ちたものの、椅子から滑り落ちることだけは、なんとか免れた。

「い、今、ご、5万……って、言いました？」

「ああ、5万プラス必要経費」

ワッツ氏は、瞬きもせず、こちらを

直視していた。その顔は、笑いさえない大まじめなものだった。……本気、なのか？

「そ、それは、大金ですね。で、でも、もし話せるんなら、内容を聞かせてもらえませんか？」

「もちろんだとも」

彼の顔に、ほほえみが広がった。

「君には、すべて知ってもらいたい。その上で、その気になれるなら、協力してもらいたいんだ」

もちろん、僕はもう、その気になっていた。5万ドルは、その気になるにはじゅうぶんすぎる額だ。

「このアイデアは、必ず、多くの視聴者の関心を集めるはずだ。1960年代のライフスタイルを完璧に再現した集落を作る。そこに、誰かに実際に住んでもらう。そこでは、当時のテクノロジーしか使えない。服装も、当時のもの

しか着られない。それに……」

「ちょ、ちょっと待ってください。気に障ったら申し訳ありませんけど、それは、いわゆる、その……パクリじゃないですか？ 前にMTVでやった、たしか……『セブンティーズ・ハウス』とかいう番組の」

「いや、まあ、パクリだとしても、そのままじゃない」

彼は、ちょっと複雑な笑いを浮かべ、言った。

「われわれの方は、あの番組で設定してた時代を、さらに10年さかのぼらせる。さらにそこに、『レディライク』のテーマを合体させる」

「つまり、そこで僕に、もう一度ダリラになれ、と？」

「視聴者からの反響は、君に関するものがいちばん多かったんでね」

「いや、今の僕には、もう一度、あれ

をやることはできません」

「あのクルージングで起こったことを、気にしてるのか？」

もちろんワッツ氏は、僕とダンの間になにがあったかを知っている。なにしろ彼は、隠し撮りされたすべての映像を見ているのだから。

「われわれは、君たち4人の人生をめちゃくちゃにしてしまうようなことは望んでなかった。だからこそ、あのクルージングのシーンは、すべてカットしたんだ」

「ええ、それは感謝してますし、あのことはもう、なにも気にしてません」

僕は、うそをついた。

「すべて、すんだことです。すべて…。いや、じつは、もっと具体的な問題があるんです。今、僕は、何ヶ月も息子たちを置いて、家を空けることができないんです。預かってくれる人間

がないもんですから」

これは本当だった。

スージーは、民間の弁護士事務所に勤めているのだが、その仕事は主に陸軍関係だ。それで、なにかの作戦に法律顧問として随行するとかで、間もなくオレゴンに旅立つことになっていた。6ヵ月間は、そちらで暮らすという話だ。

両親に頼むという手もなくはないが、彼らは今、フロリダのリタイアした人専用のコミュニティに住んでいる。そこは、幼い子供の長期滞在を認めていないはずだ。

僕がそれらをきちんと説明して断ったにもかかわらず、ワッツ氏の表情は曇らなかつた。それどころか、そこで、なにかひらめいたような顔をした。

「今回は、収録に6ヵ月かけて、この前以上のヒットをねらうつもりだった

んだ。それにはもうひとつなにかが欠けていると思っていたんだが、見つかったよ。君に寄せられる共感で、視聴率はうなぎ上りだろう。かわいい2人の娘を育てる美しい母親としてね」

「ちょ、ちょっと待って。ぼ、僕は、子供たちを巻き込むつもりなんてありません！」

僕が先回りして守りを固めると、彼はすかさず攻めの体制に入った。

「なにも、児童ポルノを撮ろうっていうんじゃないんだ。われわれが未成年者を使うような場合、スタッフに専門の心理カウンセラーを加えることが義務づけられている。今回に関しては、国の児童安全局からも人を派遣してもらおうと思う。君の息子たちの心のケアには、万全の体制が敷かれるはずだ」

「いえ、お断りします！」

「まあ、そう焦らないでくれ」

彼はそう言って、テーブルの上に書類をすべらせた。

「返事は何日か後でいい。それまでに、その契約書を君の弁護士でも、兄弟でもいいから、信頼している人に読んでもらって相談してくれ。その間に、こちらでは、君の子どもたちによけいな苦しみを与えないための方策を考えて、条文を書き加える作業を進めよう。その内容を吟味した上で、それでも君が断るといふなら、私もあきらめるよ」

そのあと僕は、ランチをとりながら番組のさらに詳細な企画内容を聞き、契約書を持ち帰った。家に戻り、その契約書を5回以上は読み返したが、それは完璧なものに思えた。

もし僕が、単身者だとしたら、おそらく、このチャンスに飛びつくだらう。たとえ着られるのが60年代の服だけだ

としても、6ヵ月間、ずっとダルラとして過ごせるのだから。

しかし、僕には子供がいる。彼らは僕を必要としているし、僕も彼らを必要としている。たとえスージーにみてもらうことが可能だとしても、僕は、6ヵ月も彼らと離れて過ごすのはいやだ。

夕飯のあと、子どもたちがテレビゲームをりはじめたので、僕はスージーを訪ね、契約書を読んでもらった。「6ヵ月間の仕事に対する報酬として、5万ドルが支払われる。その間、あんたは女装して生活する。家賃なしで住む家が提供され、番組がそろえた衣装以外に衣料費も出る。その上、日々の買い物用に1日あたり100ドルが支給される。6ヵ月もレディでいられるなんて、夢の契約書ってわけね。ドナに

とっては」

「ううん。ダルラよ」

僕は、思わずそう言ってから、ふたたび訂正した。

「あっ……、い、いや、つまり、ドナルドだろ」

「そうね」

スージーは、笑いながら契約書を返してよこし、こうつぶけた。

「私が、子どもたちを見てあげられればいいんだけどね。そうすれば、あんたはまた楽しい仕事ができる」

「いや、それだけじゃないんだ。僕がためらってるもうひとつの理由は、これなんだ」

僕はそう言って、持ってきたビデオを手渡した。クルージングの部分も含まれたロングバージョンの「レディライク」だ。

「もし、あんたがもういないんだっ
たら、お姉ちゃんにちょうだい、この
男たち」

スージーは、僕がジョーやダンと映
っている部分だけを何度も再生しなが
ら、そう言った。

「スージー、どうしてそんなふうにな
っちゃったのか、自分自身でもでもよ
くわからないだよ」

僕は正直に白状した。

「あの時、僕の中からドナルドは消え
て、完全にダルラになってた。あの人
たちといっしょにいることが、うれし
かった。いっしょに踊ったり、腕の中
に抱かれたり、キスされたりすると、
すごく幸せな気分になれた。もしダン
が、もう少し強引に迫ってたら、僕は
ウエディングドレスの採寸に行ってた
かもしれない」

「そうね、それは、見てるだけでわか

るわ」

スージーは、そう言ってから、ちょっと考えるような顔をした。

「子供だった頃、あんたは、ほとんどなんの抵抗もなく私の妹になれた。女の子の服や小物をすすんで受け入れたし、初めてストッキングを履いた時なんて、幸せそうな女の子そのものだったわ」

「ああ、おめかししたママと姉さんと僕を、パパがディナーに連れてってくれた時のワクワクする気持ち、今でも忘れないよ。大好きだったドレスを着て、ママがちょっとお化粧品もしてくれたんだ」

「いっしょにショッピングに行って、声をかけてきた男の子たちと遊んだ時も、ドナルドはすっかりいなくなってたわよ」

「でも、それは、メアリーと出会った

時、すべて終わったはずなんだ」

僕は、そう主張した。

「彼女といっしょにいるようになってからは、ドナになりたいなんて、一度も思わなかったんだから」

「あんたの家族、あれこれ決めてたのは、メアリーだったんでしょ」

「まあね。彼女は職場でも秘書課長だったし、仕切るのに慣れてたからね。べつに僕は何とも思わなかった。だって、彼女の決めたことで、まちがったことなんてなかったから」

「料理や家事は、あんたがする方が多かったわよね」

「ああ。だけどそれは、彼女より僕の方が料理が上手だったからだよ。子供の頃から、ママに言われて、いろいろ手伝ってたから、家事だってそんなに苦にならないし」

「セックスの主導権を握ってたのは、

どっちなの？」

「それは、姉さんだって、きいちゃいけないことだろ？」

「どっち？」

スージーは、強い口調で言った。

「まあ、だいたいは……メアリー」

僕はうつむきながら言った。

「でも、いつもじゃないよ」

「子どもたちのことさえなかったら、私はまちがいなく、この契約書にサインすべきだって言ってるわね」

スージーは、僕の方をほほえんで見つめながら、そう言った。

「あんたは、男を幸せにする、いい奥さんになれるわよ」

「あのさ、じつは、子どもたちを連れてってでもいいって言われてるんだ」

僕は、ちょっと顔をしかめて言った。

「でも、あの子たちはそこで、僕の娘にならなきゃいけないんだってさ」

僕はそれから、ワッツ氏が語ったことのすべてを、スージーに話して聞かせた。息子たちには、児童心理学者がカウンセラーとしてつけられ、しかも、児童安全局のアドバイザーがチェックすること。彼らは、そこに造られた学校にも行けること。その学校で受けた教育は、ちゃんとした単位として、一般社会でも通用すること……。

「番組の制作プロダクションは、すべてをリアルにつくり上げようとしている。もう、どこかに、協力してくれる町をみつけたらしい。つまり、僕が女装して40年前を生きる女性をやっても、誰も気にしない町ということだ。彼らはその一角を確保して、設定した時代に合わせて改造してるんだ。そこには、学校や商店街もあるし、他にも必要なものは完璧に揃ってるんだそうだ」

僕は、子どもたちに関するワッツ氏のアイデアも伝えた。

「あの子たちが加わる場合、彼らも、あの年頃の他の女の子と同じような生活をするようになる。ただし、60年代のね。髪型とかも女の子っぽく変えられて、あの子たちのママがしてたのと同じように、ほとんどの時間を女の子の服を着て過ごすんだ。それどころか、学校へも女の子として通う。たとえば、チェックのスカートに白のブラウスを着て、サドルシューズ(訳注 ツートンカラーのスポーティな革靴)を履いてね。下着ももちろん、女の子用だ。毎日を女の子として過ごす。しかもそこには、テレビゲームもCDもDVDもないんだ」

「あの子たちなら、たしかにかわいい女の子になれると思うけど、ゲームやDVDなしじゃあ、とても生きていけ

そうにないわね」

スージーは、そう言って笑った。

「すぐに、子どもたちのことをふくめた新しい契約書が送られてくるはずだ。来たら、そっちも読んでみてよ」

その新しい契約書は、翌朝にはもう届いた。そこには、子どもたちに関する記述が、僕に関することと同様に、微に入り細にわたり書き込まれていた。

彼らは、撮影が終了するまで6ヵ月の間、少女の服装を着て、少女として暮らす。もちろん、今の時代にしかないものは、いっさい持ち込んではいけない。そこには、1960年代以降に書かれた本やマンガ本も含まれていた。

スージーは、その契約書に慎重に目を通し、撮影の間、息子たちの精神状態が注意深く管理され、つねに危険の

ない状態に置かれるということは信じていいだろうと言った。60年代のように生きるといっても、病気やけがの時は、すぐさま現代医療の恩恵が受けられることも、契約書には明記されていた。

「この内容を、子どもたちにわかるようにきちんと伝えて、時間をかけて相談してみましょ」

スージーは、そうアドバイスしてくれた。

「ただし、お金のことは話さないこと。動揺させたり、誘導したりしないこと。それだけは気をつけてね。だけどきつと、あの子たちは反対しないと思うな。で、あんたたち親子は、すてきな時間を過ごすことになる」

その日のうちに、スージーと僕は、子どもたちとじっくり話し合った。

彼らは山のように質問をぶつけてきたが、幸いなことに、僕は、そのどれに対しても明快な答えができた。

「でも、どうして女の子にならなきゃいけないの？」

トミーは、なによりそれを知りたがった。

「男の子のままじゃいけないの？」

「男の子のままではいけない理由なんて、どこにもないんだよ。でも、テレビを見てる人には、男の子が女の子になろうとしてる方が面白いだろ」

「だけど、どうしてその年なの？ その頃に、なにかあったの？」

トミーは、さらに不思議そうに言った。

「その時代のすぐ後に、女の子の服のスタイルが大きく変わったってことかな」

その質問には、スージーが答えてく

れた。

「その頃はまだ、今みたいに、女の子がズボンを履いたりしなかったし、スカートも今ほど短くなかったの」

「だけど、そんな昔の女の子の服着て歩いたりして、笑われるんじゃない？」

マークが、ちょっと心配そうにきいた。

「いや、誰も笑わないと思うよ」

僕は、その心配を取り除くために説明した。

「パパや君たちが住むことになる町は、全部その番組に合わせて造られてるんだ。だから、誰も笑わない。だって、住んでる人たちもみんな、1960年代の格好をして暮らすことになってるんだからね」

「ぜったいに、笑われない？」

トミーが真剣な顔で言った。

「だって僕、女の格好で、笑われたり

からかわれたりするなんて、ぜったいにいやだから」

僕は、彼を安心させるために近くに座り直し、その肩を抱いた。

「トミー、約束するよ。ぜったいに笑われない。パパだって、誰からも笑われてなかっただろ」

「そうか、あのテレビ、パパ、楽しそうだったもんね。女になるのって、そんなに面白い？」

そうきいたのは、マークだった。

「ああ」

僕は正直に答えた。

「すごく、面白かったよ」

マークは、確かめるようにトミーの方を向いてから、にっこりと笑った。

「わかった、僕たち、やるよ」

僕は、すべての書類にサインし、ワッツ氏のオフィスに送り返した。

それから2週間うちに、僕らは、採寸され、髪の色やヘアスタイルが決められ、そして転校手続きがとられた。女の子の衣服について息子たちに教えるのは、母親である僕の役目となった。ワンピース、ペチコート、パンティ、そして、マークのためのトレーニングブラ。

ついに、その日がやってきた。

僕らはまず、6ヵ月間住むことになる町の、隣町にある小さなホテルに連れていかれた。

そこで僕らは、髪にエクステンションをつけられた。僕の髪がふたたびストロベリーブロンドに染められている間に、息子たちの髪にもブロンドの房が結いつけられていった。

2人とも、髪の長さは肩にかかるくらい。マーク……リンダ・ジーン(※)

は、その髪をスカーフで結び、片側に垂らすようにしている。トミー……シンディ・マリー(※)は、髪を後ろにまとめ、それをヘアバンドで押さえていた。

(※訳注 子どもたちの2番目の名前は、ファミリーネームでなくミドルネーム。60年代らしく洗礼名がつけられている。)

今や、僕のキュートな息子たちは、もっとキュートな娘たちになっていた。

僕らは最初の衣装を手渡され、自分たちで着るように言われた。

ナイロンパンティの感触は、なりたての少女たちにとって、かなり衝撃的だったようだ。2人でお尻をこすりつけ合いながら笑い、以前のブリーフとのちがいを面白がっていた。リンダが黄色を選んだのに対し、シンディはまるで当たり前のような顔で思い切った

選択をし、ピンクを履いていた。

僕は、息子……娘たちが慣れない服を着るのを手伝ってやりながら、フルカットのショーツやブラ、ピンクのペチコートをつけていった。

「僕も、そんなふうに、かわいくなれたらいいな」

ペチコートを着けるのを手伝ってやっていると、シンディが、僕の方を見て言った。

「どうやったら、かわいくなれるのか、教えてね」

「あなたは、もう、かわいいわよ」

ワンピースを頭からかぶせてやりながら、僕は言った。

「2人とも、ほんとにかわいいわ。それに、こんなことに挑戦できるなんて、とっても勇気があると思うわ」

「そんなふうに言ってくれると、この前言ってたみたいに、面白いって気が

してくるよ」

リンダはペチコートと格闘しながら、笑った。

「面白くって、誰からも笑われなくて、その上、お金がもらえるってわけだね」

「えっ、お金っ？ なんのこと言ってるの？」

「だって、スーおばさんが言ってたよ。これをすると、僕たち2人にも1万ドルずつ出るんでしょ」

彼女はそう言って笑いながら、ペチコートの位置を調整すると、白のワンピースを手にとった。裾の部分を黄色とグリーンの花模様が取りまいている。

「手伝ってよ。背中ボタンなんて、とめられないよ」

「これが終わった後、あなたのおばさんを一発ひっぱたいてやるってこと、覚えといてね」

僕は、そのボタンをとめながら言った。

「それから、いいこと教えてあげようか。こういうワンピースを着る時は、最初に上から1つか2つ残して他のボタンをとめておくの。それからかぶれば、手の届くとこのボタンだけですむでしょ」

そのあと僕は、ウエストについたリボンを結んでやり、そこで、ソックスをはこうと椅子に座りかけたリンダとシンディをストップさせた。腰掛ける前には、スカートの後ろに手をかけてなでつけるようにするのだと教えたのだ。

娘たちがサドルシューズを履く間に、僕は、ガードルとストッキングを履き、ガードルの裾についたアタッチメントにストッキングのトップをとめた。この時代では、パンストは履けな

いわけだ。ストッキングは、特別の日にはいいけれど、毎日これをするのはやはり面倒くさそうだ。

「僕たちも、そのうち、おっぱいを大きくするの？」

リンダが、僕のブラの中で揺れるブラレストフォームを見ながらきいた。

「あなたにはまだ、ちょっと早いわね」

僕は、ピンクと白のチェック地でできたシャツドレスのボタンをかけながら言った。

「あたしは時々、パッドじゃあ、上のところが見えちゃうような服を着るから、これを着けてるのよ」

彼女たちに、本心を伝えられないのがちょっとつらかった。もちろん、本物の乳房の方がいいに決まっている。

娘たちが新しい服に慣れるために部屋の中を動きまわったり、鏡を見たり

している間に、僕はメイクした。

「すごくきれいだよ、パパ……あつ、……ママ」

シンディは、僕が口紅を塗った後、そこにティッシュをあて、くわえるようにしたのを不思議そうな顔で見ている。

「せっかくつけたのに、どうして拭いちゃうの？」

「全部拭いたわけじゃないわよ。よぶんな口紅をとったの。こうすれば、他についたりしないから、歯が赤くなっちゃうようなこともないでしょ」

そこで僕は、リンダを呼んだ。

「リンダ、ちょっといらっしやい。あなたも、つけてみる？」

僕は、リップスティックを彼女の唇に近づけながら言った。

「そんなの、いいよ」

リンダは、ちょっと身を引くように

した。

「僕、お化粧なんてしたくないし」

「服を着るよりは、簡単よ」

僕は、ほほえみながら言った。

「あなたはもう14でしょ。そろそろメイクも覚えなきゃね」

彼女はどうしたらいいのかわからないというように固まっていたが、やがてちょっと唇をすぼめ、顔を突き出した。

「すてきよ」

その唇に口紅を塗り、ティッシュで押さえた後、僕は言った。

「あなたはもう、レディね」

リンダは、ちょっと恥ずかしそうに肩をすくめたが、鏡をのぞき、驚いた顔をした。

全員が着替え終わったところで、僕はリンダとシンディをもう一度チェッ

クした。

リンダはネックラインと裾に鳩目穴が並んだ、白いワンピース。白いニーソックスにサドルシューズを履いている。その姿は、女になる途上の少女という感じだ。女の子っぽい立ち方や動き方をもっと学ぶ必要はあるが、それはまあ、これからのこと。それよりも今は、この服装に慣れることの方が先決だろう。

シンディは、かわいい黄色のドレスに、黄色に白のレースがついたニーソックス、そして黒の「メリー・ジェーン」(訳注 お嬢様ふう革靴の商標)を履いていた。

なにより彼女は、その服の感覚をもてあまし、混乱しているように見えた。とはいえ、顔をしかめていることを除けば、そのかわいらしさは、やはり女の子に見える。

僕は、彼女の肩を抱き、きいた。

「どんな気分？」

「悪くはないよ……」

彼女は、言葉を探すようにしたあと、言った。

「この服、ちょっと面白い感じがする」

「もし、いやだったら、やめてもいいのよ」

僕は、もう一度確認した。

「いつだって、自分の思ってることを、正直に言っていていいんだからね」

と、彼女は、リンダの方を確認するように見た。リンダは、それにほほえみ返し、うなずいた。

「このパンツは、嫌いじゃないよ」

シンディは、そう言ってスカートを持ち上げた。

「それから、ペチコートのもね」

「うん、そう言ってくれると、うれしいわ」

僕は、シンディの頭のとっぺんにキスしながら言った。

「女の子らしく見せるためには、まず服が好きになることが大事だから」

「だけど、このワンピースだとかは、僕、好きになれないな、きっと」

シンディは、そこで、男の子っぽく首を振った。

「こんなの着てたら、オカマって言われそうだもん」

「ハニー、あなたはオカマなんかじゃないわ。あなたはちゃんと男の子。でも、これから、すごく面白いゲームに挑戦しようとしてる男の子よ。これから、女の子のいろんなことがわかれば、もっと大きくなった時、他の男の子よりずっと、女の子の気持ちができるようになるでしょ。そしたら、他の子より、ガールフレンドがいっぱいできるわ」

「僕、女なんて嫌いだ。だって、意地悪だもん」

「ううん、そんなことないわ。女の子はすてきよ。女の子は、男の子と考えてることがちょっとちがうだけ。あなたにもそれが、すぐにわかるはずよ」

「僕は、平気だよ」

リンダが、にっこり笑いながら言った。

「だって、パ……ママを、困らせたたかないもん」

その顔を見て、シンディの顔にも次第に笑顔が広がっていった。

息子たちは、いつも仲がよかった。マークは、いつだって、弟を守り勇気づけてきた。

シンディは、兄マークに向かい、笑い返しながらか言った。

「わかった。僕、がんばるよ、お姉ちゃん」

そこでかわされた家族3人の抱擁は、撮影が始まる前に、全員の勇気を奮い起こさせた。

スタッフたちの前で1人ずつぐるりと回ってほほえみ、自己紹介したところで、ADが僕らが挑戦することになる課題を説明した。

僕らはもちろん、四六時中この役を演じ続けなければならない。6ヵ月間、女性の衣服以外は身につけず、日用品にしても衣類にしても、また食べ物にしても、1960年に入手可能なものだけしか使えない。

僕はパートタイムで働き、その間、娘たちは女の子として学校に通う。他にレクリエーション活動としては、シンディがブラウニー(※)、リンダがガールスカウトに入る。リンダはまた、学校の家庭科クラブにも入り、家事や

料理など、未来の夫のためよい妻になる方法を学ぶ。

(※訳注 ‘Brownie’ ガールスカウトの幼年部。ボーイスカウトで言えばカブスカウトに当たる)

僕については、特に追加された挑戦課題はなかった。パートタイムで働きながら、母子家庭の母親として家事をするのは、それだけでたいへんだと見なされたからだ。

カメラが回り始めると、僕らはまず、この時代のスカートの履きこなし方を学ぶことになった。

ペチコートでふくらんだ長いスカートを履いて腰掛けるには、たしかに練習が必要だろう。座ったとたんに、前に揺れたペチコートがスカートを跳ね上げ、そのスカートが顔に被さってしまうなどという目には、あいたくない。

また、スーパーマーケットの狭い通路を歩くような場合にも、注意が必要だ。スカートが棚の商品を引っかけてなぎ倒し、床に散乱させることにもなりかねないからだ。

娘たちと僕が、これらをこなせるようになるには、この練習だけでなく、1週間以上は実践が必要だという気がした。

やっとペチコートと長いスカートが終わったと思ったら、僕の目の前には、ペンシルスカートだとか、イブニングドレスだとか、幾種類かのガードルだとかが次々に出てきた。

ペンシルスカートは体の線にぴったりと張りつき、腰全体の豊満さや、ぷりんともりあがったお尻をセクシーに目立たせた。僕が履くには、どうしてもパッド入りのガードルが必要だったが、そのおかげで僕は、甘美なカーブ

と色っぽいお尻を手に入れることができた。

衣装係スタッフの適切な指導で、僕はすぐに、超タイトなスカートとハイヒールに抗して、前にも後ろにも——よたよたとではあったが——歩けるようになった。そして、その一歩ごとに僕のお尻がスイングした。

娘たちはそれを見て大笑いしたが、僕は気にならなかった。こんなにセクシーなスカートを履きこなせるなら、僕はどんな努力だってするだろう。

壁の鏡の前を通った時、その姿が映った。タイトなスカートとシルクのブラウス、そして、やはり体にぴったりと張りつくジャケット。そんな姿を目にしたとたん、僕の心は、完全にレディの領域へと飛び込んだ。薄いストッキングとハイヒールの脚、完璧なメイク、腕の動きとともに舞うように動く

赤いエナメルの手袋……ああ、僕はまた、すてきな女性になれたんだ。

娘たちが挑戦しているものの中には、カプリパンツやショートパンツなどズボンの類もあったのだが、僕はスカートばかりで、それを優雅に、かつ美しく履きこなす方法を学んでいった。

これらの衣装の中で、この時代独特のものは、なんといってもオープン・ボトム・ガードルだろう。

それは、腰から腿にかけて体の線にぴったりと張りつく弾力のある幅広バンドといったもので、下の部分にガーターのアタッチメントがついている。脚を入れる部分が分かれていないぶん、絞めつけてくる力に股を開くのも難しく、内腿をすり合わせるようにしてしか歩けない。

1960年代の女性になる訓練の最後

に、このガードルを着け、カメラの前で歩く僕のお尻は、自然に大きく揺れた。

そのとたん、僕はダンのことを考えていた。

僕のセクシーでかわいいお尻が前後左右に揺れるのを見たとしたら、彼はどれほど喜んでくれるだろう。前以上にすてきになった僕のプロポーションについて、たくさんの賛辞を、たくさんのキスとともに浴びせかけてくれるにちがいない。

もし、こんな姿をダンに見せることができたなら、その女としての幸せに、僕は死んでもいいとさえ思う。

……えっ？ クソ！ まただ！

スカートに戻ってまだ数時間だというのに、僕はもう、女として考え、女として反応している。このまま6ヵ月間女としての生活を送ったとしたら、

僕はどうなってしまうのだろうか？

希望的な見方ができるとすれば、今回、僕が演じることになる夫に先立たれた60年代のシングルマザーという役が、以前とはちがう作用を生むということだ。僕は、男性を求める感情を、女としては恥ずかしい欲望として抑え込み、貞淑に暮らす可能性が高い。

そう、きっとそうにちがいない。

僕は、愛らしい2人の娘の母親として、彼女たちがいい妻になり、いい母になるための方法を教えるのだ。いっしょに料理し、いっしょに掃除し、いっしょに裁縫をして、僕たちそれぞれの未来の夫のために、いい家庭をつくることを学ぶ。

娘たちに、デートの時、若いレディとしてどんなふう振る舞ったらいいかを教え、そしてたぶん、時がくれば、男を幸せな気分にする方法を、そっと

授けるのだ。

……えっ!? また何を考えてる?

僕は母親じゃないし、2人の子供も本物の娘じゃない。僕は、2人の息子を持つ父親なのだ。そして、6ヵ月間だけ、3人で女のふりをするにすぎないのだ。これをやりきれば、僕らには、いつも夢見ていた大金が入る。そのためにやるんじゃないか。

しかし、どうやら、自分を保ちつつやりきるためには、押し寄せる女らしさにどこかで抵抗していなければならないらしい。ペチコートや、ナイロンストッキングや、お尻が揺れるセクシーな歩き方を要求するガードルを、受け入れつつも、どこかでそれに異を唱えつつけなければならないのだ。

少なくとも、ハンサムな男と出会い恋に落ちる可能性のある、あのクルージングのような企画がないことだけ

が、唯一の救いだらうか。

衣服に関するトレーニングが完了したところで、僕らは車に乗せられ、フォークトンと呼ばれる町の新しい家へと連れていかれた。

今後6ヵ月間を暮らすことになるその家の中をざっと見ただけで、僕にはそれが、可能な限りリアルになるよう細心の注意を払ってセットアップされていることがわかった。

テレビに駆け寄りスイッチを入れたシンディは、画面がどうしてカラーではないのか首をかしげた。

「1960年には、カラーテレビは何千ドルもしたのよ」

僕は、笑いながら説明した。

「だから、お金持ちしか買えなかったの。パパのいない母子家庭じゃ、持ってないのはしょうがないでしょ」

「でも、ケーブルテレビは映るんですよ」

シンディは口をとがらせた。

「お願いだから、ケーブルテレビは見られるって言ってよ」

「そんなものは、1960年にはなかったの。少しでも多くの局が見られるように、みんな、屋根の上にアンテナを立てたのよ」

「こっちへ来てみて」

リンダが隣の部屋から呼んだ。

「これ、なに？」

リンダは、その機械のそばに立てられた45回転シングルとLPにも目をやりながらきいた。

「これはレコードプレーヤーっていうもの。そっちは、レコードね」

僕はまた、ほほえみながら言った。

「むかしは、その丸いのをこれにのせて、音楽を聴いてたの」

「うそでしょ。その頃はみんな、CDプレーヤーも買えないほど、貧乏だったの？」

「まだ発明されてないの。ここは、1960年よ」

それから僕らは、夜まで、新しい家を探索して過ごした。

2人の娘たちには、それぞれ自分の部屋が用意されていた。内装は、リンダの部屋がシフォンイエロー、シンディの部屋がピンクに統一されていた。それぞれの部屋のクローゼットには、女の子の「最新ファッション」が吊され、ダンスの中は、彼女たちの年齢にふさわしい下着類で満たされていた。

リンダの部屋には鏡台もあり、いくらかの化粧品も置かれていた。

彼女たちは、それぞれ自分用の爪磨きを持っていて、髪をかわいらしくま

とめるためのブラシ、櫛、ヘアバンド、バレッタなども揃っていた。

僕が母親らしく薬用のキャビネットをチェックすると、そこには、いかにも女性だけの家庭という感じのものが並んでいた……コールドクリーム、綿棒、ヘアスプレー、制汗剤、そしてアスピリンの小瓶。

洗面台の棚の上に見つけたものに、僕は少なからずショックを受けた。

生理用ナプキンの箱だったのだ。

「レディライク」の時、僕らは、こんなものを持たされなかった。つまり、プロデューサーは今回、僕と娘たちに、女性としてのすべての経験をしろと要求しているのだ。

神たるプロデューサーよ、どうかひとことだけ、あなたへの不満をお許してください。僕は、息子たちと僕が、婦人衛生学の一部始終を学ぶことを、け

っしてうれしいことだとは思っていません。

でも、この番組のコンセプトは、けっして40年前の生活を体験するというだけじゃない。女性としての生活の体験も含まれているのだ。

バスルームを出ながら、僕は思わず笑ってしまった。

と、誰かが僕の腕をつかんで揺すり、声をかけた。

「ママ、どうかしたの？」

リンダだった。

「ううん、なんでもないのよ」

僕は、くすっと笑いながら言った。

「ちょっと面白いことがあっただけ」

「それは、1960年に女の子でいることより、面白いこと？」

リンダはちょっと皮肉っぽく言った。

「そんなこと、あると思えないけどな」

僕は、彼女の耳に口を寄せてささやき、さっきバスルームで見つけたもの
のことを伝えた。とたん、彼女の顔色
が変わった。

「あなたは、6ヵ月間、ティーンエー
ジャーの女の子の生活を送るのよ」

僕は、彼女に言って聞かせた。

「ティーンエージャーの女の子たちは、
毎月、それを我慢するものなの」

じつは、カメラクルーが1チーム、
僕がバスルームでそれを見つけたところ
から、ずっと追ってきていた。もち
ろん、この時のリンダの反応も、しっ
かりカメラに納められた。

番組を見た少女たちは、このシーン
ににんまりするにちがいない。

フォークトンでの2日目、我が家に
ウエルカム・ワゴン(※)がやってき
た。

(※訳注 アメリカの地域コミュニティで行われる転入者歓迎行事。パーティの用意を積んだ車で乗りつけることからこう呼ばれる)

驚いたのは、まるで1960年の『ライフ』誌から飛び出したような女性たちの一群が次々に現れたことだ。

僕は、ご近所の人々を迎えるホステスとして、コーヒーやパイを配った。「ようこそ、この町へ。ニューフェースは、いつだって大歓迎よ」

ジナは、手作りのケーキを渡してくれながら言った。

「娘さんが2人いらっしゃるんでしょ。おいくつなの？」

ベティが、ほほえみながらきいた。「上のリンダ・ジーンがもうじき15。下のシンディは12歳よ」

「ここの学校は、すごくいいところよ」

ノーマという女性が会話の輪に加わってきた。

「月曜日の朝、うちの娘のジュディに寄らせるわね。これから、いっしょに学校に通えばいいでしょ」

「私の姪は、シンディと同じ年よ」

また別の女性が加わってきた。

「学校で、シンディの面倒を見るように、言っとくわね」

たぶんこれは、すべて企画どおりなのだ。

月曜日にはジュディという女の子がやってきて、娘たちを学校に連れて行く。そして、リンダに友人たちを紹介する。もう1人の少女は、いつもシンディの味方になって、彼女が新しい学校になじむのを助けてくれる。

プロデューサーは、この長丁場の撮影のすべてを、こんなふうにセットアップしているのだらうと、僕は思った。

次の日は日曜日で、僕らは、いちば

んきれいなドレスと手袋と帽子を身につけ、教会に出かけた。

娘たちは、自分たちが笑われるのではないかとびくびくしていたが、道で会う女性たちは、すべて、僕らと同じよう、正確にこの時代の服装をしていた。

ミサのあと、僕らは暖かい挨拶を受け、娘たちと僕には、何人かの友人ができた。

それらすべてのことが、当たり前のように進行していた。僕は、自分たちが性を変えているのだということさえ忘れそうになり、一方で、まるでタイムマシンに乗ってここにやってきたのだという気になった。

学校の制服であるチェックのスカートと白いブラウス姿の娘たちは本当にかわいらしく、僕はこの家にカメラ(写

真機という意味の)がないのを悔やんだ。

ジュディは予定どおりの時間に正確にやってきて、僕は、2人の大事な娘にキスし、送り出した。そして、今後毎日繰り返されることになる家事という儀式に取りかかった。

僕はまず、どこかの博物館から探してきたのではないかという感じの旧式の掃除機で床掃除をした。家具磨き用のスプレーは当然なかったので、洗剤をぞうきんに垂らし、それで、家具を磨き上げた。

僕には、ジューン・クリーバーやドナ・リード(訳注 [ともに60年代ホームドラマの母親役女優](#))がどうやってハイヒールで家の掃除ができたのか理解できない。

僕は平靴を履き、髪をスカーフでまとめ、たった1つのウエディングリン

グをつけて家事をした。この指輪はもちろん、ダルラが、亡き夫の思い出をまだ胸に抱いていることを表しているわけだ。

夕方までに僕は、1階の掃除をすべてすませ、教会で知り合った2人の女性たちと電話でおしゃべりし、牛肉の蒸し焼きとポテトとにんじんの夕飯の用意まで終えていた。

帰ってきた娘たちは、テーブルに並んだ料理に驚いたようだ。彼女たちがそれなりにいいものを食べていたのは、もっと小さかった頃で、いつもは、我が家でも買えるひき肉とマカロニあたりで作った料理がほとんどだったからだ。

学校の制服を汚されたくなかったので、僕は娘たちに、夕食前に着替えるように言った。地下室にある、ローラ

一でしぼる形式の洗濯機では、必要以上に洗濯物を増やしたくはない。

「うわ、かわいい」

カジュアルな服に着替えて戻ってきた娘たちを見て、僕は思わず言っていた。

髪をポニーテールに結ったリンダは、青と白のギンガムチェックの半袖ワンピースを着ていた。それに、ニーソックスとサドルシューズだ。

シンディはピンクのプリーツスカートと白いノースリーブのトップで、まるで絵の中の少女のように見えた。やはり、ニーソックスとサドルシューズを履いている。

その姿からは、ほんの1週間ほど前までの、ジーンズにすり切れたTシャツ、スエットソックスという姿は、想像さえできなかった。

この数日、女の子で居つづけたことは、彼女たちのセンスを確実に変えた。

リンダはそこですぐに、新しい学校での第1日目について話し出した。

「信じられないないんだよ、ママ。みんな、僕のこと、女の子として扱うんだ。男子は、僕に笑いかけてくるし、先生は、ミス・ハルトマンって呼ぶ。僕は女子トイレまで使ったんだから」

「教室の机も女子の側だし、食堂でランチをもらうときも女子の列に並ばされた」

シンディも、そうつけ加えた。

「それでいいんじゃない？ だって、あなたたち、女の子でしょ」

僕がそう言うと、リンダはちょっと不満そうな顔で言い返した。

「だけどこれは、お芝居なんでしょ？

みんな、僕らがほんとは男だって知

ってるんでしょ？」

「そうだよ、ママ。これって、ジョークみたいなもんなんでしょ」

シンディも、むきになったようにつけ加えた。

「ええ、そうね、リンダ。この町であなたたちが会う人はみんな、あなたたちがほんとは男の子で、これはテレビ番組のためなんだってわかってるでしょうね。でも、たぶん、町の人たちはそのうち、そのことを忘れてくれるわ。あなたたちは女の子に見えるし、女の子の服を着て、女の子として毎日を送っていけばね。で、ある時、あなたたち自身でさえ、自分が女の子としてものを考えてることに気づく、きっとね」

「そんなことないよ、ぜったいに。からかってるんでしょ？」

シンディはちょっとショックを受けたような顔で言った。

「僕たちは、自分が男だって知ってるよ。どうして、女の子だなんて思うの？」

「ふふ、それはたぶん、もう起こりはじめてるわ」

僕は肩をすくめるようにして笑った。

「みんな、あなたたちのことを女の子として扱ってるし、友だちは女の子がほとんどでしょ。すぐに、あなたたちは、その子たちがしてることをまねし始める。同じように行動してると、不思議なことに、考え方や感じ方まで、他の女の子とたちと同じようになってしまうの。番組のために女の子のふりをしようと思ってたはずなのにね。でも、心配いらないわ。これが終わって家に帰れば、逆のことが起こる。あなたたちはまた、男の子たちと遊ぶようになるでしょ。そしたらすぐにまた、男の

子として行動するようになるわよ」

娘たちは、今の説明に、いちおう納得したようだ。ふたり揃ってうなずいた。

ただ、今の話では、説明がつかないことがあった。この収録が始まる前の何ヵ月間か、僕は男に戻っていたのに、なぜ、ダンのことばかり考えていたのだろう？

この間、僕の心の中からダンが消え去ることはなかった。あのクルージングで、僕らは本気にはならないでおこうと決め、ダンもそれを理解したはずだ。それなのに僕は毎日、気がつくたびに彼のことばかり考えていた。

たとえば、家事に没頭していたとする。そんな時、ふいにダンの面影が心に浮かぶ。彼のほほえみ、彼のまたたき、そして、彼のキス。僕は、必死に

そのキスの感触を振り払おうと試みる。それなのに、気づくと僕は、つい、つま先立ちしていたりする。

たとえば、その面影をなんとか追い出したとしても、しばらくするとまた、彼は僕の心の中でほほえんでいる。寝る前にベッドメイクしている最中、その面影が浮かんだときなど、もし今、彼がここに来てくれたらなどと考え、ひとり、顔を赤らめさえた。

もしかすると、女性に恋すれば、ダンのことは心から消えるのかもしれない。僕の心をとらえるようなすてきな女性……。その女性はきっと、きれいな目をしているだろう……。ダンのように。その女性はきっと、すてきなほほえみを向けてくれるだろう……。ダンのように。その女性はきっと、やさしいキスができるだろう……。ダンのように。

……だめだ！　そこから抜け出すことは、僕にはできない。

そう、僕はダンを必要としているのだ。

おそらく、スージーの言ったとおりののだろう。

たぶん僕は、僕のことをやさしく包んでくれる男を求めているのだ。

そう考えることが、いちばん納得がいく気がする。

実際、かつての結婚生活でも、僕は主婦の役目を務めていたじゃないか。メアリーの方がものごとを決め、主導権を握り、そして、より多く稼いでいた。彼女の方が勤務時間が長かったから、家事や育児は僕の仕事となった。

男でいるより女でいる方が居心地がよいことを、僕はけっして恥ずかしいと感じていない。

それは、子供の頃、ドナでいること

を楽しんでいたからだ。かわいい服を着、メイクし……。これは両親の知らないことだが、あの夏休み、僕は、女の子になりきってデートしたことすらあるのだ。

20年後、僕はふたたび、ワンピースやビキニやパーティドレスを着て、女性として振る舞う機会を得た。人々は、僕を女として扱い、僕はそれを満喫した。

レディのように歩き、レディのように話し、レディのように振る舞い、まさしく「レディライク」に生きていた。そして、レディライクな恋に落ちた……。

「ママ、どうかしたの？」

リンダが呼びかけた。

「早く、ご飯食べようよ」

「……あっ、ごめんね。ちょっと、考

え事してて」

僕があわててフォークとナイフを出そうと振り向いた時、娘たちは顔を見合わせ、本当の女の子のようにくすくすと笑った。

食後のかたづけで、きれいな服にシミがつかないように、僕は娘たちに、かわいいエプロンを着けさせた。

洗濯は以前も面倒だったが、1960年では「スプレー・アンド・ウォッシュ」(訳注 シミ取り用洗剤のブランド)の恩恵にもあずかれない。洗濯物にシミを見つけたときは、洗う前に、そこに水と粉石けんをつけ、ごしごしこすらなければならないのだ。

今や僕は、手軽にものを加熱する電子レンジを失い、皿洗い機を失い、全自動洗濯機を失い、冷蔵庫からはチルド機能どころかフリーザーまで失い、

その上……、ダンまで失ったのだ。

いっしょに皿洗いをし、それを戸棚にしまったあと、僕は娘たちとともにもう一度テーブルに着き、授業はどんなふうだったか、宿題はなかったかをきいた。

彼女たちはふたりとも成績がよく、問題児でもなかったから、勉強のことはさほど気にしていない。それより心配なのは、女の子としてうまくやれたのかということだ。

「べつに、ふつうだったよ」

シンディが出した時間割をのぞき込んでいると、彼女は言った。

「前の学校と比べて、授業がむずかしいわけでもなかったし」

「そっちは、いいよ」

リンダはそう言って口をとがらせた。

「こっちは、家庭科があったんだ。料理したり、パンを焼いたり、裁縫したり、その上、洗濯だとか、赤ん坊の世話まで勉強するんだってさ」

「あら、そんなこと、あの契約書に書いてあったかしらね？」

僕は、いったんとぼけてから説明した。

「ふふ、あなたたち2人は、6ヵ月間、1960年の女の子として生きるわけですよ。女の子として学校に通って、この時代の女の子としての生き方を身につける。1960年には、男女平等はまだ実現されてないのよ。大学まで行く女の子はまだ少なかったし、たいていの子は、高校を出ると、誰かの奥さんになって、赤ちゃんを産む道を選んだの。女が外で働きたいと思ったら、先生になるか、看護婦になるか、それ以外だと、ウエイトレスみたいな女性限定の

仕事に就くしかなかったのね。ママも、もうじき、ウエイトレスとして働きに出ることになってるのよ。ウエイトレスのユニフォームを着て、ストッキングを履いて、ヒールの高い靴で店の中を行ったり来たりする。そのわりに、お給料はよくないの。当然、ママは、スラックスもジーンズも履けない。スニーカーなんて、問題外ね」

「ひどい時代！」

シンディーは、大きな声で言った。「女の人たちは、なんで、なんにも言わなかったの？」

「子供の頃から、女はそういうものだって教えられてるから、他に道があるなんて考えもしなかったのよ」

「僕は学校で、女性解放運動を始めるよ」

リンダは、そう宣言した。

「だめよ、そんなこと。女の子は、女

の子らしくして。あなたたちには、レディになるためのに必要なことをちゃんと身につけてほしいの」

僕は、厳しい口調で言った。

「私は、私の娘たちを、ちゃんとしたレディに育てたいと思ってるのよ。男なんかじゃなくね」

もしかすると彼女たちは、一瞬、僕が正気を失ったと思ったかもしれない。

それでも、しばらくして、彼女たちはうなずいた。

それは、大金を稼ぐにはそうするしかないのだということを理解したからだろう。

そして一方で、彼女たち自身、そのことに好奇心を抱きはじめているのかもしれない。

2人はそこで、なにか考え込んだ。自分は、どうしたら女の子らしくなれ

るのだろうと思ったようだ。

少しずつ、僕の元息子たちは、女の子としての生活に身を任せていった。

家庭科に関するリンダの苦情は、次第に少なくなっていく、シンディは、バトン・トワリングを練習したいから、バトンを買ってくれと言ってきた。

そんな変化が、はっきりと目に見え始めた数週間後の午後だった。

リンダが、学校から帰ってくるなり、ショッピングに連れて行ってくれと言い出した。もうじき、学校でダンスパーティーがある。そのためのドレスを買いたいというのだ。

「クローゼットにある服じゃ、どうしてだめなの？」

僕はそう聞き返した。彼女たちのクローゼットには、まだハンガーからはずしたことの無い服が何着もあったの

だ。

「だめ……よ」

リンダは、口ごもるように言った。「もっといいのが、ほしい……の。そりゃ、あそこにあるのは、かわいいのばかり……よ。でもお……。もっとべつの、新しいのが……。だってえ、今年初めてのダンスパーティーなの……よ。他の女の子たちもみんな、新しいドレスを買うって言ってたもん。ぼ……あたしだってえ……」

「ふふ。まあ、切りつめれば、あなたのドレスくらいなんとかなるわね」

「ママっ、大好きっ！」

彼女は高い声で叫びながら、僕の肩をはずしてしまおうほどの勢いで、首にしがみついてきた。

気に入ったドレスが見つかるまでに、僕らは、次の日から2日間、夕方

のショッピングに出かけなければならなかった。

最終的に選んだのは、ライトブルーのドレスだった。プリンセスラインのスカートが、ちょうどひざのあたりまでふわりと広がっているものだ。ーフスリップとドレスに合わせた靴も買ったから、番組から支給される衣料費の何週分かが飛んでしまった。でも、これは、ここに来てから初めての大きな買い物だった。だから、さほど心配することもないだろうと僕は思った。

新しいドレスを着たリンダは、本当に興奮していた。

いつもなら、つきまとってくるカメラクルーに文句を言うはずなのに、それさえ、まるで気にならない様子なのだ。

「ほら、ママ、見て。すごくきれいよ」

彼女は、鏡の前でくるくるとターン

し、カメラを向けるスタッフたちを喜ばせた。それをいやがるどころか、彼らに、新しいドレスを着た姿を見せびらかしているようにさえ見えた。

次の土曜日は、我が家にとって、てんてこ舞いの1日となった。

リンダは、アイロンを独占した末、バスルームをも独り占めする権利を主張し、そこで、長時間かけてバブルバスに入り、体中のよぶんな体毛をすべて処理した。

「ママーっ、ストッキング貸してえ。お願い〜い」

リンダは、すり寄るように言った。「だって、友だちはみんな履いてくるんだよ。あたし、子供に見られたくないもん」

「なんで、お姉ちゃんだけ、ストッキング履いていいの？」

シンディが口をとがらせた。

「僕……あたしには、いつもだめだつて言うのに」

「シンディ、あなた、バトントワラーになるんでしょ。そうなったら、パレードのたびに、ストッキングを履けるじゃない」

僕の言葉にちょっと考えるようにしたあと、シンディは庭に飛び出し、バトンの練習を始めた。シンディがバトントワラーの入団テストに合格したら、そこでそろえることになる衣装には、ストッキングも含まれるのだ。

リンダが、お小遣いを貯めて買った新品のパンティと、持っているうちでいちばんかわいいブラを着けたところで、僕は、オープン・ボトム・ガードルを着けるのを手伝った。

「これ、きつーい」

ヒップのあたりまでそれを引っ張り

上げてやると、リンダは泣き声で言った。

「そういうもんなのよ、ベイビー。がまんなさい」

僕はそう言って、彼女を姿見の前まで行かせた。

「肩越しに鏡を見ながら、もう一度こっちへ歩いてきてごらんなさい」

後ろ姿を鏡に映しながら歩いてきたリンダは、一歩ごとに揺れるお尻に、歓声を上げた。

「ワーオ！」

「どうしたの？」

シンディがバトンの練習を中断して、顔をのぞかせた。

「見て、シンディ、あたしのお尻」

リンダは、また向きを変えて、部屋の中を歩いた。

「うわ、女の子みたいな歩き方」

「だって、あたし、女の子だもん。バ

カ！」

リンダは、ほとんど反射的にそう言い返した。

「ちがうでしょ！」

シンディも、むきになった。

「そうなのッ！」

リンダは、かたくなに言い張った。たとえ、議論すればシンディに負けることがわかっていても、それに耐えられないという感じだった。

「お姉ちゃんは、ほんとは男の子でしょ。ベーだっ！」

シンディは、そう言って舌をつきだした。

リンダは、それでも踏みとどまった。「ガードルとストッキングときれいなドレスを着てる男の子なんて、どこにもいないでしょ」

「いるよ。オカマだったら、ここに」

シンディは、勝ち誇ったように言っ

た。

「そう？　じゃあきくけど、ドレスとペチコートで、バトンをくるくるまわしてる男の子がいるわけ？」

今度は、リンダが言い返した。

「僕は、バトン・トワリングが好きな……男の子」

シンディは、口の中でぶつぶつと言った。

「男の子だったら、バトンガールになれないのよ」

リンダが、うれしそうに言った。

「バトンガールになれば、きれいなユニフォームを着て、ストッキングだって履けるのにな」

シンディは、唇をかみしめていた。

「で、あんたは、男の子なの、女の子なの？」

リンダは、さらに迫った。

「ぼ……あたしは、女の子。でも……

トムボーイ (※) よ」

(※訳注 ‘ tomboy ’ おてんば娘。「ボーイ」とつくが、女の子にしか言わない)

シンディは、勝利の道を見つけたようだ。

「そう、トムボーイなの。勝手にすれば」

リンダは、ガードルにストッキングをとめながら、にやにや笑った。

「あたしは、ちゃんとした女の子だから、かわいいドレスを着て、ストッキングを履くのよ」

「リンダ、あんまりのめり込みすぎちゃだめよ」

僕は、ちょっと心配になって言った。「これは、何ヵ月間かだけのことなんだから。それが終わったら、あなたたちは男の子に戻るんだからね」

「ええ、だいじょうぶよ、ママ」

リンダはほほえみを浮かべてうなず

いた。

「それで、あたしたちはリッチなテレビスターになれるんでしょ」

「でも、テレビを見た他の男の子たちにはからかわれるかもわからないわよ」

「それは、あるかもね」

彼女は、スリッパを着ながら、肩をすくめた。

「でも、あたしたちがどれだけお金持ちになったか知ったら、みんな黙るわよ」

僕は、そうなってくれればいいがと思った。すべてが終わったあと、子どもたちが苦しみに耐える姿は見たくない。

ドレスを着たリンダは、輝いて見えた。

そのプリンセスラインのドレスは、大きく広がったスカートもペチコートもいわば典型的なデザインだったが、

リンダが着ると、どちらも、驚くほど愛らしく見えた。

カーラーで埋まった髪が乾くのを待っている彼女を見ながら、僕は、その姿が、メアリーに似ていると思わずにいられなかった。これまで気がつかなかったのだが、彼女のほおの張り方、目の色、そして魅力的なえくぼは、メアリーに生き写しだ。それに、この娘が母と似ているのは、単に見かけだけではないようだ。

メアリーはつねにファッションセンスがよかった。そして、リンダはまちがいなくそれを受け継いでいる。

今彼女が着ているドレスにしても、1ダースものかわいいドレスを見た上で、彼女自身これがいいと選び出したものだ。それは、彼女の顔にも雰囲気にも、完璧に似合っていた。胸にかかったドレープ、ウエストからヒップへ

の優雅なライン。いつものスカートよりちょっと短いその丈は、彼女の美しい脚をより強調している。

髪が乾いたところで、カーラーをはずすのを手伝い、僕は、その髪にブラシをかけた。

「ほんとに、かわいいわ」

口紅を塗るリンダにほほ笑みかけながら、僕は言った。

「今夜はきっと、あなたとダンスしたくて、男の子たちが列をつくるわよ」

「なんで、男なんかと踊りたいわけ？」

シンディがまた、口を挟んできた。

「それは、あたしが女の子だからよ。決まってるでしょ。あんたにはわかんないでしょうけどね。あんたは、まだボーイなんだから」

「あたしは、トムボーイよ！」

シンディは、リンダと張り合っ胸をふくらませるようにしながら言っ

た。

「トムボーイって、つまり、ブスってことでしょ。女の子としての魅力がないから、男の子っぽくするしかないわけじゃない」

そのリンダの言葉に、シンディはついに泣きべそをかいた。

「あたし、ブスじゃないもん。ねえ、ママ。ブスじゃないよねえ」

「ええ、ハニー、あなたもとってもかわいいわよ」

僕は、リンダをにらんでつぶけた。

「リンダ、そんなこと言うもんじゃありません」

「だって、シンディの方が、トムボーイだって言い出したのよ」

「妹にちゃんと謝りなさい。あなたは今、レディなんですよ」

僕は、リンダに警告した。

「もしレディじゃないって言うんなら、

すぐにガードルとストッキングを返して。あなたは、ニーソックスを履いてパーティーに行けばいいわ」

リンダの得意げな笑い顔がとたんに曇り、その手を自分の脚に走らせた。どうやら、是が非でもストッキングを守ろうとしているようだ。ソックスを履くくらいなら、髪の毛を切られる方がまだましだとでも思ったにちがいない。

「ごめんね、シンディ。あんな意地悪言って」

リンダは、すぐさま謝った。

「あんたはブスじゃないわ」

シンディは、得意げに腕を組み言った。

「でも、あたしは、トムボーイよ」

「ええ、かわいいトムボーイね」

リンダがそうつけ加えた。

「そうよ。だから、あたしは、男とダ

ンスなんて、ぜったいしないもん」

このダンスパーティへのデビューは、リンダに、少女というより、むしろ若い女性という側面をつけ加えたようだ。彼女自身が、これまでとはちがう自己イメージを持ち、それに向かって意識的に踏み出したように見えた。

あとほんのちょっと女の子らしい演技を身につければ、彼女は、アカデミー賞の本命にだってなれるだろう。

ダンスパーティの会場までリンダを送って行った僕は、彼女が女の子たちのグループに駆け寄っていくところをそっと見ていた。

彼女たちは、順番にターンしてみせ、お互いに今夜のドレスをほめあっていた。そんな輪の中に、リンダがすんなり入ったのを見て、僕はちょっと安心した。

彼女は、友だちが自分のドレスを見せてポーズを決めるたびに、他の女の子とともに手をたたき、嬌声を上げた。

自分の番が来ると、リンダは、スカートをちょっとつまむようにして、くるりと回って見せた。その優雅な動きとかわいらしいポーズに、もはや少年の面影はどこにもなかった。まわりにいたカメラクルーさえ、思わずそれに拍手していた。

パーティの終わりの時刻に合わせて迎えに行き、連れ戻ってくると、リンダの様子はさらにちがって見えた。

自分の部屋に入った彼女は、まず、上に着ていたジャケットを丁寧にハンガーに掛け、ハンドバッグをテーブルに置いた。そこで一度幸せそうにほほえむと、そのバッグの中からコンパクトとリップスティックを取り出し、化

粧直しをはじめた。

そのあと、僕とシンディ(とカメラクルー)が後を追ってリビングルームに入ったところで……

「ああっ、話したいことが、いっぱいあるの」

大きく息を吐くように言った。

「ほんとにすてきだったのよ、ダンスパーティ」

ソファに近づいた彼女は、慣れた仕草でふくらんだスカートの後ろをまとめ、そこに浅く腰掛けてから、お尻を後ろにずらすようにした。そして、きれいな脚を組むと、ドレスの裾をそっと引っ張って、ひざのあたりを整えた。さらに、注意深く髪を直してから、深いため息をついた。

「さっきも言ったけど、ほんとに、すごくすてきだったの。最初は、部屋の片側に女の子たちが固まってて、男

の子たちは、もう片側に固まっていたのね。ああいう時、男の子たちって、みんな弱虫ね。なんだか、おどおどしちゃって。そのうち突然、ピート・ドンテルが……あっ、彼って、学校でいちばんかっこいい男の子なのね。そのピートがこっちに向かって歩いてきた。で、あたしの前まで来て、いっしょに踊ってくれって……」

リンダは、その瞬間を思い出したらしく、ちょっと顔を赤らめた。

「彼は、あたしの方に手を差し出してきたんだけど、あたし、どうしたらいいのかわからなくて困ったての。そしたら、友だちのパムが『早く彼の手をとって』って耳打ちしてくれた。それで、びくびくしながら手を出して、彼の手に触れたとたん、彼は、あたしの手をぎゅって握ってきたわ。で、あたしをダンスフロアに引っ張り出した

の。フロアの真ん中まで来たら、みんなが見てる前で、彼はあたしのウエストに手をまわして、引き寄せた」

「うわっ、怖っ」

シンディが感想をはさんだ。

「そうね。あたしもちょっと怖かった。彼が腕をまわしてくるまでは」

リンダはそう言って、くすっと笑った。

「でもね、そのとたん、世界が変わったの。すごくすてきで、夢みたいだった」

「えーっ？ だって、男が抱いてきたんでしょ。それが、夢みたい？」

「ああーっ、ほんとに、夢のよう……」

リンダは、シンディの言葉が聞こえなかったように、遠い目をして言った。

「そんなふうに、彼は、片方の手であたしの手を持って、もう片方を、あたしのウエストにまわしてきたでしょ。

だから、あたしはもう、逃げられなくなっちゃったの」

「へえ、逃げようとしたの？」

僕は、そう言ってからかった。

「うん、ちょっとだけ。彼に、もっと強く抱いてもらいたくって」

リンダは顔を赤らめたが、つづけてこう言った。

「だって、学校でいちばんかっこいい男の子なのよ。どうして逃げなきゃいけないの？」

さらに彼女は、どこか誇らしげな顔でつづけた。

「あたしたちは、そこで3曲つづけて踊ったの。それから、彼が『なにか飲まない？』ってきいてきた。あたしがうなずくと、飲み物のスタンドまで、ずっとあたしの手を引いてつれてってくれたの。友だちはみんな、すごくうらやましそうな顔で見てたわ」

「他の子とは、踊らなかったの？」

僕がきいた。

「あと2人」

彼女はうなずいたが、すぐにまたこう言った。

「でも、あたし、ほとんどピートと踊ってたのよ」

「それって、もしかして、さっき、あなたを車に乗せるとき、いっしょに話してた男の子？」

「あーっ、もう、彼って最高。ママもそう思ったでしょ？」

「キスも最高だったもんね」

僕は、彼女に考えるすきを与えず、言った。

「ええ、ほんとに」

リンダは、幸せそうな顔で、そう口走った。

「げーっ？ 男とダンスして、男とキスーっ!？」

シンディが、驚いたように聞き返した。

「キモチ悪ーっ。バイ菌うつりそう」

「ええ、それがピート・ドンテル菌なら、あたしって、世界でいちばん幸せな女の子だと思うわ」

シンディがあきれて首を振っているのも気にせず、リンダはいまだ熱に浮かされたように、自分の部屋に戻っていった。

「あたしも、そのうち、あんなふうになるの？」

そうきいてきたシンディのおでこにキスし、彼女にも寝に行くように示しながら、僕は言った。

「そうね、時がくればわかるわよ。ハニー」

翌日からの週末は、比較的静かに過ぎた。日曜の礼拝で、リンダをみつけ

た女の子たちが黄色い声を上げた以外は。

彼女たちはすぐにリンダに駆け寄り、学校でいちばんかっこいい男の子と彼女がどんなふうに過ごしたのか、その詳細を聞いたがった。とりあえず、1時間の出来事を2分間の嬌声とくすくす笑いの中に要約したあと、彼女たちは、ミサが終わってから話そうと約束した。

教会の通路を行くリンダの後ろ姿は、なんだか自信に満ち、その歩き方には、セクシーささえ加わっていた。ちっちゃな僕の娘は、大人になった。

次の月曜日から、僕はウエイトレスとしての仕事を始めることになっていた。

僕はもともとひげが薄く、1週間に一度か二度剃るだけで足りるのだが、

夕方まで働いて目立ってくるのが心配で、前夜はていねいにひげをあたった。

月曜の朝、僕が目覚まし時計は6時に鳴った。娘たちが起きているのを確かめてから、僕は自分の部屋に戻り、ウエイトレスとしての第1日目の準備に取りかかった。

ネグリジェをていねいにたたみ、しまったあと、僕は、胸にブレストフォームを貼りつけた。連続装用は肌によくないということで、週末の夜ははずすことにしているのだ。

僕は、店で働くための制服が、よくあるタイプではなく、あの時のようにピンクのチェックだったらどんなにいいかと思いながら、いちばんきれいなブラとパンティを選んだ。それから、縁をレースでかがったパッド入りガードルを着け、長めのスリッパをかぶり、そして、ストッキングを取り上げた。

残念ながら、今回プロデューサーが仕事先として設定したのは、「レディライク」の時のようなカクテルバーではなかった。たしかに、それでは、今回のママのイメージにそぐわないだろう。

でも、僕にとってそれはうれしいことじゃない。僕は、あの時のようなミニスカートやハイヒールを、もう一度身につけたいと感じていた。あの服は、僕の気持ちを浮き立たせてくれたし、それにだいいちセクシーだった。

今回は、ストッキングにしても、あの時のようなシルキーなものではなく、それをとめるのもセクシーなガードルベルトでなく、機能的なガードルなのだ。

僕は、ストッキングを慎重に巻き込み、そっと足を通してガードルにとめた。

もちろん僕には、長年ストッキングのでんせんに悩まされつづけてきたというような経験はないのだが、それでも、細心の注意を払って破れないように扱う。リンダのドレスへの出費は、我が家の家計を心細くし、一方で、ストッキングが成る木などないのだから。

同じストッキングを何度も履くことなど、なんの苦でもない。ストッキングのしわを伸ばしながら、僕はそう思った。それよりも、かわいいリンダの姿を見る方が、ずっと価値があるだろう。

ワンピースを着て、ボタンをとめ、それからメイクにかかる。

僕のルックスは、30代の女にしては、けっこういける方だ。顔にパウダーをはたきながら、僕はそう思った。

まだ、男を振り向かせることはでき

るし、それは、あのクルージングでもじゅうぶんに証明された。

わからないのは、なぜ僕が、男を振り向かせることにそれほど心惹かれるかだ。

僕が男であることに議論の余地はない。にもかかわらず、僕は男から注目されたがっているようだ。これはやはり、まともじゃないだろう。リンダが、かっこいい男の子の心を射止めたということにすら、僕は、どこかで嫉妬していた。

この日1日は、朝、雇用契約の書類に必要事項を書き込んだ以外は、もうひとりのウエイトレス、ジャンスに注文の取り方を教わりながらいっしょに働き、来店客に給仕することで過ぎていった。

その仕事は、考えていた以上にたい

へんだった。熱い料理をのせたトレイを片手で持ち、テーブルの脚にひざをぶつけながら、通路を行ったり来たりする。しかも、それらを、影のようにつきまとうカメラクルーを避けながらしなければならないのだ。

とはいえ、来店者はみんなやさしくて、ものわかりがよく、僕は、料理の皿を投げつけられるようなこともないまま、仕事を終えていた。

ところが2日目、仕事はさらにたいへんになった。ジャニスと担当時間がずらされ、その教示や助けなしに、僕ひとりで10テーブルの接客を担当することになったからだ。

僕は笑顔を振りまき、来店客ひとりひとりをテーブルに案内し、あちこちで会話を交わし、わからないなりに、なんとか勤務時間をやりきった。

「君は本当に働き者だね、ダルラ」

帰る準備をすませたところで、店長のヒギング氏がそう声をかけてくれた。

「この店のオーナーのハーレーさんは、ここ以外にもあちこちにレストランを持ってる。君を見たら、きっと、正社員として働いてもらいたいと言うよ」

この番組の撮影後、自分がフルタイムのウエイトレスとして働くという発想に、僕は思わず笑ってしまった。

「いや、冗談で言ってるんじゃないんだ」

ヒギンズ氏は、ほほえみながらつぶけた。

「君は、いいウエイトレスとしての素質を持ってるよ」

「ウエイターとしては、どうでしょう？」

僕は、ストレートにきいてみた。ヒ

ギンズ氏は、僕が本当は男であることを知っているはずだ。ところが、彼は、それでも、僕が女として働くことを提案した。

「いや」

彼はにっこり笑って、首を振った。

「君は、ウェイターとしては美人すぎるよ」

その言葉への感謝の印に、僕は彼のほおにキスした。そのときの彼のうれしそうな顔を、カメラクルーがしっかり押さえてくれていればいいかと、僕は思った。

その帰り道、僕は、今起こっていることの奇妙さに、ちょっと首をかしげた。

収録が始まる時点で、僕は、このフォークトンという町の住人たちはみんな、僕らの正体を知っていると聞かさ

れている。1人の男とその2人の息子が、テレビ番組の収録のために、1人の女と2人の娘として暮らすのだということ、ここにいる全員が承知しているはずだ。でなければ、みんなが1960年を装うというこの設定自体が成り立たない。

学校も知っているし、日曜礼拝に行く教会の牧師だって知っている。当然、あの店長やオーナーだって知っているはずだ。

では、男だということを知っているのに、なぜ彼は僕に、フルタイムのウェイトレスになることを提案し、ウェイターとしては美人すぎるなどと言ったのか？

考えてみれば、学校だっておかしい。

全校生徒が正体を知っているはずなのに、どうして少年たちはリンダと踊りたがったのか？ なにしる僕は、そ

のうちの1人が、彼女に何度かキスするところまで目撃しているのだ。

僕は、この混乱したシチュエーションを、なんとか道理立てて考えてみようとしたが、どうしてもつじつまの合わないことが出てくる。

収録期間は、まだ数ヶ月残っている。いずれにせよ、それが終わった時点で、すべてはわかるのだろう。

やがて、ハロウィーンシーズンが近づいてきた。

シンディは、なにか人とちがった衣装が着たいと言い張った。そして、シンデレラやお姫様の格好がしたいのだと言った。

でも、それだけのものをそろえてやる手持ちのお金はなかった。

けっきょく僕は、以前の貧乏暮らしの時同様、彼女に「あるものでがまん

して」と言い聞かせようとしていた。しかしその時、あるアイデアがひらめいた。

「お姫様にもいろいろあるけど、シンディは、どんなお姫様になりたいの？」

僕は、ハロウィーン用のスタイルブックを開きながらきいた。

「えっと……あたしねえ、これが好き」

彼女は、ピンクの薄布が重なったスカートとパフスリーブのドレスを指さした。

「そうね、これ、すてきね。きっと、よく似合うと思うわ。かわいくなるわよ」

僕が言うと、すぐさま彼女はきいた。

「ねえ、いつ買いに行くの？ 今日？」

「それは無理ね。こんな特別にすてきなドレス、買えないわ。だって、売ってるお店なんて、見たことないもの」

とたんに、シンディの顔が曇った。

「じゃあ、なんでそんなこときいたの？

また、がまんしてって言うんでしょ」

「ううん、あたしは、あたしの娘を、
かわいいお姫様にするつもりよ」

そこで僕は、生地を買って作るつもりだと伝え、そうすれば、浮いたお金でティアラも買えると話してきかせた。

「あなたとリンダにも手伝ってもらって、あなたが一生忘れられないような衣装を作ろうと思うの」

と、ちょうどそこへ、リンダが入ってきた。

「なんの話？ 今、あたしの名前が聞こえたけど」

僕は、シンディの衣装をどうやって作るつもりかを説明し、2人が手伝ってくれれば、お古でがまんする必要もないのだと言った。

「それなら、あたしも仲間に入れて」

リンダは、即座にそう答えた。

「あたし、がまんするって言葉きらいよ。それに、あたし、家庭科でいろいろ習ったし」

次の日、僕は、シンディの衣装を作るためのすべての材料を買いそろえた。

この家にはミシンもあった。もちろん旧式だが、それでも立派に使えるものだ。

リンダが帰ってきたとき、僕はちょうど、生地を裁断している最中だった。彼女は、何分間か、突っ立ったままそれを見ていた。そして、きいた。

「ママ、どうしてお裁縫ができるわけ？」

「小さかった頃、あなたのおばあちゃんに教えてもらったからよ」

「でも、それって、おかしくない？」

「なにが？」

「だって、男の子は、昔から、お裁縫を覚えろなんて、言われなかったんでしょ」

「そうね。でも、うちは、男だから女だからって、決めつけるようなことはしなかった。それは、あなただってなんとなくわかってるでしょ。ママが教えてほしいって言ったから、おばあちゃんは教えてくれたのよ。まあ、あなたには今、無理してやってもらってるんだけど」

「方針を、変えたの？」

そのリンダの質問に、僕は一瞬躊躇し、考えてから答えた。

「……ううん、そうじゃないわ。ママだって、今はなにより、必要に迫られてやってるのよ。もし、女になることで大切な家族が守れるんなら、ママは、いつだってそうするわ」

と、彼女は、僕に体を寄せ、抱きしめ、キスしてきた。

「ママは、あたしのヒーローよ」

リンダが出て行ったあとも、僕はまだ、泣いていた。だって……。僕は、娘の……。ヒーロー！

その日から僕は、あいた時間があれば、裁断し、採寸し、まち針を打ち、ミシンを踏んだ。

シンディを立たせて、僕がまち針を打つと、リンダが、仮縫いを手伝ってくれた。このドレスづくりほど、僕と子供たちを近づけてくれたものは、これまでになかった。

仕立て上がったドレスを初めて着せ、ジッパーを上げたとき、シンディは泣き出した。

「すごく……。かわいい」

彼女は、鼻をすすりながら言った。
「あたし、ハロウィーンで、いちばん
かわいい女の子になれるわ」

「ほんとに。シンディ、ママの子供の
時と同じくらい、かわいくて美人よ」

鏡を見つめながら、リンダが言った。

「えっ？ 今なんて……？」

僕は、息が止まりそうになった。

「あ、あたし、美人の子供だったこと
なんて……ないわよ」

リンダがそれに、「しまった！」と
いう顔をした。

「ママ、忘れちゃったの？」

リンダがあわててやめろという合図
を送っているのに気づかず、シンディ
がつづけた。

「ほら、スージーおばさんの聖杯祭の
ドレスを着た時のことよ」

リンダに目を向けると、彼女は、し
かたないという感じで肩をすくめた。

「あの写真を見たことは、ママには内緒にすることになってたんだけど…」

僕がまだあ然とした顔をしていると、リンダは、今度は笑顔を向けてきた。

「でもママ、あの写真、すごくかわいかったわ。スージーおばさんのドレスを着せてもらって、ママ、うれしかったんでしょ。あの写真の顔、ニコニコだったし」

僕は、一瞬とぼけようかとも思ったが、それはよくないという気がした。

もし、このままで収録を終えて戻ったら、その時、僕はスージーを殺すかもしれない。こんな動機があれば、ふつうの殺人より減刑されるにちがいないし。

でも、スージーが子どもたちにあの写真を見せたのには、きっと、なにか

もっと深いわけがあるにちがいない。
「ええ、そうね。とっってもうれしかったわ」

僕は、スージーの妹だった時のことを思い出しながら言った。

「ママ、ペチコートやパンティも履いたの？」

シンディはそうきいてきた。

都合がいいことに、この夜はすでに、カメラクルーは帰ったあとだった。

母と娘の気のおけないおしゃべりには最適だろう。

「あなたたち、ミルクとクッキーを用意するのを手伝って。スージーおばさんの妹のドナのこと、全部話してあげるから」

リビングルームでくつろぎ、僕は娘たちに、僕の「少女時代」について語ってきかせた。

「あの時、スージーおばさんとおばあちゃんのふたりは、ママに、ドレスやペチコートや、ひらひらのいっぴいついたパンティを着せてくれた。それから、ニーソックスや手袋や靴もね。髪もカールしてくれて、ママは、最高にかわいい女の子になっていた。で、キャンディをいっぴいもらったってわけ」

「それは、そのハロウィーンの時だけ？」

リンダがきいてきた。

「ううん、ちがうわ。それからもママは、しょっちゅう女の子になっていたのよ。おばあちゃんからお料理やお裁縫を教えてもらう時は、特にね。ママは、自分のワンピースを2着作ったし、夕飯の仕度だって、いつも手伝ってたのよ」

リンダは、驚いた顔で、確認した。

「ほんとに、ずっと女の子の格好して

たの？」

「ほんとに」

僕の口調は、なんだか誇らしげなものになっていた。

「ワンピースもパンティも、その他いろんなものもすべて着てね。スージーお婆さんは、髪の毛のまとめ方とか、脚のむだ毛そりとか、それに、お化粧のしかただって教えてくれたわ」

「ママは、その格好で、外にも出かけたの？」

今度はシンディがきいてきた。

「よく行ったわよ」

僕は大きくうなずいた。

「時々、お婆あちゃんは、ママとスージーお婆さんを買物にもつれてってくれて、3人で、1日中洋服を見て歩いたりもしたわ」

娘たちは、まだ驚いた顔でこちらを見上げていた。

「じゃあ、今度は、ママの方から質問させてね」

僕は、そう言いながら、リンダに顔を向けた。

「どうしてスーお婆さんは、あなたたちに、あんな写真を見せたのかしら？」

「ほんとのこと言って、シンディとあたしは、これをするかどうか、迷ったの」

リンダは、まずそう言った。

「面白そうだとは思ったけど、恥ずかしいっていうか、ちょっと気味の悪い気もして」

やはり、僕は、いやがっている息子たちに、少女になることを、むりやり押しつけていたんだらうか？

僕は、とりあえず謝ろうと思った。しかし、それより先にリンダがつづけた。

「なにをどう考えたらいいのかよくわ

からなくって、あたしたちは、スージーおばさんにきいたの。ほんとに、男の子が女の子みたいになれるって思ってるのかって」

「そしたら、おばさんが、何枚か、ママの写真を見せてくれたんだよ」

シンディがにっこり笑いながら言った。

「見たら、ママ、すごくかわいくって、美人だった」

「だった？」

僕は、なんだか涙が出そうになり、それをごまかすため、ちょっと怒ったふりをしてみせた。

「あたしは、今も美人よ」

「ごめんなさい」

シンディは、僕に駆け寄り、抱きしめてくれながら言った。

「ママは、世界でいちばんきれいなレディよ」

と、そこで、なにか考えるようにしていたリンダが、きいてきた。

「ママ、ママはドナのこと知ってたの？」

2番目の「ママ」というのは、メアリーのことだろう。

「ううん、あなたのママが活着ている間、あたしは、その小さな女の子のことは一度も思い出さなかったもの」

メアリーのことを考え、僕はさらに、胸がつまる思いがした。

「最初の番組に出ることをスージーおばさんに勧められて、久しぶりに子供の頃のことを思い出したの。で、それもあつたし、なによりお金稼ぎたくてあの番組に出た。そしたら、プロデューサーのワッツさんが、これもやってみないかって言ってきた。今思うと、失敗だったかもしれないわね。それになにより、あなたたち2人をここに連

れて来ちゃ、いけなかったわね」

「どうして？」

間髪入れず、シンディがきいてきた。

「あたしたちがいっしょにいと、ママ、困るの？」

「ううん、そうじゃなくて、あなたたちに、女の子のまねをさせるなんて、やっぱりよくなかったなって」

そこで、シンディだけでなく、リンダも僕の元に駆け寄り、抱きしめてきた。

「あたし、いやだなんて、思っていないわ」

リンダが強い口調で言った。

「だって、毎日、楽しいもん」

「あたしも」

シンディは、そう言って笑いかけてきた。

「カラーテレビやゲームボーイより楽しいよ。そっちもあれば最高だけど」

「この撮影ももうじき終わるから、そしたら、カラーテレビやゲームボーイも戻ってくるわよ。ママだって、全自動洗濯機が恋しいもの。地下のランドリールームの怪物とは、早くお別れしたいわ」

と、そこで、リンダがちょっと口調を変え、こちらの視線から目をそらすようにして言った。

「ねえ、ひとつだけ、お願いきいてくれる？」

「ええ、必ずかどうか約束でないけど、なんでも言ってみて」

「シンディとあたしの分の出演料、少しだけでいいから、もらってもいい？」

「いくらかならね。ほとんどは、あなたたちの進学資金として貯金するつもりだから」

「あたしたち、そのお金で、買いたい物があるの」

「変なものじゃなければいいわよ。なにがほしいの？」

「あの……つまり……うーんと……」

「なに、それ？ よくわからないわ。はっきり言ってごらんなさい」

「ワンピースとかスカートとか」

「えーっ？ 今、なんて言ったの？」

「そういうものをいくつか買って、着たいの。ママが、昔してたみたいに」

リンダは、恥ずかしげに言った。

「本気なの？ ここから戻って、また、女の子の服が着たいってこと？」

「うん。でも、こういうのじゃないのが」

彼女は、今身につけているスカートやペチコートを示しながら言った。

「今の女の子たちが着るようなのが、着てみたいの」

「お姉ちゃんが着ていいなら、あたしだって着たいわ」

シンディも、そう確認してきた。

「1960年なんかじゃなく、今の街に、リンダとママがいっしょにショッピングに行けたら、すてきだと思わない？」

「その時は、シンディも連れてってくれなきゃ、やだよ」

「……ちょっと、考えさせてくれる？」

僕は、早急に答えを出しては後悔する気がして、そう言った。

「よく考えて、もし、いいと思えたら、女の子のものを買う時には、必ずママがついて行ってあげるから」

そこで彼女たち2人は、僕を抱きしめ、キスしてくれた。僕は、それを当たり前のこととして受け入れていた。

そして僕は、パートタイムの娘たちを持つのも悪くないなと感じた。父と息子では、ぜったいにこんな関係は持てない。

ハロウィーンで、シンディの衣装は大ヒットだった。

学校でパーティがあったので、彼女はそれを着て出かけ、注目の的となった。

そのあと、何年間も歯医者を楽しませるほどのキャンディーを抱えて帰ってきた。

それから1週間後、突然、ワッツ氏が訪ねてきた。

カメラクルーは、すでに多くの撮影をした。今でもすでに、編集に何年もかかりそうだと、ワッツ氏は笑った。

「君たち親子は、本当に素晴らしい仕事をしてくれたよ」

彼は、そう言ったあと、こう説明した。

「君たちは、すでに、われわれが求めていた以上のことをしてくれた。もう、

2時間スペシャルにはじゅうぶんな尺数の映像が撮れている。だから、12月に入ったら、予定より早く撮影を切り上げようと思うんだ。もちろん、君たちの出演料は、当初約束した全額が支払われる。早めに終って家に帰れば、君だって子どもたちに、もっと現代的なクリスマスプレゼントを用意できるだろ」

僕は自分が、うれしいと思っているのか悲しんでいるのか、よくわからなかった。

僕はもう、1960年に生きる女性を長い時間演じ、その生活に慣れ親しんでいた。一方、もちろん、こんな暮らしはもうごめんだと思う気持ちもある。

もうすぐ、乾燥機つき全自動洗濯機や電子レンジ、カラーテレビのある暮らしに戻ることができるのだ。そして、小さなアパートや職探しの日々、とり

わけ、友人たちを失う寂しさの中へ。

ここで出会ったすばらしい人々に別れを告げることは、楽しいことだとは思えない。娘たちの先生、教会の牧師、店長やジャニス、それにレストランのお客さんたちも、みんながみんな、やさしくて親切だった。

僕の娘……息子たちに、その話を打ち明けたとき、僕は、彼らがふたたび少年としての生活になじむために、どんなことでもするつもりだったし、彼らがそのことを喜んでくれることを期待していた。ケーブルテレビやゲームボーイ、それ以外にも、彼らの成長とともにほしくなるにちがいないさまざまな文明の利器にあふれた時代。そんな時代に戻ることに、ワクワクしてくれればいいと思っていた。

でも、彼らの反応は、それとは正反

対のものだった。

「いやっ、あたし、帰りたくない」

マークは強く主張した。

「お友だちのお家に泊めてもらって、ここに残る」

「あたしも、どこにも行きたくない」

トミーも、固い決意を示した。

「仲良くなったお友達と、別れたくないもん」

「ごめんね。でも、もう、ここにいることはできないのよ。フォークトンという町はないの。このあとは、全部なくなってしまうのよ。番組のために造られた町だってことは、知ってるでしょ」

「じゃあ、ここにいる人たちはどこから来たの？」

トミーがきいた。

「あの人たちは、番組のためにつくられたんじゃないでしょ？」

「そうよ、ママ」

マークも、すかさずその流れに加わった。

「プロデューサーは、番組のために、ピート・ドンテルをつくったっていの？ ママといっしょに働いてたジャニスはどう？ あたしたちの先生は？」

「それについては、ちよんと答えられるわよ。ここの人たちは、もちろん現実に生きている人間よ。みんな、この近くに住んでいて、番組収録に協力してくれるように、選ばれたの。ピート・ドンテルも、現実の男の子よ。でも、あなただって、現実にはそうでしょ。いくらあなたたちが、自分のことを女の子だと思うようになったとしても、ドレスアップして、あのアパートに戻るわけにはいかないでしょ。マーク、よく考えてみて。もし、家へ帰ったあ

と、あなたが男の子にキスしようとしたら、あなたがどれほど傷つくか。トミー、あなたが女の子の服で学校に行ったら、どれだけはやされ、いじめられるか」

マークとトミーふたりの目から、大粒の涙があふれ出した。

「お願い、ママ、どうにかしてよ。あたしたち、帰りたくない。もとには、戻りたくないの。お願いだから」

「よくきいて。第一に、家に帰ったら、君たちは、僕のことをパパと呼ばなければならない。帰ったあと、ママなんて呼んだらおかしいだろ。言葉遣いも、戻さなきゃいけないね。第二に、そのことで、パパに出来ることはなにもない。今は2005年だ。君たちが過ごした6ヵ月近く、ことに最後の2ヵ月間は作り物でしかなかったんだ。番組のために建てられたセットと同じように

ね」

そこで彼らは、すすり泣いたまま、部屋に駆け込んでしまった。取り残された僕は、これまででいちばんの自己嫌悪の中に落ち込んでいた。

今の僕に、いったいなにができるのだろうか？

僕の子どもたちは、ファンタジーと現実を完全に取り違えている。彼らはもっと理性的だと思っていたが、それは、僕のまちが이었다ようだ。彼らは、1960年というトワイライトゾーンにはまりこみ、少女で居つづけたいと願っている。

トミーは、自分のことを、バトントワリングが得意な12歳の女の子だと思っている。そして、いつかは自分も、ママと同じように美人になれるのだと期待を抱いている。

15歳の息子マークは、今や、自分の

ことを、学校でいちばんかっこいい男の子から心を寄せられる若い娘だと見なしている。彼女は、少年でありながら、1日24時間を少女の夢の中で生きている。

僕は、この番組が専属契約している心理学者、ミセス・グリーンのところに行こうと思った。そこで、長い時間をかけ、じっくり話し込むしかないだろう。でも、そこで出される結論は、現実に戻った少年たちに女の子の服を着せて暮らさせるような危険は犯すべきでないということにちがいない。

次の月曜日、僕は、みんなに別れを告げに職場に行った。店長のヒギンズ氏は、オーナーに呼ばれて出かけていて、いつ帰るかわからないということだったので、少しの間だけ、ジャニスと話しながら待つことにした。

彼女は僕を強く抱きしめてくれた。
「ダルラ、あなたと別れるのはつらいわ。ねえ、いっそのこと、このまま、ウエイトレスにならない？ ヒギンズさんは、ここの仕事が片付いたら、オーナーのハーレーさんのところへ戻ることにしてるの。彼に頼んでみたらどう？」

「ジャニス、わかってるはずなのに、なんでそんなこと言うの？ あたしは、ほんとは女じゃないのよ。2人の息子を持つ父親なのよ」

「ええ、でも、それがどうかしたの？
あなた、ウエイトレスの仕事が好きだって言ってたじゃない。それに、首を切られて仕事がないんでしょ」

「そりゃ、この仕事は大好きよ」

僕は、ジャニスが、この期におよんで、からかって遊んでいるのかもしれないと思い、ほほえんだ。

「だけど、男がウエイトレスなんかやっていたら、人はなんと思うかしら。気味悪がるだけでしょ。だいいち、この店も、町といっしょになくなってしまおうわけだし」

「誰がここで働くって言ったの？」

ジャニスは、そう言って笑った。

「ここから3マイルほど南に、フォークビルって町があるの。本物の町ね。ここにいた人たちは、だいたいそこから来てたの。で、ハーレーさんは、そこでレストランを経営してる。ヒギンズさんは、ほんとは、そこの店長なのね。お客さんたちも、ほとんどがあなたの顔なじみのはずよ」

「ありがとう、ジャニス。でも、あたしは、お別れを言い、ちょっと寄っただけだから。ここにいた人すべてが、あたしと家族たちにやさしくて親切だったことに感謝してるわ。だけど、撮

影はもう終わったの。あたしたちは、家に帰らなくちゃいけない」

ジャニスはもう一度僕を抱きしめ、幸運を祈ってくれた。そして、彼女の住所と電話番号を教えてくれ、これからはもずっと電話してくれと言った。さもないと、彼女は僕を追いつめ、連れ戻して、一生をウエイトレスとして暮らせるのだそうだ。

ミセス・グリーンとのアポが迫っていたから、僕は急がなければならなかった。彼女と会って、息子たちをもとの生活に順応させる方法を相談することになっていたのだ。

会ってみると、彼女は、これからはもずっと友だちでいたいと思うようなすてきな女性だった。もつとも、これから会うとすれば、ドナルドとしてということになるのだが。

ミセス・グリーンは、僕の息子たちについて、2時間以上におよび、親身になって相談に乗ってくれた。

彼女の話聞いて驚いたのは、息子たちが、すでに数週間前、彼女を訪ねてきたということだった。そこで、彼らは彼女に、女の子になりたいと言ったというのだ。

彼女は、何時間もかけて彼らと話し合い、そのことを、彼女の口から僕に伝えることを約束した。僕が電話して面接を申し込んだとき、ちょうど彼女の側から電話するつもりだったのだと、彼女は言った。

「あの子たちの決意は固いみたいね」

彼女は、そう切り出した。

「正直に言って、私は、あなたたち3人が、あれほどうまく女性であることに適応するとは思ってなかったわ。最初、私は、この企画は必ず失敗する、

私の家の権利書を賭けてもいいなんて言ってたのよ。ほんとにそんなことしてたら、今ごろ私は、ホームレスになってるでしょうね」

彼女は、そう言って笑ったあと、さらにつづけた。

「私はこれまでも何度か、トランスジェンダーの子どもたちに関する仕事をしてきたけど、あの子たちの場合、かなりはっきりしてると思うわ。聞きたくはないかもしれないけれど、あの子たちは、これまでジェンダー・ディスポリア(性的違和)を抱えて、ずっとそれを抑圧してきたんだと思うの」

「ジェンダー……なんですか？」

「簡単に言うと、あなたの息子たちは、男であることに居心地悪さを感じつづけてたってこと。だからこそ、あの子たちは、少女として生きるチャンスに飛びついた。そして、まわりの期待を

遙かに超えて、それに成功してしまった。私の専門家としての見地から言って、あの子たちはまちがいなく、女の子の服を着て、今を生きる少女として、どこにでも完全にとけ込めるはずよ」

僕は呆然として聞き返した。

「つまり、マークとトミーは、男として生きるより、女として生きる方がいいということですか？」

「私は、あの子たちにいくつかのテストも受けてもらったの。その結果は、あきらかに、あの子たちが、女性役割の側にいることを示してたわ」

ミセス・グリーンは、データを取り出しながら説明した。

「もちろん、体に異常があるわけではないから、あの子たちは男性として成長できるでしょうね。でも、あの子たちの核となるパーソナリティーは、男性役割の中にすんなり落ちつけるとは

思えない。もし結婚するとすれば、相手は支配的傾向の強い女性、仕事の面でも、中から上位の管理的業務についている、もしくは、男性の入り込めない仕事の分野で力を発揮している女性ということになるでしょうね」

僕は、彼女の話をあ然として聞いていた。

「そして、あなたの息子たちは、いわば理想的なハウスハズバンドとなるはずよ。家事や育児に積極的に取り組み、それを上手にこなす。彼らの妻は、そのことにより、外の社会で心おきなくキャリアを積める……というようなね」

彼女はそこで一息つき、さらにつづけた。

「あの子たちのパーソナリティの女性的側面は、何年間も眠らされていた。そして、ある特異な機会にめぐり合っ

たことで、あの子たちの女性としての性格が一気に活性化した。つまり、今回のような番組に関わったことで、これまでの生活ではほとんど表現できなかったものを表に出すことができ、あの子たちは、初めて居心地のいい場所を見つけた……ってことね」

僕は、信じられない思いで、ミセス・グリーン顔を覗き込んでいた。

今、彼女が語った息子たちについての分析は、そのまま完璧に、僕の生きてきた道なりに当てはまるのだ。少女として女物を着ていた幼い頃の経験、その時、どれほど少女として適応できたか、メアリーとの結婚生活、今回の番組に出たことで僕の中に起こったこと……。

「今、あなたが息子たちのことを話しているのはわかっています」

僕は、彼女に自分自身の人生について

て話す必要を強く感じ、静かに言った。
「でも、まるで、あたしのことを言われているみたいでした」

それから僕は、自分のことについて語った。ダンとの間にある感情のこと、そして、この番組の中で僕がいかに居心地がよかったかということ……。すべての話が終わり、僕は、ミセス・グリーンに、今後もあれこれと手を貸してほしいと頼んでいた。マークとトミーの葛藤を解決する方法を見つけ出すために。そしてたぶん、僕自身の問題を解決するためにも。

僕がミセス・グリーンと話し合い、今後、僕らの問題をちゃんと解決していくつもりだと語ったとき、息子たちは感激したようだ。

僕は出来るかぎりのことをすると約束し、同時に、すぐに問題のすべてが

解決するわけではないのだということも納得させた。性の再決定手術がもたらすはずのさまざまな問題に対するには、彼らはまだ若すぎたし、また、僕ら3人の戸籍を、母と2人の娘に変えるには、さらなる困難が予想されたからだ。

僕は、ジャニスが言っていたことを思い出していた。フォークビルという町で仕事に就くという話だ。ヒギンス氏がその店の店長を務め、来るお客さんたちも、僕の顔なじみだと言っていた。

それは、けっして確証の持てる話ではないのだろうが、なぜか僕はもっと詳しく聞いてみたいという気になっていた。それで、息子たちといっしょに、レストランまで行ってみた。

店に入ると、ジャニスはひとり、店

内のものを荷造りしていた。ヒギンズ氏は、どうやら店の奥のブースで、オーナーのハーレー氏と引っ越しの段取りを相談しているようだ。

「まあ、もう出て行ったんだと思ってたわ」

礼拝用のドレスを着た僕たちが入ってきたのに気づき、ジャニスは、にっこりと笑った。

「またダリルやこの子たちに会えるなんて、考えてもみなかった」

「じつは、この前の今日で、合わす顔がないんだけど……」

僕はちょっと恐縮しながら言った。「勝手なことを言うのを許してね。この前、この近くの町に仕事があるって言ってたでしょ」

そのとたん、ジャニスは歓声を上げ、僕を抱きしめた。

「もし、あなたがやる気になったんな

ら、ヒギンズさんは、今出してるウエイトレスの募集を、すぐに打ち切るはずよ」

「ここでの仕事は本当に楽しかったから、もしかしたらあたしは、ウエイトレスに向いてるのかなって気がしてきて……」

「そりゃそうよ、あなたは、いまのままで、最高のウエイトレスよ」

ジャニスは笑いながらいった。

「なにしろ、教えた人がよかったからね」

「でも、まわりの人はどう思うか……」

僕はスカートに手を当てながら、かわいい娘たちに向かって、同意を求めるようにうなずいた。

「ちょっと、フォークビルっていう町について、話した方がいいみたいね」

そう言いながら、ジャニスは、僕ら3人をブースのひとつに連れていき、

座らせた。

そして、ひとり息子が男として生きていけないことを苦に自殺してしまったある夫婦によって造られた町の物語を語った。

その町、フォークビルは、今では、トランスジェンダーのコミュニティーとして知られていた。町全体が、ジェンダーに対して非常に柔軟な考え方を持っているのだという。

もし、ひとりの男性が、女性として生きる方が快適だと考えるなら、この町で彼は、ひとりの女性として歓迎される。もしひとりの女性が、自分は本当は男なのだと感じているなら、彼女もまた男としてフォークビルの住人になれる。時には、家族全員がスイッチした一家が転居してくることもある。父親、母親、息子、娘——そのすべて

が性的役割を取り替えているのだ。

ジャニスの説明によると、フォークビルは、誰が考えるよりジェンダーに寛容な町だが、ただしそれは、無原則というのとはちがう。

フォークビルにはこんなキャッチフレーズがある——「行ったり来たりは許されない」。自分のジェンダーを決めたなら、それにとどまりつづけなければならないということだ。そして、自分の決めた性に合った服装と表現をしなければならない。「男」はドレスを着てはいけないし、「女」はひげを生やしてはいけない。といっても、決定を保留したまま、納得いくまで新しい性を試してみることはできて、もし、その間に、一生をその性で生きることによって不安を感じた場合は、一度だけ後戻りが許されている。そして、いったんジェンダーを決定したら、それ以前の

人生は忘れられ、それ以降、人々は真の自分自身として生きる……。

「でも、フォークビルに住んでいるのが、全部トランスジェンダーというわけでもないのよ。たとえば私の場合……」

ジャニスはさらに説明をつづけた。

「私はこの近くで生まれて、この町に住む男と恋に落ちた。両親は、私の婚約者がじつは以前女だったことを快く思わなかった。それで、私はひとりでこの町に嫁いできた。でも、両親にも、彼があらゆる面で男で、私のことを心から愛していることがだんだんわかってきて、今は喜んでくれてるけどね」

僕は驚きの思いで、首を振っていた。

「あたしにとって、パーフェクトな町だって気がするわ。あと、あたしのやることは、ヒギンズさんに頼むだけね」

「ヘイ、ジョージ」

ジャニスは、男たちがいる奥のブースに向かって叫んだ。

「ここに、仕事を探してる女性がいるんだけど」

「ここは、もう『町じまい』だからね」

ヒギンス氏はそう言って笑いながら立ち上がると、こちらに近づいてきた。

「もし経験者なら、フォークビルの方の店で働いてもらいたいんだが」

「彼女ならバツグンよ、ジョージ」

ジャニスは振り向きながらいった。

「まちがないわ。なにしろ、私が教えたんだから」

こちらを向いたヒギンズ氏は、信じられないというふうに目を見開いた。

「えっ、ダリル？」

「あたし、まだこっちにいたんです、ヒギンズさん。もし雇っていただけるなら、うれしいんですけど」

「本気なのかい？ 行かないで、フォービルに住むってこと？」

「あたしの家族には、最適な町だって聞いたもんですから」

僕は、ほほえみながら言った。

「娘たちは、きっとその町を気に入ります。もちろんあたしも」

「ジャニスの言うとおりのだ。君ならバツグンのウエイトレスだよ。いつから勤められる？」

「住むところを探して、それに、まず、娘たちが、現実の学校に行けるように、手続きをとらないと」

「それなら、オーナーのダン・ハーリーが助けてくれるよ。彼は、町の実力者だからね」

そう言って、ヒギンズ氏は、さっきまで座っていた方を振り向いた。

「へい、ダン。来てくれないか。うちの店の新しいウエイトレスが、困って

るんだ」

「ああ」

聞き覚えのある声の主が近づいてきた。

「なにか僕に、お役に立てる……」

その言葉が、途中で息をのむようにとまった。

「ええっ、うそだろ……」

見上げたシンディとリンダが、顔を見合わせてくすっと笑い、お互いをつつき合うようにした。

「そう……だよね」

シンディがささやいた。

「あの人、だよね。クルージングの人」
クルージングの人？　なんで、この子たちが……

僕は、心のどこかでそう感じながらも、ハーリー氏を見つめていた。

自分の目が信じられなかった。クルージングの人、そして、僕の夢の中の

人、ダンにまた会えるなんて。

「ダルラ、本当に君なんだね。テレビのために造られたこの町で、1960年に戻って暮らす女性がダルラという名なのは聞いてたが、まさか、君だったとは、思ってもみなかったよ」

「君たち2人は、会ったことがあるのかい？」

ヒギンズ氏が、僕らの顔を見比べながらきいた。

「ほら、ダルラって言ったろ。クルーシングから戻ったあと、僕が話した……」

「……えっ、それが彼女なのかい？ダン、君が、忘れられなくなったっていう理由がわかったよ」

ヒギンズ氏は、驚きとともに、僕を見た。

「ダルラ、あなただったのね。この墮落した中年男を、まるで恋わずいのテ

インエージャーのようにしちやった人は。……私、なんだか、涙が出てきそう」

ジャニスが叫ぶように言った。

そんなまわりの声が聞こえないほど、ダンを見つめる僕の心はうちふるえていた。

でも、あることに気づいたとたん、僕の心は、奈落の底に突き落とされた。

ダンはまだ、僕が本当は男だと知っているのだ。

「ごめんなさい、ダン」

僕は、ダンから視線をそらせて言った。

「あなたを困らせるつもりなんて、なかったの」

そして、ヒギンズ氏の方を見て、こう告げた。

「けっきょくあたしは、フォークビルには住めそうもありません」

「待って。行かないでくれ」

ダンが、すかさず叫ぶように言った。

「もう二度と、君を失いたくはない」

「でも、あたしは、あなたのことをだまして、コケにしたのよ。人として、許されないことをした……」

おそらく、ダンは今、この世で最大の敵に相まみえているのだ。怒りに震えながら。

「行かないで。お願いだ。君と会えなくなるなんて、僕にはもう耐えられない。あのクルージング以来、僕は、一時も、君のことを忘れることは出来なかったんだ」

「で、でも……あたしは、男なのよ」

僕は、恥ずかしさに頭を垂れ、言った。

「ああ、あの番組を見たよ」

ダンは、やさしい声でそう言い、僕の手をとった。

「もし君が、ここにとどまってくれて、
フォークビルに住んでくれるなら、君
は女だ。僕の求める女性だよ」

ダンは僕の手をとったまま、僕の前
に片方のひざを立ててひざまずき、そ
して……結婚してほしいと言った。

「ねえ、ママ、そうして」

娘たちが、ささやいた。

「ダン、あたしだって、あなたのこと
を忘れられなかったわ。だけど、結婚
なんてできない」

言葉の途中から、完全に泣き声にな
っていた。

「たとえ見かけはどう見えようと、あ
たしも男なのよ」

「君……も？」

彼は、そこでちょっと笑った。

「たとえ見かけはどう見えようと、僕
は、そうじゃない。だから、そこには、
なんの問題もない。結婚、してくれる

ね？」

彼はそこで、彼自身のことを話してくれた。

彼は、12歳の時まで、ダニール・クリスティン・ハーレーという名の女性……社会が彼女のために用意した役割を、どうしても受け入れられない女性だった。

彼女は、両親を困惑させつづけていた。フリルのついたドレスや、お人形遊びや、その他、小さな女の子に期待されるものすべてを拒みつづけたからだ。

彼女は木登りをしたが、フットボールをやりたがるばかりでなく、クォーターバックとして、フィールドの上でチームをリードすることを夢見ていた。

女の子はかわいいものが好きはず

なのに、ダンは、パワーを求めていた。男にのみ約束されたパワーを。

彼女が12歳の時、彼女の家族はフォークビルへの引っ越しを決意した。そして、彼女は、ダニエル・クリストファー・ハーレーとなった。高校に入ると、ダン・ハーレーは、フットボールのスタープレイヤーになった。もちろん、クォーターバックとして。大学では経営学を専攻し、卒業後、レストランの経営から初めて富を築いていった。そして、それを、4店舗に拡大し、最近では、自動車販売業をも営んでいる。今、彼は、それら3つの分野で、大きな影響力ある男と目されている。

そして、彼は今、ひとりの女性に恋していた。

「あのクルージングで、君にはなにかがあると感じたんだ、ダルラ。君には、

これまでつきあった女性にはなかった、僕を惹きつけるなにかがあった。僕と共通するなにかを君は持っていた」

僕は、笑いをこらえることができなかった。

「あたしも、同じことを感じてたのよ、ダン。でも、娘たちの前で、その話はしない方がいいと思うわ」

「どうか、早くイエスと伝えてくれよ」

まだ僕の前にひざまずいたままのダンは、言った。

「フットボールは、僕のひざには、やさしくなかったんだから」

僕は、あわてて彼を引き寄せ、キスした。しかし、そのキスは、またけっきょく、彼の体を痛むひざの上に押し戻すことになった。

娘たちが歓声を上げた。ジャニスは泣いていた。ヒギンス氏はダンの背中

を手荒くたたき、彼を祝福した。

「これで、あたしは、仕事が決まったのかしら？」

「仕事だけじゃないよ」

ダンはそう言い、僕の体を腕の中に包み込んだ。

「君の望むことなら、何でもかなえてあげたい」

次の日、娘たちと僕は、フォークトンを出て、フォークビルの小さなアパートへと移り住んだ。ダンは自分の家でいっしょに暮らそうと言ったが、僕は、正式に結婚するまではだめだと、それ断った。母親として、娘たちに悪いお手本を示すわけにはいかない。

娘たちは、ささやかな新居披露パーティを開くのを手伝ってくれた。ジャニスと彼女の夫、ヒギンズ氏、そしてもちろんダンを招いたものだ。

僕は、『レディライク』のスタッフから送られてきた例のビデオをを持ち出し、みんなに見せた。ビキニ姿の僕がいかにもホットだったか、全員がわかってくれたようだ。

娘たちは、このビデオを前に見たことを白状した。スージーのところに行ったときに、僕が預けたままになっていたこのテープを見つけ、2人でこっそりかけたのだという。美しい父親が繰り広げる海上のロマンスを、彼女たちは驚きと興奮をもって見たらしい。

だから、レストランでダンの顔にすぐ気づき、彼女たちは神の存在を確信して、ダンが僕に結婚を申し込むにちがいないと思ったそうだ。

その数日後、娘たちの学校の転校手続きを終え、車で帰宅する途中のことだった。

信号で停まった横の歩道を、ひとりの若い女性が歩いていくのが見えた。僕はあわてて車を寄せた。

「パティじゃない？　そうでしょ」

僕が呼びかけると、立ち止まったその女性は、僕の方を振り返った。

「ママ！」

彼女は、叫びながら駆け寄ってきた。

「信じらんない」

「それが、久しぶりに会った母親に向かって言う言葉？」

僕は、そうからかった。

「女の子なんだから、せめて、『あら、ママ。お元気？』くらいは言えないものなの」

「あら、ママ。お元気？」

彼女は、笑いながら言い、さらにきいた。

「で、こんなところで、なにしてんの？」

僕は、彼女の目の前に、婚約指輪を

かざしてみせた。

「ダンとの結婚準備をしながら、あなたの妹たちを育ててるのよ」

彼女は僕の手をひつつかみ、そのリングに見入った。

「これって、宝石？ まるで岩じゃない」

「あたしの未来のダンナは、勝ち組なんで」

僕は、つんとすましてみせ、言った。

「あたしって、幸せな女ね」

「どうやら、そうみたいね」

彼女はうなずた。

「ダンって、あのクルージングの時の人？」

「他に誰がいるの？ 来年2月に結婚する予定なの。もし、その時、このあたりにいるなら、来てくれる？」

「今通ってる大学が、この近くのの。住所を教えるわ」

「レディライク」以来、お互いの身になにが起きたのか、それを話すために、僕は彼女をランチに誘った。

パティは、あのまま、男には戻らなかったのだという。女であることが自分には合っている気がし、その実感に忠実に生きようと決めた。トランスジェンダーの支援グループからフォークビル大学のことを聞いた彼女は、そこに転入した。専攻は今も経営で、将来は、ボーイフレンドが起業した会社の経営を手伝おうと計画しているらしい。

「今も、彼のところで、パートタイムで働いてるのよ」

彼女はそう言ってくすくす笑うと、ハンドバッグの中から、1枚の写真を取り出した。

「マーティは、企業のIT分野のアド

バイスをするコンサルタント会社をやっているの」

僕は、その写真を見て、ほほえんだ。

おなじみの赤いドレスを着たパーティの隣で、タキシード姿で立っている男は、「レディライク」の時の友人、ミッシェルだった。

「2年後にあたしが卒業したら、結婚するつもりなの」

その声からは、マーティの妻になることに対する彼女の喜びが伝わってきた。

「彼って、あたしのこれまでの人生の中で、最高の存在なの」

僕の方も、この数ヵ月間に起きたことを伝え、どんな経緯で、また彼との恋に落ちたかを話した。

「ペチコートでふくらんだスカートを履いてたの？」

彼女はため息をついた。

「あたしも、あこがれるわ」

「服はたしかにすてきだったわ」

僕もそれは認めた。

「でも、できれば、ガーターベルトか、それともパンストがほしかった。毎日ガードルをはいて暮らす苦しさ、あなたにはわかんないでしょうね」

「なにかを着るために、体にあれこれ着けるなんて、あたしも、あの番組で懲りたわ」

彼女はそう言いながら微笑し、バッグから薬のケースを取り出した。

「今は、エストロゲンを使ってるのよ」

「もし、暇があったら、一度遊びに来て。あなたの妹たちを紹介したいし、ダンにもまた会えるわよ」

「あら？ 子供は2人とも、男の子じゃなかったっけ？」

彼女は、笑いながらきいた。

「数ヶ月間、娘として暮らす前まではね。あなたもどう？ 久しぶりに、母親ごっこ、娘ごっこなんて？」

「必ず行くわ。マーティも連れてってもいい？」

「ミッシェルは、来られないの？」

「彼女は、あれ以来、あんまり出てこないわね」

パティはまた、くすっと笑いながら言った。

「あたし、マーティに、男としての幸せを、思いっきり味わわせてあげてるもん」

その数日後、2人が訪ねてきた夜は、本当に楽しかった。

男としてのミッシェルに会うのは、なんだか奇妙な感じがしたが、僕の「長女」は、彼といっしょにすることで、本当に幸せそうだった。ふたりの生活

には、きっと、そう思えるだけの「こと」があるのだろう。

ダンもまた、パティとの再会を喜んだ。もつとも、パティは、我が家にいたほとんどの時間、リンダとシンディに独占されていた。

彼女たちにとって、自分たちと同じ感覚を持っていて、しかも自分たちと年の近い彼女は、興味深い存在なのだ。

ことにリンダは、パティが、その女性的な体型をつくり出すために、ホルモンをどう使っているのか、さかんに知りたがった。

たぶん近いうちに、僕が今通っているドクターのところに連れて行き、彼女の女性化を本格的に始めることになるだろう。

ついに、結婚式の日がやってきて、僕は、過敏な花束になっていた。

スージーと両親は、遠くからでも、当然のように飛んできてくれた。僕は、日中のほとんどをママや、スージーや、娘たちとともに、ウエディングドレスの着付けに費やした。

スージーが花嫁の付き添いになってくれ、娘たちがブライドメイドをやってくれた。

僕は、僕をこんな日に導いてくれた思い出として、ペチコートが必要とするウエディングドレスを選んでいった。でも、僕も娘たちも、その下にはパンストを履いていた。ペチコートはいいにしても、リンダと僕にとって、ストッキングは、どうしても面倒な気がしてしまうのだ。

タキシード姿のダンは、本当にハンサムだった。花婿の付き添いはヒギンズ氏だ。

ジャニスの2人の甥が、リンダとシ

ンディのエスコート役として選ばれていた。リンダは、自分のエスコート役が、ジャンスの年長の甥、ピート・ドンテルだと知ったとき、泣きそうになった。シンディの方も、最近、男の子に興味を持ち始めているらしく、やはりカッコいい自分のエスコート役に対し、まんざらでもなさそうな顔をした。

その時が来て、僕の手をとったダンには、その指に指輪をすべらせた。そして、一生、愛し、尊び、大切にすると誓ってくれた。

僕が返事をする番になったところで、僕は声を出して泣き出してしまい、スージーが落ち着かせてくれるまでの1分ほど、式がストップした。

僕らは、ワッツ氏と、「レディライク」の制作スタッフたちも、式に招いていた。ワッツ氏は、結婚祝いとして、僕の人生で最も幸せな瞬間を記録する

ため、完全編成のカメラクルーを連れてきた。僕を女にし、妻にしたのは「レディライク」のせいだと感じ、最低限の責任をとろうと思ったのだろう。でも、その結果、僕は、世界で最も幸せな女になれたのだ。

式のあと、スージーがしばらく残ってくれて、娘たちの面倒を見てくれたので、僕らはハネムーンのクルージングに出かけることができた。

1人の男とその妻として寄り添い過ごしたの初めて日は、ほんとうにロマンチックで、船の上で初めて出会い、恋に落ちたあの日を思い起こさせた。

ダンは、やっぱり最高の恋人だった。僕は、まるで天国にいるように感じ、船室(のベッド)から一步も出たくなかった。

数ヶ月後、僕らは、これからの人生を共に歩く記念として、お互い特別なプレゼントを交換した。

ダンは、もういらなくなった子宮と卵巣を僕に、僕は、もういらなくなったペニスと睾丸を彼に、贈り合っただ。

その手術が期待以上に成功しただけでなく、やがて、僕らのもとに、さらに驚くようなもうひとつのプレゼントが届いた。……なんと、僕は、妊娠したのだ。

妻として、2人の美しい娘の母として、そして、おめでたの日を待つ妊婦として、僕は……あたしは、今、この上ない幸せの中にいる。

あたしの人生に、これ以上望むことがなんて、あるだろうか

CopyRight (C) 2005 by Karen Elizabeth L.

Based on the text FictionMania

Translated by Rino Maebashi

この『「やらせ」なんか怖くない』は、カレン・エリザベス・Lさんのオンライン小説“Making Do”を、前橋梨乃が日本語訳したものです。原作著作権はカレン・エリザベス・Lさんが、翻訳著作権は前橋が保持します。個人で楽しむ以外、無断でのコピーを禁止します。